



再生の人

ル・ペグビー原著

334
205

救世軍出版及供給部



始



特 230
274

ハロルド・ベグビー原著



再生の 人

東京 救世軍出版及供給部



熱烈ならざる心は純潔にあらず、
熱誠ならざる徳は確實にあらず。

(シイレイ)

序

この數年間英語國民の間で、最も廣く讀まれた書物の一つは、此の『再生の人』の原書（英國では“Broken Earthenware” 米國では“Twice-born Men”）であつた。我が日本でも基督教内部の人ばかりか、外部の人からも、幾度か翻譯して出版し度といふ希望があつたが、其の原書の版權が救世軍にあること、又一つには、此の書の記事が救世軍に關係して居るので、相成るべくは之を救世軍の方から出版し度といふのが、私共の願であつた。此度友人高垣勸次郎氏に請うて其の周到綿密なる譯文を得、これを發行することゝなつたのは、眞に歡喜に堪えざる所である。

此の書の著者ハロルド・ベグビー氏は英國の有名なる文學者である。自分は救世軍に屬しては居らねど、不圖したことから救世軍に興味を有つやうになり、數年前自ら實地に就いて其の事業運動を研究し、終に此の書を著すに至つたのである。ベグビー氏が一日其の調査した不思議な回心者の事實談を、バアミンガム大學の總長、サア。

オリバア・ロッヂ氏に披露に及ぶと、サア・オリバアは之を聞いて感嘆措く能はず、『科學は多くの事を説明すれども、未だ斯る不思議な出来事を説明することが出来な
 い。これは「神の奇蹟」といふの他はない』と、言はれたさうである。私共は『再生の
 生の人』を讀む人々が、此の「神の奇蹟」の力を發見せられんことを願うて止まぬの
 である。法律でも、教育でも、金錢でも、又は倫理道德でも、持餘した人を救ふ一つ
 の大きな力がある。それは即ち基督の救の力である。私共は我が國を憂ひ、民を思
 ふ人々が、皆、此の大なる力を認めて、自らに經驗し、他人に及ぼすに至らんことを
 切望する。此の意味からして、此の『再生の人』の發行に至つたことは、歡喜に堪え
 ないのである。

此の書物の讀者は、一旦所謂救を受けた人々が、それ以來如何に他人の救に熱中す
 るものかといふ、著しき事實を此の書物の中に發見せられるであらう。私共は自分だ
 け救はれて、天國に行けば可いといふやうな、利己主義の基督教に用がない。私共は
 他人を救はん爲に救はれたのである。人の靈魂を愛すればこそ、愛の神の子となつた

といふことも出来よう。私共は我が日本の基督者の間に、もつともつと『喪はれし者
 を尋ねて救ふ』心の發揮せられんことを願ふものである。此の意味から言うても、其
 の活きた模範を示す此の書物の如きものが、日本語にて發行せらるゝに至つたことを
 喜ばざるを得ない。

私共は又此の書物の奇蹟が、神の力を外にしては、一箇の女性の直接間接の盡力に
 由つて、行はれて居ることを發見する。目下婦人問題が漸く盛んになり、我が同胞姉
 妹が大に其の地位責任を自覺し始めた今日、私共は婦人の神の國に於ける運動、救靈
 及び社會事業に對する奉仕の如何に有効にして且必要缺くべからざるかを、具體的に
 説明する、此の書の如きが發行せらるゝに至つたことを祝賀するのである。

最後に、私共は、此の世界を驚かした人間改造の奇蹟が、救世軍中に行はれたこ
 とを忘れたいないのである。神は今の時代に特別の必要あつて救世軍を起し給うた。
 去半世紀間、世界に於ける救世軍の活動は、それ自身、既に一箇の最も大なる奇蹟で
 ある。世には救世軍に依らざれば救ふ可からざる民がある。救世軍は他の宗教若くは

社會事業團體の向を張る爲に出來たものでなく、反つて、救世軍には其の特別の使命のあることを知り、之を行はん爲に出來たのである。殊に注意すべきは、此の『再生の人』の中にある出來事、救世軍の社會事業に起らずして、所謂小隊に行はれたことである。何も社會事業に、斯うした事實が起つて居ないと言ふのでは無い。起つて居る。擧げて數へることの出來ない程多く起つて居る。併し乍ら少くとも此の書に記録せられた事實が、悉く、皆所謂小隊に於て起つたものであると知るのは、興味のある話でなくてはならぬ。救世軍は何の物數寄で太鼓を叩いて歩くか、軍旗を押立て、行軍するか、新聞を街頭に賣るか、制服を着用するかと、訝る人々は、斯くして經營せらるゝ小隊の事業が、往々にして此の『再生の人』に見る如き、驚天動地の大奇蹟を生んで居ることを知らねばならぬ。結果は方法を是認せしめる。救世軍人が若し其の制服、行軍、野戦、其の他の方法を採用するが故に、他人から飛んだ物數寄、又は狂沙汰と呼ばるゝならば呼ばれた處で、これに由つてさもなくば救ふ可からざる人々を救ひ、而して神の御國の建設を助けることが出來たならば、それも結

構なことではないか。私共は初から『基督の爲に愚となる』ことを甘んじつゝ、此の軍隊に身を獻げたものだからである。唯此の上の願は、神の御助と、戦友及び軍友の協力とに由り、何卒此の『再生の人』に見る如き現代の奇蹟が、倫敦ではなく、我が日本に、然り銘々の屬する小隊に、引續き盛んに行はんことである。私共は之が爲に召されたのである。それ故亦之が爲に身を粉に碎いて奮闘せねばならぬ。『耶穌基督は昨日も、今日も、いつ迄も變ることなく』救主で在し給ふ。

救世軍本營にて

山室軍平

再生の人

目次

緒言	一頁
一 倫敦の一部	二六
二 拳闘家	三六
三 持餘者	六五
四 酒飲親爺	九五
五 常習犯人	一二三
六 警官虐待者	一七〇
七 動物以下	一九九
八 鉛板工	二二三

九 檻樓屋……………二六三

十 外見上の失敗……………二九四

跋……………三三三



再生の人

緒言

ハロルド・ベグビー著

此書物を書かうと思ひ、不思議な想像にも及ばぬ材料を集めて居ると、種々の情緒が纏綿して、當初の見解は、新しい發見毎に幾度か變化し來り、局面は多種多様に展開して益々私を迷はすのである。

乍然、今、私の學んだ處を實際筆に上せ、又自ら見世物師、劇作家、又は著者の態度を執つて、此の數週間交り來つた幾人かの人々に就て記す事になると、一つの特別な感情、即ち内側から起る壓しつける様な強い感情の湧き起るのを覺える。實際、私がこれらの恐ろしい悲劇、限りない悲憤、驚くべき心理、苦惱と沈痛、深遠なる靈的

實驗が悉くロンドンのある一郭で起つたのだといふことを知つた時は、どんなに驚かされたか、それは説明するまでもない。

此書物には、身分の低い、極めて普通の人間の話を記すのであるが、其中には、必ず心理學者、社會改良家、犯罪學者、神學者、はたまた哲學者達を困まらす様な驚くべき心理學がある。今この不思議な心理學を、ロンドンの一郭から掘り出して公衆の觀覽に供するのであるが、その一郭と云ふのは、此大都會の西端に群り集つて居る、二三の見る影もない町で、一種獨特の郭をなし、特種の名稱を以て呼ばれ、丁度、紳士的な克蘭フォードと下賤なドランプル地方とが相離れて居る様に、ロンドンの他の區域とは全くかけ隔れた生活をやつて居る場所である。

誰れでも、廣いロンドンの此處彼處を、あますところなく精細に探し廻るならば、一般世人を驚かし、又心理學者や哲學者に著しい且つ永久的の興味を起さしめる様な、心理的實驗の持主を半ダース位見出すことが出来るだらう。然し、ロンドンのほんのつまらない一郭から、此書物に書かれてる様な心理學の上に非常な材料を提供

する道徳的の感情や、奮闘や、經驗等を有てる人々を、別に苦心を以て選り抜くほどのこともなしに、見出し得やうとは誰が思うだらうか。ロンドンの幾百萬民衆の一人々々が、一度その頭腦を湧き立たす時、忽ちにして此大都會の精となり、神秘となり、魅力となるといふ事實もさることから、彼等が又善の力、惡の力と闘争し、その魂は物言はずと雖ども、暗黙裡に此三千世界と或る交渉を有つて居るといふ事實を知る時には誰れでも驚きの眼をみはらざるを得ない。幾百萬の民衆の中で、最も卑賤で、墮落して居て、棄てられた、つまらぬ人々の中にも、同胞には認められないが、天使の目からは此世に存在せしむべき價值が充分あると見ゆる程の、高きものに向つての欲求、并に飢ゆるが如き高貴な志の存するは全く意外である。

ロンドンの何處か繁華な街路に立つて、小止みもなく流れ行く人を見て居ると、個々の人格の特徴は消されて、恰も羊の群か、寄せくる波か、蟻の集りかを見る様に、皆同じものゝ如くに感ぜられる。はてしもない別荘つゞきの陰氣な街を行くと、煉瓦や、敷石や、窓枠などがいかにも單調平凡で、それが又それらの家々に住む人の特質

をよく表はして居る様に思はれる。三番目の家に居る人が二十七番目の家に住む人と別に變つて面白いわけでもなければ、敷石の上で遊んだり、往來で叫び廻つてゐる子供等も、皆丁度庭の垣根にうづくまつて居るシナの樹の葉の如く、どれもこれも同じ様に感ぜられる。

而も考へて見ると、この人類といふ大衆の中の一人々々は、皆それ／＼特有な沈黙と孤獨とを有つて居て、その思想は他と隔り違つて居るものである。彼の勤勉と怠惰と、徳と不徳と、笑みと涙とは、互に断片的に見えても、彼自身は、その思想に於て沈黙と孤獨とを有し、心の奥の奥底には一の完全なるものがある。一人々々の人間を捉へて色々な種類に入れたり、人類學上の統計表の適當な處に置くことは出来るであらう。而し其人の思想の住家たる沈黙、孤獨の境にこそ、吾人の穿鑿を許さざる、彼獨得の眞實在が潜んで居るのである。

で若し吾人がその魂の幽玄な處まで洞察し得たならば、數限もない群衆の中に埋もれて色彩が消されてる個人性も、人間といふものを學ぶ者にとつて、話柄となり教示となる程の面白味を有するものとなるであらう。

然り多少の面白味と、多少の教示とは得られるに相違ない。而して群衆の中の各個人は夫々、獨特な魂の沈黙や、他から窺ひ知るを得ない思想の部屋や、他からかき亂さるゝことなく、又他と全く交渉のない孤獨とを有するものであると會得して見れば、人がおの／＼己れ獨特のものを有して居るといふ事を強く感じるのは、誰れでも同じことであると思ふ。萬人一様と云ふことは到底不可能であつて、變化は自然の法則であり、群とは斯く相違する個々の者が集つて成つたものである。そう言ふてしまへば何も不思議は無い様であるが、然も尙、凡て此本に記す驚くべき傳記が、皆、ロンドンの僅かな一郭から發見せられたことは、矢張り驚異に價するものである。

(二)

ウイリアム・ゼームス教授は、其著「宗教的經驗の諸相」の中に宗教を定義して、「宗教とは、何物か聖也と思はるゝ事と關係して起る、個人々々獨特の感情、動作及

「経験なり」と云つて居る。此定義は、神學者や哲學者に限るべきではない。ハムレットの宗教はアタナシヤス（アレキサンドリヤの神學者）の宗教よりも吾人に近く、クレンクビルの宗教は吾人の興味を惹くことが甚だ深いのである。自ら神を拜せずと言するもので、孤獨な時に少しく考ふるならば、自分は宇宙と何か關係して居るに感ずるであらう。人は皆何かしら宗教を有するものである。

普通一般の人の有する此種の宗教は、夫の月並な形式家の「人から受け継いだ宗教的生活」よりも、人の心を學ばうとする人にとつては興味の多いものである。それらは變化に富んで居るから面白い。劇の様で情がこもつて居て、眞に迫る様な力がある。そして陳腐なものではない。「原始的」な何物かがある。ゼームス教授は云ふ、「教會が一度建てらるゝや、其後の人々は傳説によつて信仰をつゞけるばかりである。けれども教會の建設者達は、皆自ら聖なるものと直接に交はつて新しく力を享けた。たゞに超人的建設者たる基督、佛陀、モハメットの如き人々ばかりでなく、凡ての基督教の新しい教派を創めた人々は此種の人物であつた」と。

此書物に記さるゝものは、乃ち現時のロンドンの或る人々の間に顯はれた宗教の記録である。これ或ひは神學者には議論するの價値もないものかもしれないが、讀者の目には、昔、世の光なる基督が人類歴史を根本から革命せんが爲めに特に選み給ふた、夫の單純な人々と同様に見ゆるであらう。

此等平凡人の中に、眞實吾人の尊敬を買ふに足る物があるが、それを認めようとするれば、性格の大變化が決して慣例に拘泥して起るものでないことを記憶せねばならぬ。陳腐なことを辿つて居たのでは仲々異様な経験などは望まれない。

ゼームス教授は、深刻なる精神上の経験を経た人には、ある特異なものゝあることを心理學の研究者に教へて居る。彼は又通常一般の宗教信者のことを引き合に出して曰ふには、「佛教徒にせよ、クリスチアンにせよ、又はモハメット信者にしろ、彼等は、その國の慣例的見解に従つて居る。彼等の宗教とは他人が作つて置いて呉れたものであり、又傳説によつて受け継ぎ、人真似で式を定め、習慣によつて守つて居るものである」と。又こんな古手の宗教を研究したからとて何にもならないことを公言し、

加へて「吾人は他人に勧められて感じたり、他人を真似て行ふ人人に、よい模範となる程の多くの、新しい経験に關して、攻究せねばならぬ。この新しい経験は、宗教を只一片のなまぬい習慣となさず、眞に燃ゆる火として守つて居る人々ならば、大抵有つて居る。此書物の巻頭に格言として取つたシェレーの言葉に『熱烈ならざる心は純潔にあらず、熱誠ならざる徳は確實にあらず』とあるが、寔にそれはよくうがつた言である」と曰ふて居る。

本書の中の宗教は、ヨブ記、詩篇、天路歷程等に見るが如き、奇にして、個人的な根本的の力である。そして又人から壓服され、世に敗北した人の魂が、自由や生命を獲得する爲に、又地獄に陥つた人がそこから逃れんが爲めになした奮闘の記録である。それは科學や法律は到底改善の望みなしと宣言する人の中にも、ラ、ローシユフーコ（佛國の文人且軍人）が、最善の人にすらも無いと云ひ相な純潔の思、敬虔の念があることを示すものである。如斯宗教こそは非常なる苦痛をなめた人の眞正の實驗的の宗教であり、此處から此書物の中に書かれた一切が流れ出づるのである。

(三)

此書物は第一に喪はれたる者の、救はれ得ることを示して居る。近來人々は、病理學者が造作もなく、人の靈魂に就て生理學上の判断を下すのを喜んで聽くために奇蹟に類する事は斥けてしまひ、ある種の人々を改善せしめることなどは到底なし得ないと信じてしまふ。人々は流行の様に救世軍を賛助するが、それは主として、救世軍が「慈善救濟」の働きに成功したが爲である。浮浪の徒を軒下から引き上げて、獨立せしめたり、職業を與へて良民にしたり、窮乏に陥らんとする家族を、カナダに移民させて社會に出で得るやうしてやる事には好感を持つが、奇蹟と云へば初めから反感を以て之を迎へ、飲酒狂の人が、忽然として酒慾を去るとか、一生の大部分を獄中に過して來た犯罪人が、一朝にして犯罪の心を脱ぎ棄てるとか云ふ様な事は仲々信じようとなしな。人々は病理學の方を信用して、實際に起つた大變化を疑ふのである。「回心」即ち飲酒狂や、牢獄を常宿とする連中が、宗教の力によつて却て他人を救ふ者となつたと云ふ様なことには、肩を窄めて、それは眞實か、ヒステリーの一種ではないか、

等と問ふのである。が、浮浪の徒を勤勉者にする位の事は、屢々見る例だ。然るに人は何故につまらない事を面白がつて居て、最も酷い悪人を改心させ、更に聖者に變せしめる心理學上の此奇蹟、此大事實に興味を有たないのであらうか。

(四)

「回心」とは何か。

余は深き尊敬の念を以て、ゼームス教授に學ぶものであるが、教授の説によると、「回心するとか、更生するとか、恩寵を受けるとか、或はまた宗教上の經驗をするとか、救の證を得るとか様々な言ひ表し方があるが、これは従前は纏りがなくて自分ながら下等な、不幸な、悪いものであると觀念して居た自我が、宗教の本體を堅固に握つた爲めに、ちやんと統一せられた、貴い、幸福な、義しいものに更つたと自覺するに至る過程を言ひ表はす言葉である。そしてそれらの變化は徐々に起ることもあるが、俄かに來ることも少くない」と。

また教授は別な處で、次の如く云つて居る。「聖パウロの場合の様な、特に著しい急

激な實例に於ては、感情が非常に亢奮し、精神に大動搖を來してゐる間に、舊い生命と、新しい生命とが、一瞬間に、全然はつきりと區別せられ、置き換へられてしまう事が屢である」と。

是等の定義は、誰人も知る如く、ゼームス教授の著書に、多くの顯著な而も真正明な回心の實例を以て説明されて居る。是等の性格の大變化が眞實であるといふ實證は甚だ豊かであるが、心理學者にとつて問題となるのは、如斯き事が如何なる方法によつて成されたかと云ふ事である。此問題に關しては、面白い色々な議論もあるが、それはその議論して居る人に行つて尋ねたらよいであらう。が、私が此書物を敢て書くのは之をして、ゼームス教授の名著に對する一片の脚註たらしめたいが爲である。何は兎もあれ私は、回心とは心の髓から悪人であつた者が、心の髓からの善人に變る、唯一の道であると云ふ事實を、親しく人々に知らしめたいのである。

その現象は如何様に解釋せらるゝにせよ、回心と云ふ事によつて、自ら悪い、卑賤な、不幸な者であると自覺して居た人々が、自ら義しい、優秀な、幸福な者であること

自覺するに至る事實は、眞に明白であつて、議論の限りではない。茲に起る處のものは、性格の變化どころかそれは正しく革命である。只人格を少しく變へるといふのではなく、新しい人格を造り出すのである。「新に生れる」と云ふ言葉は決して一片の修辭上の誇張ではなく、實際上の事實である。嘗ては救ふべからざる程の悪人であつた者で、改心の結果、喪はれたる人々の熱心なる救ひ人となつた人達が、口を極めて告白する處に依ると、彼等の経験したところのものは、到來云ひ表はすことも、測り知ることも出来ないが、回心の際に於て、彼等は慥に自ら「再び生れた」と感じたのである。外に證人を求むるまでもなく、此人達にとつては、此の人格の大革命は明かに新生を意味する。それはゴネリルを更へてコル德里ヤとし、カリバンをアリエルに、タルソのソウロを更へて使徒パウロと成したのである。

根本的に悪い者を、根本的に善人とする様な薬も無ければ、法律もなく、道徳律もない。又そんな博愛事業發明されても居ない。浮浪人や罪人の群に手をやき、重荷を負ふてゐる國家にして、もつと自由に着々と其經綸を行はうと欲するならば、どうして

も、助を與へ得べき宗教の力を借りなければならぬ。重荷を變へて、助力とすると云ふ様な奇蹟を行ふのは宗教ばかりだ。其他に方法の有らう筈がない。科學は、浮浪人罪人には失望してしまつて、彼等はとても望みがない、治すべからざる者だと言ふ。政治家にしても方法は盡て居る。博愛主義もそろ／＼疑を發して、慈善を、もつと効果の擧り相な道に轉用せられないものか、等と考へるやうになつてゐる。法律は「犯罪者階級」等と稱ぶ。社會進歩を阻害してゐるこの無用な善からぬ厄介物の一團に對して、失望しないものは只宗教あるのみだ。只奇蹟を信する宗教のみが、彼等に對して望みを失はないのである。

御存じの通りゼームス教授は、自ら不幸だと思つて居た人が、幸福だと自覺するに至つた者に就て語つて居る。これから推して考へれば、夫の、多くの人を厭がらせる救世軍の一特徴、即ちその樂隊、愉快な軍歌、陽氣な樂天主義の意味が解る。誠に、その氣を引立てる樂隊、歡ばしい讚美歌、嬉々たる救世軍人が、お話しにならぬ程むさくるしい、墮落のどん底迄いつて居る様な街に及ばず感化は、想像の外である。酒

びたりになつて、すつかり落ぶれてしまつた一人のどん底生活者が、或る日曜日朝、木賃宿の石段に、垢だらけの破衣に纏つてふる／＼震へ乍ら、自分に愛想をつかし神を惡み、あらゆる人間と云ふものを敵の如く思ふて居る時、突如として起る快活な樂器の音を聞き、彼の憂鬱、絶望に對して挑み來る様な歡樂の言葉を耳にし、慘憺たる町の真中を行軍して行く一隊の行列の中に、フト見れば嘗ては彼と等しく、卑賤な罪惡に満ちた犬の如き生涯を送つたその人々が幸福そうに、小ざつぱりと裝うて、喜んで居るのを目の當り見たとしたり、その時の彼の心は如何なであらうか。

救世軍人のこの喜ばしい、歌はずにはゐられない、壓へつけておくことの出来ない幸福の精神こそは、屢、彼の如き者を更へて、他人を救ふ力強き人と成すのである。此等の爽はれたる者を救ふ人達の中にある精神、此精神に動かされて米國の或著述家は、ゼームス教授の引用した通り、次の如く叫んだ。「私は大膽に云ふのであるが、一人の靈魂を回心せしめると云ふ神の御業は、その聖旨、理由、及び如何なる犠牲が拂はれたかを考へ、更に夫が永遠にまで及ばず結果のことを思ふならば、全物質世界

を創造せられた事よりも、更に榮ある業である」と。心の冷たい人は、かゝる言葉を聞いて胸を惡くするであらう。然し乍ら、この神秘なる回心の奥底には本當の喜びがある。不幸だと思ひこんでゐた靈魂は、幸福を覺ゆるに至り、縛められて牢獄の中に在つた靈魂は、繩を解かれて釋放せられる。身も心も完全に、餘す處なく、しかも瞬間的に變化した者が、どうして落着いて歩き、言葉を調節し、激情を壓へ、有頂點にならうとする心を程よい加減に抑制する等と云ふことが出來やうか。此回心した人をして歌ひながら貧民窟に進軍せしむるところの魂を奪ふ許りの幸福こそは、實に彼の中に爲されたる奇蹟の標であつて、それは又幾度となく此書物に示さるゝ如き不思議を行ひ、不幸なる、落膽に陥れる靈魂を引きよせて、罪と悲惨から救ひ上げなのである。基督は、一人の罪人の悔改むることは、誠に天に喜びを増し加へる所以であること、述べ給ふたではないか。私は一度、退職軍人で、當時道路掃除夫であつた救世軍人(目次、三、にある持餘者)と共に、西ロンドンの非常に汚穢な、仕方の無い町を通つたことがある。其時私は彼の青銅色の、眼の輝ける立派な顔、元氣に満ちた揚々た

る態度、悦びに溢れて而も落着ある聲が、其近邊に群がつて居る卑賤い人々の目に留り、いたく注意を促したのを視た。私は始め人々は多分彼の心地よい容貌と、きちんとした態度とに心を惹かれたのだと思つた。其時彼は救世軍の軍服を着ては居なかつた。一日の仕事を了り心も愉快に、楽しい家庭で食めた夕食に氣も軽く、チャンとした服装で小きびよく、いかにも人を引き付けさうな態度で、只一個の英國労働者として歩いて行つた。彼は自ら義しく、高く幸福なることを知つて居たが、彼の通つた町は不義にして低く、自分ほど不幸者はないと思つてゐる人々を以て満たされて居たのである。けれども次の問答によつて彼が人々の注意を惹いた理を知つた。私は人々が彼を驚きの目、いや多少羨みの目を以て見て居ることを話すと、彼は「いや、貴下は是非、私共昔はこの近邊の惡黨の大將株であつたトムだの、ジョーだの、ウイルだの云ふ連中が、救世軍の赤い襦袢に身をかためて、日曜日の朝此處を行軍して行く時に、あの人達がどんな様子をするかを、見て遣つて被下らねばなりません」と、答へるのであつた。

斯く迄悲惨な、世間から棄てられた淺ましい人々を牽きつけ、驚かしめるところの救世軍人の悦びの心こそは、其回心に伴ふ改善の特質をなすものである。又これは救世軍の凡ゆる運動の中心力だとも云へる。而して斯くの如き悦びの心を得たものは、同時に大いなる愛の人となり、進んで喪はれたる者を探し出し、限りなき愛憐の情を極惡の人に注ぎ、其改心を起さしめるのである。ゼームス教授も、この回心の働きを見逃さなかつた。そして救世軍の創立者ブース大將のことに言及し、彼が無頼の徒を救ふに力ある第一の秘訣は、「彼等をして、ある眞面目な人があつて彼等に注意を拂ひ、彼等が沈むか浮ぶかと云ふ問題を始終考へて居るぞと云ふことを、感せしむるに在る」と思つて居た事實を書き誌して居る。私は救世軍の働きは未だ幼児期に在るのだから、將來は其根本の性質は變らないで而も限りなく向上進化して行くものであると信するが、今迄に救世軍に依つて成就せられた驚くべき働きは、確かに愛によつてなされたものであり、火を點せられ、靈感せしめられたる歡喜によつて招來されたものである。

今心理學者が、太陽の照る殆ど凡ての國に於て爲されて居る、此の奇蹟の秘義を知らうと思ふならば、救世軍を見たらう。嘗ては悪い下等な不幸な者だと諦めて居つた人々を用ひて驚くべき働きをさせて居ること。即ち彼等をかく鮮かに變らせた悦びのおどづれ、力ある愛情を以て、自分が沈まふが浮ばふが、天にも地にもかばつて呉れる人は無いと思ひ、自ら知りつゝ、悪い下等な不幸な毎日を送り自暴自棄になつてゐる人々を探し出し、その魂に生命を與へて人を救はしめてゐると云ふ處に、その秘義が潜んで居るのを見出すであらう。

救世軍の社會事業は、その救靈の働きに比べては、何物でもない。否、回心と云ふ奇蹟が無かつたならば其社會事業は全く出来ないものである。

(五)

此の心理學上不可思議なる回心が又、案外世を裨益する所多き結果となるを見れば、社會改良家の注意を惹くべきは當然である。

此書物を讀むならば、夫の財産を保護し、犯罪者を改善せしむる目的を以て法律で

定めた刑罰が、ある場合に於ては全然其目的を達する事が出来ないで、却て無法の徒を一層頑固に、更に反抗の強い人と化してしるふことを知るであらう。反之、見るからに野獸の如く、恐ろしい、全く望みの無いと見える無法の人、愛と同情とに對しては、非常に鋭敏に感じて、さしも拒んでゐた宗教を素直に受け入れ、最良の市民として相應はしい人格に生れ更せらるゝに至る事實を諒解するであらう。

苦し國家が、熱心もなければ、何も別に使命も感せず、多くはよい加減にお務を果して居る形式的な教誨師を廢してしまつて、適當な管理の下に、例へば救世軍の如き、其中に、自ら獄中生活もなし、罪人の心もよく知りぬいて居つて、その憐な望みの無い人に接すれば之を改心せしむる秘訣を有する人達の多く居る團體をして、教誨師の任務を爲さしめるならば、どんなに良好な成績を示すか分らない。而も之は甚だ人道的な有益な改良であると思ふ。

私は、此書物を讀む者は誰でも考へると思ふ。神の御憐みといふものは、人々が同情心を動かして、其國の監獄の問題に關して何か爲なければならぬと思ひ付く時に、

始めて顯はれて來るものであると云ふ事を。そして「凡ての囚人と捕はれ人の上に、御憐みを加へ給はんことを」と祈ることが出来るであらう。

此書物に示す處の、吾英國の牢獄並に警察に關する奇異なる事實は、一方讀者を戰慄せしむると同時に、また政治上多少の改善を促がして、現在の制度が造り出す様な犯罪階級の發生を抑止するに至らんことを、私は希望して止まぬのである。

元より警察は確かに多くの効能を有し、また監獄制度も近來大に改良された事であるが、此書物に示す如く、所謂犯罪階級を作つて居る類の人々にとつては、警察と監獄とは一緒になつて、寧ろ彼等の改善に障害を加へて居るのである。其近邊の警察のブラツクリストの中に一度其名を記るされた者共は、慘酷な害毒を流す、兇猛な迫害を加へる、卑怯な暴虐を敢てする者との極印を付けられてしまひ、昔非常な恐怖をもつて迎えられた、かの惡辣な水兵の一團にも比せらるゝのであるから、眞に恐るべき限りである。

近來、警察の、犯罪人に對するこの類の態度は稍改まつたけれども、猶ロンドンに

於ける大部分の人に取つては、警察は、社會の秩序の保護者と云ふよりは、むしろ富者の使用人であり、貧民の敵であるかの様に思はれてゐる。

吾人は、ロンドンの富と繁榮とを代表する小さな中心を取巻いて居る、貧窮な廣い地域に深入りして見ないと、如何程迄其住民が、警察に對して上記の如き惡感情を抱いて居るかは、到底知り得るものでない。よく考へて見れば、この社會秩序の擁護者に對して抱いてる人民の態度程、鋭く吾文明を疑はしむるものは無い。

(六)

此一巻の書物に録された奇異な傳記を讀んで、人が全く宗教、道徳、自重心を失ふことがあるとは考へられないが、それでも尙昔から信せられて居る格言「豫防は治療に優る。」即ち凡ての改善は子供に始まると云ふ事は眞理であると覺るだらう。

本書の始めの方で、私が知り合になれた「再生の人」の住んで居る近邊の有様を描いて見やうと思ふ。ロンドンとはその様な處である。是よりもつと悪い處はまづ無いであらうが同じ位悪い所は少くないのである。そして耻づかしい事に、子供はそこで

損はれ、虐待せられて居る。ロンドンの到る處に、十誠を守らず、道德の念なく、通常の衛生思想にさへ缺けた兩親の、恐ろしい感化の下に生きて居る子供が居る。こんな兩親の監督の下に子供を打ち遣つて置くのは、雷に子供の肉體上の健康を害ひ、道德上の品性を傷けるのみでなく、自尊心が強く、高潔な精神を有する吾國民の子孫として相應しからぬものを養成し、今吾人が進み行く道につまづきとなつて居る重荷を、更に倍加して吾等の子供に擔はす事になる。

某紙に書かれてある處によれば、一百万人は國家の税金で生活して居り、種々な方法で集められた二億六千萬圓の金が、此の貧民群を養ふ爲めに使はれて居ることになる。又救世軍は「數十萬の無頼漢の一群があつて、何の職業も執らず、國家には貧民救助法の定めによる救恤金の莫大な支出を餘儀なくせしめ、更に慈善事業によつて年に約三千万圓からの大金を食つて行く」と報告して居る。

此重荷は、軽減せられつゝあるであらうか、または増大せられつゝあるであらうか、貧民窟の子供達を、こんなお話しにならない兩親の手に委ねて置いて、果していつ

の日にか、是が軽減が期せられるものであらうか。

更に他の方面から云へば、アフリカの黒人中の道德よりも一層低い考へを有する親達と共に其子供を置くのは、果して人道に適つて居るか。吾國の宗教的良心は之を義しとするであらうか。

我等はもう感情的に言つてゐる暇はない。「子供の叫び」と云ふ歌では最早今の世を動かす事が出来ない。我等は實際的である。たゞ良くせん事を慮るばかりである。此の汚されたる無邪氣な者、毒されたる子供達の爲に、國民の宗教的良心に慙ふるのに、まよひなく此の實際の有様を示す方法を以つてすれば、世は必ず之に反應しやう。神の命に依つて子供の純潔を保護すべき教會、或は後世に負ふ處の責任として第一に子供の爲に盡すべき政治家等が、此問題に何程かの注意を拂ふならば、必ずや目下の急務として速かに、思ひ切つた行動を執るの要ある事を感じる筈である。

ぐづぐづして居る間に驚くべき浪費、惡むべき墮落、想像も及ばぬ悲惨事が毎日行はれてゐるのである。或人は記して云ふ。「何の町にでも行つて、官憲の云ふ處を聞い

て御覽なさい。『此町には數十の(大きい町ならば数百の)子供が、戦慄すべき墮落の場所
所に生活して居る。法律に依つて救ひ出されねば、どうにも出来ないやうな状態に生
きて居る。又やがては國家の重荷となり危険物となるより外に、仕方の無い様な境遇
に暮して居る。更に彼等は學校に在つても、その他何處に在つても、他の子供を悪い
方に誘ふ如き行をする。實に人間の屑と云ふより外ない様な者の間に、毎日の生活を
やつて居る』と云ふであらう』と。

最小に見積つても、極惡な浮浪人の子供が五千。是は實に、其幼児期から云ふに忍
びない苦痛と腐敗との中に生くべく定命められた子供の群の一小部分である。大英國
に於て、犯罪者たるべく或は無頼漢たるべく、否それよりも、もつと惡く運命付けら
れて居る子供が少くとも三萬人はあるのである。

(七)

此書物に於ては、たゞに、回心に關する心理學上の奇蹟を以て讀者の興味を惹くと
か、または實際的の人々をして、社會の改善即ち國民性の進歩に與つて、個人の宗教

と云ふものが偉大なる價值を有することを知らしむるとか言ふばかりではない。更に
進んで、二つの合理的な、且つ經濟的なる改革に就て世の同情を求めんと欲するので
ある。即ち一は吾監獄制度、殊に其教育的、救濟的職務に關する改革。他は、不法の
親を持つ子供に關する行政上の改革である。

此の書物の内容は決して失望のそれではない。著しい希望の色調を以つて記載され
て居る。これ其の事蹟の甚だ理に適ひ、人の心を動かす所以である。

倫敦の一部

西部ロンドンの某大通りから一寸曲ると、警官の眼から見ても最悪な町、最下等の人間が住んで居ると云ふので有名な区域がある。諸君が一度そこを訪ねるならば、人は、ミルソンやファウラーがマスウエル・ヒルで恐ろしい殺人をやる以前に、度々通つたといふ料理店の事を自慢相に話すであらう。

大通りを通つて居ると、そんな恐ろしい處が在らうとは一寸思はれない。通の兩側には、ロンドンの中でも、最も美しい住宅が列んで居る。馬車や自動車は輻輳し、人道は間断なく往來する人の爲めに賑ひ、何處を見ても、貧民の窮乏等は考へることも出来ない許りの、盛んな富が香つて居る。少し行くとやがて、住宅がお終ひになつて、此度は店が出て来る。此あまり上等でもない商店町の真中に、地下鐵道のステーションがある。こゝは仲々喧騒である、そして何かしら不潔な臭が漂つて居る。乗合自動車はグラ／＼ガラ／＼と人道際に着くかと思ふと、穢れた、ボロ／＼の新聞賣子等が

一錢、二錢を得んとて争つたり、競馬のことを八ヶ間數話したりして居る。花賣娘等は、肩に喰ひ入る草のかけ紐にバスケットを垂して、綺麗な花を賣つて居るが、其花の美はしさと、娘の醜さとの對照と云つたらない。ステーションの硝子張の入口の下には、いつも友や乗合馬車を待つ群衆が居る。此處は數個の道の接續點である爲めに、交通は特に頻繁で、轟々として止む時が無い。

人道は塵埃やら物の屑やらで一ぱいである。乗合馬車の切符、新聞の切れつ端、巻煙草の吹空、マッチ、蜜柑等を包んだ紙屑、ヘーヤピン等がロンドンの町なら何處にでも散ばつて居て、恰も藁屑、枯草、塵等の敷物の上を歩くとも云へやう。そして少の風にでも吹き上げられて道行く人の眼に吹き込むのである。

如斯雑多な事で、不愉快な、忙はしい處ではあるが、又一方には、何方を見ても、華麗に着飾つた婦人や、流行社會の紳士やが入り亂れて遊び廻る車馬の往來もはげしいので、富、平安、歡樂の外、また何物も無いと云つた風にも見える。併し一步踏み出せば、此賑かな平安な世界は忽如として消え去る。

今お互が闖入して見やうと云ふ區域は、此大通りの賑かな人道から横に入つた、一層賑かな路を通つて進んで行つた處にある。それは卑賤な人々の行く市場で、商店は、人道の端にぎつしりと立ち列ぶ露店と相對して居る。商店のごす黒い窓と、溝の處のキラ／＼した露店との間を、甚だしく汚れた、野獸の様な人が、多くは婦人であるが、うちや／＼として居る。彼等の油でにじんだ財布の銅錢や彼等が罪惡を犯して得た金を得やうと、露店の連中が、しはがれ聲で客を呼んで居る。

であるから家賃を拂ひ、税を拂つて居る商店の連中は、只もう袖手傍觀で、甚だ近い向ひ家の盛な御商賣を眺めて居るより外は無いのである。この露店で、一ポンド六錢許りで最上の苺が買へる、魚や肉が同じく七、八錢、コルセットや、帽子、靴等が殆んど無價で買へる。それにしても奇態なのは、其中に、切り花や、鉢植や、繪畫書籍等の店の出て居ることである。こんな貧民が、花や本や繪畫等を買ふとは一寸不思議だ。また面白いのは、買手が果物、野菜、肉、魚等の露店の前に立つて賣買してると、後の方には、卸商人が、小馬の車に貨物をつんで、小賣商人と賣買をやつて居

ることである。世界のあらゆる海を越へて流れ込む此大都市の商業は、斯様な、奇妙な逆流を數多く捲き起して居るのである。

此忙はしい町を過ぎて、幾多の料理店居酒屋等の前を通つて終ふと、此地方の住宅地に這入る。此處には、善からぬ種類の家なら如何様のもある。昔は新らしく塗り立てられ、花壇を以て飾られ、豊かな人々の好んで住んだ事のある、大きな心持の良い別荘もある。また稼ぎ人の好んだ、奇麗サツパリとした低い平屋も並んでゐる。が今は皆、汚れて見る影もない状態である。その大きな別荘には稍善い労働が、最下階に住んで居て、上の方は誰にでも貸して居る。前の庭はうつちやつてある。人道も、車道も、騒がしい子供で一ぱいで、壁に樂書をしたり、石蹴りをする爲めに人道に線を引いたりして、終日遊んでゐる。彼等の大多數は、不思議な程結構な着物を着て、サツパリとして居て、ケンシントン・ガーデン邊りの貧血症の子供等よりは、餘程幸福そうで、元氣である。ある救世軍人が下階を借りて住つて居る家には、一週間に近隣の町々からおしかけて來る乞食の數が七十にも達すると云ふことである。

まだ此邊りでは、小兒達はクリケツト、チエリーポツプス、石蹴り、輪廻し、トランプ遊び等をやつて居て、可成の町だが、今少し行くと、忽ちお話にならない程、卑賤な、極悪な町に這入る。

此の町々は、嘗ては二階建の別荘町であつたのだが、今は皆合宿所と化して居る。もう全體の空氣が何となく變つて居る。始めて見ると落魄と云ふ感に打たれる位のものだが、よく視て居ると、實に兇惡な、地獄の如く墮落したものだ云ふ感が湧き上つて来る。此感を惹き起させるのは其處の人間ばかりではない。家そのものが此感を與へるのである。悲しむべし、其建物迄が、呪はれて居るのだ。煉瓦はポロ／＼に崩れ、その上汚れて、薄黒く光つて居る。扉や、窓わくや、手摺りは、處々、繕つたところを措いては黒ずんでゐる。玄關への階段は、穴が開いて、毀れて、油でギラ／＼して居り、雨漏りのする下階の戸や窓は大抵たゞき破して燃料にされてしまつて居る。家主が雨の爲めに家具のすたるのを防がうと思つて、窓に板を打ちつけて居るのを見るのは決して珍らしくない。鐵の柵の棒がよくぬけて居るが、それはねち切ら

れて、兇器にせられたのである。

夏の夕べになると、これ等の町々の合宿所に住つて居る連中が入口の階段に一ぱいになつて、人道や車道にはその子供等が群がつて居る。男子は泥棒、無心狀書、掏摸、詐欺賭博師、ならず者(ボロ屋)、トラウンサー(果物屋に傭はれて呼賣する者)、兇暴漢である。婦人も同じ様な連中で、想像の及ぶ限り墮落した者である。彼等は巾着切りもやれば乞食もやる、萬引もやる、弱者いじめも好んでやるのである。

こゝに酔ひ漢があつて此の様な家に一夜を過して目が覺めやうものなら、只一片の襦袢を衣せられ、逐つばらはれるのである。彼の財布も、時計も、手帳も、紙も、衣類も共に、恐ろしい主人にはがれてしまふのである。

日曜の朝には此の町の最も奇態な光景を見る事が能る。人々はバザーを開くのである。横木と云ふ横木には端から端まで、惡臭紛々たるボロ着物や、一週間に拾つたり盗んだりした物、どんな質屋でも御免を蒙ると云つた様な品物がぶら下げられて居る。眼には痣、頭には縋帶した、口あんぐりの、碌に着物も着ない近隣の人々が、此

のボロの恐しいやつを、見物に出かけて来る。そして契約、賣買、交換等が行はる。と殆んど全く裸體の子供等は之を眺めて、狡猾な商法を學ぶのである。

讀者讀君が、帽子を戴かず、バラ／＼の髪をした怖しい眼付の、野獸よろしくの口をした女が、半裸體の引ずりで、ふしだらな、何と比較のし様もない恐しい姿をしてゐるのを見たならば、又彼等のしはがれ聲で話す毒々しい言葉をきき、彼等の物言ひぶりによつて、彼等の胸中に往來するものを察し得たならば、人類の性質が、假令其進化の初期、最野蠻であつた時代にでも、決してこれ程では無かつた、否あり得なかつたと云ふに違ひない。彼等是一種特別の方向に進んで居る。彼等は全く人類と異なつた處があつて、丁度人と似人猿と位違つて居る。彼等の始祖はルツか、マグダラのマリアかであらう。それから二千年進み來つて、終に此様に腐敗した、むさくろしい者となつたのである。それすら、とても信ずる事は出來ない。いや彼等は進歩の途には居ないのだ。始めから人間ではなかつたのだ。人類の名譽の爲めに、彼等を人間として受取ることには能かない。

男子達に就ては一言することがある。凡ての女は、其中の老惡婆は勿論の事、著者を見るに、さも惡々し相な眼を以てした。その大膽不敵なすう／＼しい眼付は、怨恨のそれよりも恐しいものであつた。が男子は皆、耻を感じて居る様であつた。元より彼等の顔には狡猾な、陰忍な、卑劣な、たくらみに満ちた様が表はれては居たが、私を見たその眼は、直ぐに下げられた。私は女の毒惡な反抗的なるよりも、男の明かに耻を感じて居る有様に深く感動したのである。彼等は自ら「悪い、下等な、不幸な」者であると、自覺してゐる様に見える。

乍然、此界限の男女の色々な事よりも、一層人の心を撃つものは、合宿所の陰に、路上ですつまらない遊びをして居る、きたならしい子供達である。信せられない様なことであるが、其中の或る子供は、キチンと着物をつけて、時々はお湯にも入ると云つたやうなものもある。他の一方には、墮落した母親が、入口の石段に腰を据えて、自慢らしく自分の嬰兒を友達に見せたり、あやしたり、黒い指で小さい青ざめた頬をなで、やつたり、そうかと思ふと急に醜い顔を嬰兒の顔にもつて行き、ゲラ／＼笑い

ながら小さな口にキツスしてゐるのも見える。私が此町で初めて見たのは、俄かに二階の窓が開いて、恐しい婦人がその窓から半身を突き出し、車道にチヨロ／＼歩いて居る幼児に、人道の方に来る様にどわめき叫んで居るのであつた。別に車は目の前に来たのでもなかつた。けれども、母親は幼児を氣遣つたのである。が然し此種の愛情は子供が極めて幼稚な間に限られてゐる。五、六歳以上の子供等は全くおかまひ無しである。私は此處で見た程の汚い、ボロ／＼の、乏しい様子をした子供を他で見た事が無い。此邊りでは、この憐れな子供達の事を「呼び鳥の様にきたならしい」と云ふ相だが、なる程その通りだ。私は多くの、腫物だらけのたゞれた子供を目撃した。またある子供達は、痲に眼がついたとでも云ふべきものであつた。

此界限の爲めに、一つの埋葬堂が建てられる段となつた。それは家々は貧民で一ぱいだから、死んだ者は直ぐにそこに移さねばならぬからである。

こんな俗悪な町々に成長する男の子達は、無頼漢になるより外に道があるだらうか。また娘等は母の仕て居る様な方法で金を得る外、別に術があるだらうか。

私達は自分の犬にした處で、こんな町に住はせて置くだらうか。是は極めて平凡な問であるが、然し私は眞面目に之を問ひ度いのである。

扱て、此等の町々に、毎日々々、特に毎日曜日、此地方に屯ろして居る元氣な救世軍の一隊がやつて來るのである。數年前此小隊の受持士官に、美しい、優しい、某中校（救世軍士官の階級）といふ女士官があつた。彼女は此邊の合宿所で、死にかゝつて居る男女の病床で祈つた。子供等に祈る術を教へた。居酒屋等に入り込んで、兇暴な悪徒共を説き伏せて出て行かせた。通りの隅に立つては、自暴自棄に陥つて居る女達を説いた。日曜日には路傍説教を試みた。或はまた酒に狂せる人々の戸口に立番をして、彼等の出るのを防止した事もあつた。ある夜中過、此小さい婦人が、邪惡な町を一人で家路へと歩いて居ると、一人の酔ひどれがお伴をしやうとやつて來た。處が少し許り行くとその男が云つた。「フン君は恐れて居ないな。」そして又つぶやいた。「君の様な連中はあなごれねいや、己等の様な者の世話をする君等は侮れねいや。」此書物に續いて記す處の奇蹟は皆、この優にやさしく懇懇な驚くべき婦人の働きに

よるものである。同小隊が今もなほ元氣に満ち、決斷に強く、極めて快活なのは、此婦人の感化の及んだものであつて、其中には、彼女自ら悔改めさせた人々もある。實に彼女は、この非道なる町に、美はしき人格の感化、純潔なる魂の百合花の香ひを残したのである。

一人の老兎狀持が此婦人の寫眞を私に見せて叫んだ。「あゝ……、若し誰か天國へ行く者があるとするれば、それは、此神様の小さい天使でしやう」と。
彼等は此婦人を呼んで天使中校と稱ふ。

拳 闘 家

此の丈の低い、肩の廣い、赤茶毛の拳闘家を一寸見て不思議に思ふのは、その體格が、如何にも高雅に見えることである。彼の顔は、赤毛の人に有り勝な透明つた青白い色をして居る。そしてもの憂相な、だるい、倦んだ様が見える。作りは小さく優くて、よく均整がとれて居る。誰れだつてこの薄青い眼が機敏に働き、この小さい、娘

の様な口が、鐵拳と共にうなりを發したなどは一寸信じられない。詩人と云つても可い位の人相で、拳闘家など云ふ役は到底も、はまり相にない。

こゝに記す「救はれたる者」の群の中で、此人が一番沈んで居て、靜かで、憤み深く、そして甚だ人付きの悪い男である。彼の履歴を聞かうと思へば、彼に聞くよりは他の人から聞いた方が便利だ。話をするに云へば、聲が低くて、くづくづくして居るが、殊更に耳を聳て、傾聴せねば聞き取れぬと云ふ始末、別に他人が己れを知つて呉れぬでもよいと云つた様な顔をして居る。彼は重荷に苦しんで居るやうに見える。又時には自ら正しく、高く、幸福な者だとは思つては居ない如く考へられる位である。然し思ふに、此沈痛な風貌は、第一に拳闘家の天性として激し易からざる性質により、第二に彼の靈性の極めて深奥なるが爲に、自ら他人の爲にする働の結果が、思はしく無い事を不満足に思つて居るによるのである。

彼が拳闘家としての名聲は、今猶彼をして仲間中第一の立者たらしめて居るが、彼は實に此界限の惡黨を多く救つた者である。彼は救世軍から何の給金をも受けず、仕

事の隙は悉く其働きに費して、幾十幾百と、人々を救はんが爲めに正に飢ゆるが如しである。私は彼の心中に、不幸な人や、神から遠かつてる人の魂に對する、母の如く燃え立つ熱情の潜んでる事を見たのである。かくまでに、人を救はんその使命を心に掛け、而もロンドンの言語同断なる悲惨の状態を知る彼が、打沈んで、黙し悲しめるは、何も不審しむに足らぬ。

「拳闘家」の両親は相當に暮して居つたが、段々と落ぶれて、遂には、とある底の屋根裏に住んで居た。こゝで此の「拳闘家」が、始めて野心を抱くに至つた。と云ふのは、その馬車やら馬等の世話をして居る若者があつて、其男は、その汚い處に住む人々に、恐ろしい勇士として立てられて居た。彼はワームウッド・スクラブスで大奮闘をやつて、敵手をメチャ／＼に打ち破つたのである。

ある時考へ深いこの「拳闘家」が、例の低い聲で、沈んだ顔を伏せがちにながら私に話した。「つい昨日の様に思ひ出すのですが、私があつた男を見て感じた心は、今でも新鮮です。それより前の事は一向憶えませぬ。私には其時から生涯が始まつた日より

思へません。私は何でもあの男の様にならうと思つた。何でも闘つて見たかつた。そして、「ヤ、あいつは、拳闘家だよ」と人から指示されて見たかつたんです。元より私は到底、あの大将の様な大男にはなれないと思つたのですが、其でも似た者位にはなり度いと思つたんです。腕力も膽力も出来る限り精一ぱい、あいつに似たいと思つたのです。」そして誇らしく附言した。「然し、望みの日がやつて來ました。其時私はまだ子供だつたが、其男に向つて、息の根を止めてやつた。ウン實際やつけたのだ。それどころか、まだ／＼大きな奴、巨大やつを破つたのですよ。」

彼はこんな欲望に燃やされて居る少年時代から、もう亂暴な、大膽不敵の生涯が始まつたのである。其時既に、強い、頑固な、大膽な性質に満ちて居たのだから、カナダか、南アフリカにでも行つたならば、甚だ有用な人間になつたらうが、ロンドンに居ては勢ひ犯罪者にならざるを得なかつた。彼が始めての悪事は、レゼント公園の鴨を一羽盗んだ事であつた。そして法官の前に引つばつて行かれたのである。次には、ある日のこと、某店から衣類を幾抱か盗んで、ある古道具屋に賣りつけた。こんど

は、其古道具屋の主人と一緒に警察の白洲に立たされて、主人は入牢、彼は罰金となつたのである。

元氣一方の彼は、學校でも持て餘し者とされた。彼を感化し得る校長は一人も無く、とても手に合はない者と定められてしまつた。彼の強情を制することは誰れにも出来なかつた。先生達は「此奴は人でも殺し度い様に石盤を振り廻して、他の子供が危険でたまらない」と云ふた。メリルボーン邊りの學校では殆んど何處へ行つても皆追ひ出されて入れてくれる處はなかつた。

或時は食料品商人の手車に載つてあつたラム酒を一本奪つて、友達と一緒に呑み、酔つぱらつてしまつてレゼントの疏水に落ち込んだ事もある。十七歳になつた時に仕事をさせられた。仕事でもしたら少しは大人しくなるだらうかと思はれたのと、またその必要にせまられたためでもあつた。その仕事はスミスフィールドの肉市場の擔夫であつた。

こゝで彼は愈拳闘家としての稽古を始めたのである。彼の師匠は、人も知る恐ろし

いノツピイ・ソープであつた。數ヶ月にして彼は、早やしつかりした勇士になりました。

彼はワームウッド・スクラップスで十六度も有名な闘をやつて、十六度も勝を制した。すると、ロング・エーカーのホース・グルーム館で、イーコットと闘ふ様にと挑戦して來た。其頃は、遊戯好の貴族が出入した酒屋等には、屋敷の裏の方に、拳闘の爲の庭が設けられてあつたものである。彼スミスフィールドの擔夫と、まれに見る選手イーコットとが相向ふたのは、かう云ふ場所であつた。奮戦十四仕合にして、此青年拳闘家は遂に勝利者となつた。しかるにイーコットは此審判に服従しなかつた。拳闘家は屈しない。再び戦つて、三仕合で見事敵を打ち破つた。

此勝利によつて、只金を得た許りでなく、名聲大いに擧つて、有力な人々の眷顧を受けるに至つた。スミスフィールドの擔夫は忽ちにすばらしい拳闘家となり、恐しい人間となつた。彼は華族と共に肩で風を切つて濶歩し、世界に向つて真向に拳を揮つた。彼は師匠と戦つて、八仕合で彼をへこました。そして、メリルボーンのシールツ

や、バターシーのダーキー・パートンや、ウォルシャルのトム・ウーレイや、シヨウウデイ
ツチのビル・バックスター等と闘つた。彼がロンドンの居酒屋の後庭で戦つた多くの
戦の中には、貴族院議員が十六人、其他競馬場で顔を知られた多くの人も列席し
た。全國遊戯俱樂部が組織せられた時には、其發會は、今も尙人の記憶に新なる、此
拳闘家とスタントン、アボットとの大拳闘を以てせられたのである。彼の最も有名な
戦はホックストンのビルベルとのそれで、彼等は拳骨に袋を衣せないで、デボンシ
ーヤのクリップフォード公領内で闘つた。

成績の示す處によれば彼は一度も、自分と同等以下の體重の者に負けなかつた。

處で當時、彼の生活状態は随分亂暴なものであつた。幾度となく、酒びたりにな
つたまま闘技に加らうとしては、審判官に抗まれた事もある。けれども、彼の元氣は
豪いもので、幾何程酒に浸つて居て、泥酔の状態にありながらも、一度闘技場に起て
ば、忽然として頭は鐵の如く冷く、秘術は電光石火の如く、驚くべき業をやること云ふ、
非凡な人間であつた。如斯勞役苦闘に堪へ得る強い體が仇となつて、彼は遂に身を

誤るに至つたのである。

懷中も温になつて、妻を迎へた。洗濯業を人から譲り受けて、家を求め、下女下男
を置き、二頭立の馬車も備へた。競馬を好んで、金満家や有力家と交際して、放縱な
る生活をつゞけて居た。

彼の體は巖の如く、健康で、強壯であつた。彼の肉も血も成功に誇つて居た。頭腦
は熱して居て、委細かまはず、毎日酒を呑んでは、何でもやつて見せると云ふ勢であ
つた。

乍然歳經るに随つて追々力も下り坂になるのを見るや、何か、濕手に粟と云つた様
な儲け口を探した。そして、競馬に手を染めたのである。運動界に噴々たる彼の名
は、「正直の保證人」などと云ふ振れ出しで忽ちに賣れた。此都合の好い名の下に、あ
らゆる詐欺、耻づべき奸手段を行つた。彼は悪黨の一派に加り、客引や相場師を使つ
て目的す馬の勝敗を密告させ、友や顧客の正直に賭けた金をまんまと懐にした。與
黨は巧みに之を行つて、大いに儲けた。彼の「正直の保證」は多くの運動家を馬鹿な

目にあはせたのである。

然し悪事がだん／＼大膽になり過て、遂には警官の網に引掛つた。悪事露見するや、「拳闘家」の名聲は一朝にして去り、人氣は亡び、名譽は地に落ちてしまつた。世は彼を指弾きして、陋劣なる悪徒なりと罵り、榮華は一宵の夢と消えはてた。彼の榮えた時にはチャホヤして居た親戚の者や妻までが、彼を冷遇し、反抗するに至つた。彼のこの冷遇に會ふて更に自暴自棄に陥つた。又しても又しても、牢獄に入り、出て來る度に妻子は益飢にせまり、彼に對していよ／＼冷く、いよ／＼惡しみを増して行くのが眼に見えた。榮利達の夢は覺めた。王侯の光輝一瞬にして消え、行く方はたゞ罪人の長い旅路であつた。

一千九百四年（吾明治三十七年）の十月から翌年の十月にかけて僅か一年の間に、多くは酒の爲めに服罪すること十七回。妻は三度目に彼を去つて、もう歸らぬと決心して全く關係を絶ち切つた。彼は飽く事を知らぬ酒慾に捉れて、一人孤獨の生涯を送つた。

彼は自ら當時貧乏のどん底に居て、如何して酒を呑めたかを私に話したが、それに依ると彼は昔の競馬仲間、黒手文即ち恐嚇文を贈つたり、途に金持や高位の人々を待伏して居ては言ひ掛りを吹かけたりして酒代を強請つた。萬一、一文の金も無くつて、酒慾に誘はるゝ時には、よく知り合になつて居る景氣の好い居酒屋に押し込んで強請する。それを誰一人抗むものは無かつたのである。

拳闘家等と云ふものは例令貧乏して、身體が弱くなり、破滅の生涯に陥つても、昔の威勢を笠に着て、ごうにかこうにか食つて得くものである。食客はしない、強請するのだ。居酒屋の亭主達は、暴れられたり、喧嘩でも始められては困るから、こんな仲間には、惜しまず吞ませてサツサと出て行かせるのである。

「拳闘家」はこうして生きて行つた。食物は他に取らない。正規の食事は却て厭はしく、只酒々々であつた。全く酒の力で生きて居たのだ。彼が當時精神上肉體上如何な様になつて居たかは、専門の醫者でなくては解らぬが、酒で支持つて居たのだから、その頭が如何に狂つて居たかは、到底想像することも出来ない。

彼は遂に、前に記した夫の最も下賤な、自暴自棄な、地球上最も嫌厭しい動物の住んで居る貧民窟に住み込んだ。しかも一向平氣である。そして其處の王となつた。誰も彼も反抗ひ得るものは無い。彼が拳闘家として榮えた時よりは、この檻樓にくるまつて狂亂の状態にある時の方が、遙かに恐ろしい勢であつた。その眼は他人の命を狙ひ、二口目には、殺すぞであつた。一度拳を揮へば、敵手は、石の如くに斃れたのである。酒に浸つた「拳闘家」は、其界限の人々を畏縮せしめた。拳闘家としては、他人から畏敬せられたのであるが、今は恐怖せられ、前は立派な男であつたが、今は悪鬼となつたのである。

彼の頭は只酒代を得る爲ばかりに働いて居た。様々な方法を案出ては、嚇しつけた。此無頼漢は決して普通の脅迫乞食ではなかつた。嘗ては富を有つて居て裕かな生活の何物なるかをよく知つて居たから、強麥酒の一本や二本で満足はしない。時をさらはず酒ばかり呑んで居度いのである。氣持ちよく椅子にでもよつかつて、酒を呼び、呑んで呑んで呑み飽いて、そのまゝ寝込み、目が覺めると、また枕頭に酒杯ありと云

ふのが好みである。

いたづらが嵩じて、遂には妻方の親戚の者と衝突する様になつた。ある時銘酒屋の亭主等が賣りつける質札を手に入れた。もう質流れになつて競賣せらるべき寶石の質札である。それを以て、ある官署の相當の地位に在る妻方の親戚の青年を訪ねて、質札を抵當に四圓足らずの金を求めた。彼の言草は翌日きつと儲かること、其夜エプソムに行つて、若し景氣がよければ直ぐ其足で引返して報告すると云ふのであつた。そしてうまく金を借りた。四圓と云へば、其當時の彼に取つては、可也の金高であつたが、しかも門を出るや否や、馬鹿々々しさに業を煮した。昔の榮華に比べて、今の貧賤は如何うだ。惡運茲に到つては自分乍らいまゝしくなる。たつた四圓許りの金を何だつて強請つたのだ。今一度引返して、もつと貰はうか。いや先立つものは酒だ。と一盃飲んで財布を空にし、引返して此度は金貨を貰つて來た。

其夜彼の青年が不圖彼に出會はした時には、エプソンに居ると思ひの外、其處等の居酒屋で、呑んだくれになつて居たのである。そこで、彼は今や親戚の眞面目な人々

までも餌にするよ云ふ事が家族の者に知れた。家内が其れに付て彼を嘗つて居る事がまた「拳闘家」の耳に入る。彼の心は深く撃たれたが、反動的に、益泥の中に深入りするばかりであつた。

ある日の事、長男が貧民窟に父を訪れた。「拳闘家」は酒の次には此子を愛して居たが、息子が救世軍兵士の制服を着て居るのを見るや。

「コイツ何て馬鹿者だ」

と罵つて、呆れた如うに、呵々と笑つた。

息子は熱心に父を諫めた。もうこんな哀れな處を見切つて、愉快な處に来る様に、淺ましい墮落の境涯を逃れて、幸福な家庭に歸る様に説いた。親を思ふ痛切なる至情と熱誠とが、子の顔に表はれて居た。然るに父は只笑つた。そしてポロに纏り耻づべく恐るべき野獸の様な相貌を以て、威猛高に息子を見下し。

「フン、救世軍人に!!!」

と罵言を以て之に報いたのである。息子は返す言葉も無く當惑して去つた。「拳闘家」

は「フン救世軍人に」と繰返して、喜しさうに笑つた。愉快でたまらなかつた。此一年間こんな面白い戯談は無かつたとホク／＼喜んで、遂には大酒を呑んで、巡査の世話になり、其夜は警察署の留置所で明したのである。

翌日は日曜日であつた。留置所で酒に渴して、檻に入れられた野獸の如く猛り狂ひつゝ長い寂しい日曜日を牢屋の中に過すことかど神様を呪つて居ると、突然、部屋の方格子窓をもちて来る樂隊の音に耳を聳てた。一寸考へて直ぐ救世軍の樂隊だと知つた。そして息子の事を思つたのである。彼は其處に坐つて、息子の事から種々の記憶を呼び起され自分の悲惨な失望の状態と、悴の輝ける善良なる有様を思ひ較べて、俄かに涙にむせんでしまつた。少なくとも、今から眞面目な生涯を送る様に心掛けよう心に誓つた。

其一日、彼は来るべき精神上の争闘に就て思ひ回らした。これから眞面目な生涯に立ち歸ると云ふのは容易なことではない。酒が呑みたくてたまらぬに相違ない。又今迄天性の如くになつて居る著實な働きを厭ふ心に打ち勝つのは仲々である。思へば悪

戦だ。自分にとつては未だ會てない苦闘だ。けれどもやればやる丈の眞價はある。木賃宿から出で、家庭に入り、下劣な朋輩を捨て、妻や子供に愛せらるゝ事になる。また牢屋を出で、安全なる平和なる生涯に入る事が出来るのである。確かに、奮闘一番しても損はない。

翌朝、彼は法廷に立つた。多くの證人は、彼の履歴を裁判官に上申した。が不幸にして日曜日一日、彼が獨り心に期した事を申出で、呉る者は無かつた。で一ヶ月の懲役を宣告せられた。新聞によつて之を知つた人々は、皆此刑を輕しとして非難し、「拳闘家」に對して惡罵を加へた。人は他人を審判く時に、多くは新聞などにのみ依り、他の事は信じないものである。表面から見れば元より一ヶ月の處刑は當然であつた。

處が其一ヶ月間の在監が、心を變へた彼に如何なる影響を與へたらうか。結果は頗る奇態なことになつたのである。不思議にも元氣はすつかり回復し、勇氣は緊張して、抑ふる能はず、前に脊力を誇つた當時の心に立ち歸つてしまつた。そして一方此迄の恐るべき己れの生涯を厭ふと共に、また他方に於て、全く善者にならうとの決心を忌むに至つた。

むに至つた。

彼は己れの中に、未だ達し得ない何かしら偉いものがある事を思ふた。而して達し得なかつたのは、今迄の墮落の生涯の故である。然るに今悔悛したならば、猶更に到達し得ないことになる。妻の下に匍ひもどつて、憐みを乞ひ、赦しを願ふなんと云ふ事は、酒に身を持頼つて致方の無い時ならば兎も角、今そんな事が出来やうか、と遂に自ら自分の心に反抗した。彼が悔悟を卑屈なことの様に考へたとは、實に如何程墮落したものか計り知れない。あゝ神よ、僅か數週間前に宗教に思を致したる彼が、此上又何處まで罪惡の深淵に入るのであらうか。

彼の心的状態を了解するのは甚だ困難である。

彼は未だ己が達し得ぬ何かしら勝れたものを意識した。墮落はしたが自分の眞價は、とても、そんなものではない。又敬虔なる赤褌衣姿の息子よりも遙かに優つて居る。彼は今一步のところ、口には述べ難い程の計畫をも成し遂げ得る力を有つた、非常に卓越なる偉丈夫になり得るのだと思つた。

いや、達せられぬことは断じてない、達し得るとすつかり決してしまめつた。然り、死にさへすれば達し得られるだらう！

其青白い、精練せられたる面色が、此の男の深刻なる靈的苦戦の跡を語つて居るのでは無いか。當時彼は凡てを忘れて、只死のみがよく自らを救ひ出すものであると心一ぱいに感じたのである。出獄の時既に、固い決心をして居た。妻を殺して潔く絞首臺の上に處刑されようと思つたのである。

此決意は到底動かす事の出来ない程すつかりその胸中に凝り固まつて居た。その凝り方は非常なもので、遂に酒狂の悪癖を全然取り去つたのである。心理學者は、宗教的觀念が忽如として、永い間の習慣を根こぎにする事を觀察して興味を覺ゆると同時に、また如斯全くアルコール中毒に罹つて居る者が、一朝深い悪しみの心を發したるが爲に、抜くべからざる酒慾を打ち破すのを見て、面白く思ふのであらう。久しい間に養成せられた彼の酒癖は、一度極みなき喪心の間に起つた一つの觀念の爲めに祓ひ清められた。しかしそれは一の悪鬼が去つて他の悪鬼が入り代つたに過ぎない。

「拳闘家」は釋放せらるゝや否や、直ぐに舊い遊び友達の處に行つて、十圓を借りた。それから友人達に強ひられて共に酔ふまで呑んだ。が借りた金は使はない。此金を以て一挺の肉切り庖丁と一籠の食物とを購つた。庖丁を懐にし、食物を持つて細君を訪れた。妻はこれまで彼の爲めに随分苦しめられた。また彼を助けもしなかつた。で今彼の來たのを見て甚だ冷淡な態度で迎へたのである。男は仲直りを求め、其記として携へ來つたものを與へ、其邊の音樂堂にでも出掛やうと云出した。女は本意無いけれども男の拳固が恐ろしさに、それに同意した。心中には殺意を秘め、懐中には刃物を隠した、酔ふた男の言ふ事に同意したのである。

男の其妻を惡む心は一朝一夕に起つたものでは無い。まづ女の性格からが、事毎に彼と衝突した。また自分の家庭の平和を破るのに、與かつて大いに力ありと思はれた彼女の親戚に對する憎惡の念も、皆妻の上集中したのである。妻を殺す位の事は彼にとつては何でもない。人殺しと云ふことが別に神經を惱ましもしなければ、恐しい事だとも感じなかつた。否彼から見れば、斯様の事は、一撃の下に多くの敵に復讐す

る事にもなるのだから、むしろ耻づる處なく正義を行ふ事に外ならなかつた。妻を伴ふて家を出で、街を行くと、不圖一軒の家の戸が開いて一人の救世軍人が現はれた。「拳闘家」も息子もよく知つて居る人だから、道伴になつて歩むうちに、救世軍の集會に來ないかどすゝめられて、御免を蒙ると斷つた。そこで嘗ては大酒呑で、同じく妻君をいじめた此救世軍人は「拳闘家」の方に向き直つて、熱心に、單刀直入的に魂の平和を得なくては決して幸福にはなれぬ事を道すがら説き、そして曰つた。「神様は貴君が、もつと善い生活の出来る様に備へて居られる。それは貴君とてもよく解るだらう」と。面倒臭いと思つた「拳闘家」は、突然路を横切つて向ふの居酒屋に入つてしまつた。細君は止を得ず自分を殺さうとしてゐる男を戸外で待つた。

彼の言ふ處によれば、酒を立ち呑みし乍ら、救世軍人の容喙に立腹して居ると、突如として、一つの幻象を見た。それは高尚なものではない。忽然として、妻が自分の企てた通り、願つた通りに殺されて、自分は自ら決心した通り、勇ましく絞首臺上に斃れた。事は成就し、恨みは晴され、神を仰ぎ只管祈り願つた事が達せられて、深く

自ら斃れたのである。自分は最早や屍だ。萬事休す。と一瞬の夢の如く意識たが、さて落膽したのは、それでも自分はまた平安を得て居ない事であつた。自分の魂は肉體を離れ、全く孤獨に、宇宙の何處かに居て、一人不幸に泣いて居る。自分は死んで居る。世と絶縁して居る。如何にしても浮ぶ瀬が無いのである。この幻象と共に心に浮んだのは、世間の人々が倅に後指をさして、「あれの父親は母親を殺して、死刑になつたのだよ」と云つて居ることであつた。

耻辱の浪が心に打ち寄せて、恐怖と恥しさが心一ぱいになつて、幻象から覺めた。生れて始めて、自分の墮落と汚辱を思つて強く心を撃たれ、自ら悟つたのである。如何にして此幻象が起つたかは、潜在意識の作用によつて説明する外はない。彼は久しく妻を殺害しやうとして居た罪を思ひ、そして潔く死ぬる事は名譽であると深く考へて居た。故に一旦神經の興奮し來るや、夫のマクベスの心に起つた如く、自分の企てが實現せられた有様を幻象に見たのである。即ち此幻象の起つた外形上の徑路は解つて居る。洋琴の如何にして鳴るかは明白つて居る。けれども之を弾く音楽家は

誰れであらうか。全然頑固になり、腐敗した此人間をして恥を感じせしめたのは、果して何の力であらうか。心理學上、恥辱とは何であるか。汚れて灰色となつた物が、如何して自ら恥づる事が出来るか。如何なれば洋琴の絃が、自ら琴樂の妙音を感じるに至るのか。それはさておき、次に此幻象の結果に注意せなければならぬ。

此結果とは「回心」であつた。即ち其人の意識の全體、并に一部分を、再び統一形成する事であつた。而も彼は此時酒に酔つて居たのである。

酔つたまゝ酒屋を出で、眞直ぐに救世軍の集會に行つた。妻は彼に従いて行つたが、「己れは救世軍に入るよ」と男は云つた。集會の後で彼は席を起つて、悔改の座に出で、其處に平伏して、基督の比喩にある男の様に、哀れなる罪人に、神が憐愍を垂れ給はん事を乞ふたのである。妻も其傍に跪いて居た。

彼は告白して、其時の感は到底口舌に云ひ表はすことができないと言ふ。過去は綺麗に消え去つたのである。頭を押へ付けて居た重い重い重荷が取り除けられて、空氣の様に軽い氣持ちになつた。心は清く澄み亘つた。嬉しくて堪らない。かゝる經驗を

表す爲めに古來用ゐられて居る形容語を列ねて、其時の感じを記さうとしても、到底彼の意識に溢るゝ許りに起り來つた、楽しい薫ばしい喜びの情を、満足に言ひ表はすことは出来ない。自分でもよくは云ふ事が出来ぬ。只彼の知るは、其悔改の座で、古い恐怖の衣が脱ぎ却てられ、新しく喜ばしいものを被た一事である。

彼自身に及ぼした影響は兎に角、其近邊に波及した反響は偉いなるものであつた。彼の回心の消息は、其地方のあらゆる汚穢の街に、小路に、ビヤホールに、居酒屋に、屋臺店に、町の角に、あらゆる合宿所に、穴藏にまでも、傳り傳つたのである。此邊の人々には拳闘家ほど偉いものは無い。例令この「拳闘家」の様に襤褸を衣、牢屋に入り、合宿所に住む位落ぶれても、尙榮えの餘光は彼の後へに従ひ、軒下に起臥して居ても、皆から崇められるのである。

次の日曜日が來て、此大勇士が、救世軍の會館から出て來る樂隊や、軍旗や、男女兵士の中に加はつて行くと、數千の人々は眼を見張て彼を見たのである。ロンドンの貧民窟の住民は、「拳闘家」を取巻いてたゞ驚いた。

「拳闘家」が神信心したせ。

と嘯き合つた。中には、彼が本當に堅い信仰家になつたのか、或はまた一時のことで直ぐに元の無信仰になりはせぬかと疑ふ人もあつた。子供達迄群衆に加はつて、穴の開く程其顔を見つめて居た。

然し「拳闘家」の信仰は大丈夫であつた。

其家庭は楽しく幸福になつた。救世軍の集會には缺かさず出席した。煙草も酒も全く忘れて、恒に平和な聖い日を送つた。其界限では彼が毎夜會館に出かけ、また日曜日毎に野戦に出て行くのを見ない時は無かつた。が更に人々の注意を促した事がある。それは外でもない。「拳闘家」が救世軍の所謂「人の魂を愛する心」を有つて居た事である。委細しく云へば、自ら幸福を得るの道を悟つた者の心に、自然に湧き來る處の、他人の不幸を見て、深く強く同情する真心である。「拳闘家」は己が魂の救はれたのを以て満足が出來ず、更に他の魂を救はんと欲したのである。彼はさんざ恥を晒した貧民窟に踏止まつて其傳道者となり、暇の時間も、餘裕の金も、一切獻げて

以前の墮落友達を救ひ出す爲めに用ゐた。後の話によつても明かになるのであるが、此男こそ實に多くの、特に絶望の中にある人々を救つたのである。彼は今日に至るまでも、一方自らの生活の爲めに營々として働きながら、人の世の悲惨を深く／＼その胸に刻み、ロンドンの罪惡の街に喪はれたる人々を救出さんと、時も金も惜まずに勉めて居る。著者は未だ嘗つて、困難にしてやゝもすれば絶望勝なる救靈の事業に、斯も堅く立てる沈痛の人を見た事がない。

さて其後の歴史は如何なつたであらうか。

彼の回心後、最早や逆戻する心配はないと見て取つた某貴婦人は、「拳闘家」と外二人の者に一頭の馬と、車とを購ひ與へて、八百屋行商をやらせた。商買は繁昌し、「拳闘家」は喜んで働いた。収入は家庭を支ふるに充分であつた。仕事は苦しくて休む間もないが、面白い働きであつた。

然るに細君の方が救世軍に冷淡になり始めた。救世軍なんか親戚からあまり譽められもせない。別に夫を罵るわけでもないが同情は全くない。蓋し彼女としては、夫が

救世軍人である爲めに自分が折檻を免れるのは結構だが、若し出来ることなら、救世軍を廢してしまひ、宗教から脱出して、その上道德を守つてくれれば、世間體が善いと云ふのであつたらしい。

一層苦しかつたのは、息子が救世軍を辭した事であつた。「拳闘家」は此子を非常に愛して居た。そして彼の救はれたに就ても、息子は淺からぬ縁があつた。それが止めて餘事に心を移したのだから堪らない。別に悪くなつたのでも罪に陥つたのでもない。又宗教に無頓着になつた理でもないが、たゞ昔の熱心と元氣が失せて、到底救世軍の様な嚴格な任務に服する事が出来なくなつたのである。「拳闘家」は家族中只一人の救世軍人となつた。

とある冬の寒さ厳しい日に、彼は北ロンドンで八百屋車を驅つて居た。三人の仲間の一人は、商買を止めてしまひ、今は只一人の仲間と歩いて居た。

「オイ親分、己はウイスキーを一杯やらう。馬鹿に寒い、一緒に如何だ。葡萄酒でもやらないか、禁酒家だつて葡萄酒なら可いちやないか。」と仲間が云出した。

「いや止さう」と「拳闘家」が斷つても、空は寒い。仲間は力の限り誘ひ惑はす。

「葡萄酒ならかまうものか。君の様な男が一盃位何のことも無いサ、己れが奢るよ。」寒さは寒し、家庭は面白くもなく、寂みしく悲しいのである。「拳闘家」の心は亂れた。仲間が居酒屋の戸口に立ち、口を極めて彼を招くがまゝに遂に中に引入られた。處が、葡萄酒に藥が投げ込まれて居たらしい。「拳闘家」は恰も彈丸に當つた人の様に忽ちに酔ひ倒れた。人々が彼を援け起して、チャンとして遣つた頃には、驚くべし、先の仲間は馬も車も奪ひ去つて、何處とも無く姿を隠して居たのである。蓋しかゝる事はロンドン生活の一面なのであつて、此の様な狡猾なる事は屢々行はれて居る。「拳闘家」が自分の處に歸つた時にはまだ酔つて居た。然し、彼が町をよろめき歩くのを見て、極悪人に至るまで、彼を嘲つたり言つたりする者は一人もない。皆一様に、此英傑が、再び亡びに落ちたのを悲しんだのである。恐しい顔をして頭を垂れ、千鳥足で、蹣跚歸る「拳闘家」を見て、街の人々は黙つて顔を見合せたのであつた。

而して直ちに評判に翼が生へ、其界限は「拳闘家」の回心の長持ちがしなかつた話

で持ち切つた。氣早い連中は、もう彼は家を打ち壊して、妻を殺したであらう等と騒いだ。中には用も無いのに態々其町を漫歩して、彼の家の前を行きつ戻りつした者もあつた。群衆が何處からとも無く彼の家の前に集つた。

不意に戸が開いた。と思ふと「拳闘家」が出て来た。彼は既に上衣を脱ぎ捨て、赤い救世軍の襯衣に衣更へ、眞直ぐに會館に行き、悔改の座に進んで、祈つたのである。

これは實に勇敢なる行爲であつた。然し「拳闘家」から見れば別に力のはいつた行でもなかつた。なせと云ふに、彼は北ロンドンの居酒屋で吾れに歸り、酔うて失敗し、孤獨なるに氣付いた時、ヒタと心に思ひ起つた事がある。それは、救世軍の制服を着ければ本心に立ち歸れると云ふ考へであつた。救世軍の名譽の爲めと云ふのでは無い。軍旗の保護が慕はしい。保護を受け度いと思つて制服を着けたのである。これは偽の無い處である。此の哀れなる敗北者が、何でもかでも、制服さへ着ければ、安全だと云ふ觀念を起したのは、實に感心なこと、言はなければならぬ。

其日以来彼はもう決してつまづかない。しかし暗い陰は益々増して来る。妻の同情が無い爲めに、家庭に於ける不愉快と苦痛とは日に日に加はる。孤獨の感は愈強くなる。生活の費用は、同情の無い、救世軍人以外の人々を相手に儲けなくてはならぬ。が委細かまはず、「拳闘家」は飽く迄も、此の西部ロンドンに踏み止まつて戦つた。その結果今では其諸街に群る、憐な、零落れた、悲惨な、喪はれたる人々を救に導く一大力となつたのである。

或人が私に云つた事がある。「拳闘家」は、舊い友達に近づき、救はんとして多くの時と金を費したが、思ふ程に救ひ出す事が出来ない事を悲しんで居る。彼は専ら友を救ふと云ふ事許り考へて居る。例の静かな低い聲で、人の魂を探ぐる様な目をし乍ら、いつも其事許り話して居る」と。

彼は一文も救世軍から受けて居ない。士官ではなく、一兵士である。一義勇兵である。救世軍に獻げる時間は、糊口の爲に苦役する時間を割いた零碎なる時間である。これ程の非凡な男を生活の爲に働かせないで、英國中を巡回して救の證言をさせ

た方が、救世軍の爲にも可いではないかと、自分は小隊の天使中校に云うて見た。すると中校が云うには「彼の人は折々大きな集會の時に證言をしますが、英國中、殊に競馬場のある地方には、よく知れ渡つた人だけに、その名さへ出れば屹度澤山の聽衆が寄つて來ます。然し救世軍では餘りそれを獎勵しませぬ。なせかといふに、いつもいつも自分の悪い事をした話ばかり繰返して居ると、後にはそれを手柄の様に思ふ恐があります。若しそんなことがあると大變に危険なことで、それでは救はれたのでも何んでもなくなりません。一體私共の目的は、唯人を犯罪や邪惡から救ふだけではなく、これを品性の高尚な人間とするにあります。彼の人の心がけは本統に美しく、而して其の他人の靈魂を思ふ情は、全く婦人の様に濃やかで、殆んどやる瀬のない程切實なものであります。そこで彼の人折角思切つて遠ざかりつゝある以前の惡事を、今更斷然なく語らせて、厭な感想を催させるよりも、寧ろその正直の額に汗して己がパンを儲けさす方が、餘程好いことに相違ありません。此點に就て私共の判斷は誤つて居ないと思ひます。救はれたといふのは、更に大なる或物に進む新しき端緒

に過ぎないのであります」と。

此小柄な中校の言は、心靈的勢力としての救世軍に對する、一新意義を教ふるものではないか。

持 餘 者

科學の上から見て、此の男を如何云つたら可いだらうか。此の人の父は、英國軍人の模範とも云ふべき、生來自制のある、自尊した、而も上官には相當の尊敬をばらひ、勇敢で、正直で、規律正しい人であつた。彼は當時の輕騎兵(今の驃騎兵)第十三聯隊に入隊して、クリミヤ戰爭中、バラクラバの戰には、右翼軍に加り、一口の劔を揮つて、露軍砲彈の真中に突進した夫の六百の精兵の一人であつた。而して辛うじて死の顎牙から免れ、地獄の口から脱け出して、一生を取り止め得た勇士であつた。又彼は英國中比類の無い程の優秀な騎士で、常に冒すべからざる威嚴に包まれ、その態度、容貌、言語には尊嚴なる風があつた。その上自ら守る處高く、己れの責任

に立つては頑として動かず、寡黙で、容易に物を言はなかつた。文豪カーライルをして評せしむれば、彼は偉大にして無口な奥の知れない人物であつた。

彼は英雄の名を残して軍隊を去り、チャリング・クロス・ステーションの一警部となつた。デトフォールドに在つたその家庭は、宗教的で、ゆかしい、和氣霽々たるものであつた。子供達は毎日曜日、晴れ衣を着て、日曜學校に送られ「望の組」に屬して居た。日曜日の夕には、人々を家に迎へて饗應し、讚美歌を唱ひ、唱歌を合唱し、宗教的の立場から、人生について議論を聞した。そうして乾いた喉をウイスキーや水で時々濕しては語り合ひ、男の人達は又シガーを悠揚とくゆらしては談じ合つた。そして議論は遂に結末も見ないで散會というのが常であつた。

然るに不幸此の勇士が永眠した時には、子供達はまだ幼少であつた。バラクラバの英雄は、幾多の勳章と、功名の歴史と共に、糊口に困る妻子を後に遺して行つた。その重荷は妻女の肩に落ち掛つたのである。彼女は止むなく、働口を求めて、遂にチャリング・クロス・ステーションの携帶品預所に勤める身となつた。彼女は今日に

至るまで勤續して居る。

蓋し此の婦人の如く獻身的生涯を送る者は、ロンドンに於て少なくない。身貧くして子供の爲に働きに出で、朝早くから夜遅くまで、營々と汗を流し、而も家庭を相當の幸福に保ち、子供をよく愛して、子供等が正直に、律義に、高潔に育つ様に、賢母の感化を與へつゝある婦人の數は案外多いのである。市中如何なる貧民窟に這入つて見ても、其處の牧師や、醫者や、保母や、救世軍人は異口同音に云ふであらう。その地方に住む最良の人間は、糊口の爲めに不斷奮闘しつゝある母親達である。

さて此の話の主人公は、上記の如き血統を受け、良き記憶を有ち、貴い聖い感化を被つたのであるが、年齒十四歳にして、兄が軍旗軍曹をして居つた補充隊に入るこゝとなつた。然るに當時軍隊内、殊に此の種軍隊内の少年の生活は、極めて殘忍酷薄なものであつた。天性伶俐で、巧みに虐待を逃れ得るか、さもなければ非常な元氣者で、殘忍い事に堪へ得る者でなくては、到底辛抱が仕切れない。兵卒共は、子供の心を頑固にするのを樂しみにして居た。丁度腕白小僧が猫をなぶる様な調子で、遊戯の如く

考へて居たものである。ところで此の主人公は、自衛の爲めには、敢て戦はねばならぬと始めから見てとつた程の元氣者で、高慢で、尊大なのに加へて、兄は軍旗軍曹と来て居るから忽ち増長した。そして數週間の後には、もう成人になりすまして、喧嘩はする、煙草は喫る、酒は呑む、鬭争も恐れぬと云ふ有様になつた。十五の時にはアイルランドにやられ、十六になつた時印度に送られたが、印度では最早や聯隊中誰にも劣はとらなかつた。一見敏捷で、操練に巧みで、麥酒を腹一ぱいに飲つて調練に出ても、上官に發見せられる事は無かつた。之か爲めに皆からは持て嘶され、自分でも得意になつて居た。兵卒共が酒保での話題は、大抵、誰は大酒を呑んで居ても足も亂さないと云ふ様な事である。是は彼等にとつては甚だ有要な話柄で、愉快に談論したり、賭事をしたり、果ては盛んな競争をおつ始めるのは皆此處である。誰が一番よく飲むか、ジャクか、ジョーか、あの隊か、此の隊か、僕等の組か、君等の組かなど、騒ぐ。酒に勝てる男こそ、彈雨をも恐れぬ勇士だ。酒樽に懼ける者は銃身をも恐れる。恐溺者は世に敵と云ふものが無ければ酒も鐵砲も要らないと云ふ。で、兵士は銃口に

も麥酒にも男らしく堪ゆるのである。彼等が男らしいと云ふのは、酒に強いと云ふのと、戦に強いと云ふ二つの意味を含めてゐるのである。乍然當の主人公は酒ばかりでは、何か物足らなかつた。何だか分らぬが、兎に角いらだつた心が、種々な事に表はれた。例へば、圖書館に行つては、英國法に夢中になる。喧嘩を買ふ。營所内の三百代言になる。チャンと豫め自分の根據を確めて置ては、議論をやつて騒を始めた。軍旗軍曹、中隊長、副官、大佐のきらひなく、抗辯しては自分の権利を主張り、上官達を困らしたのである。此の先生、當時恐らく聯隊中の最優等兵で、實に敏活で、立派で、元氣があつて、伶俐なこと此上もなく、加ふるに中隊第一の射撃家であつたから、誰れ一人手を下す事が出来なかつた。處で法律書を學んで見ても、射撃に成功したり、調練や、酒で人を凌いだりした時と同様に、別段意を満すに足りなかつたのである。矢張り何かしら不満足なものがあつた。彼は相當に教育を受けて居るから、今の自分に満足が出来ぬ。心中には物事を探究する精神が潜んで居て、營所中の法律家となり、更に世界の大事を考へた。何も

仕事が嫌なのではないが、人生そのものに嫌たらないのである。何處か此宇宙に自分が是非、面と向つて當つて見度い者がある。必要ならば骨肉相接して、素手で捕へて見度い様な氣がする。

コヌールと云ふ處で、彼は不圖救世軍の小隊に出會した。そして心中の疑問が氷解せられた様に思はれた。何者かに招ばるゝ様に覺えて、その小隊に行き出した。恒に酒氣を帯び、時には随分酔つては居たが始終集會に集ひ、祈禱會に出席し、おまけに自分が信者として適當な考へて居る標準以下の信者をば排斥した。是は實際妙な心の状態であつた。自分では、弱い者を援け、愚弄せられて居る者を擁護し、嘲弄する者を擯斥して居ると自任し、その上よくは分らぬ乍らも、神の觀念、天國や地獄に就ての思想、善と惡との戦に關する宗教上の論旨を是認してゐた。此様な考へを持つと、人間存在の意味が廣くなる。ごちらを向いても世界が廣く、呼吸が樂な様に思はれる。そこで、徳利を片手したまゝ、營所でも、酒保でも、一生懸命に救世軍を辯護した。救世軍の惡口でも云ふものがあると、盛に神の名を亂發して、怒號つけた。救世軍の

爲なら鬭争でもすると云ふ元氣であつた。

彼の精神は一寸解し兼ねるが、よく考へて見ると不思議ではない。此世の中に、宗教と云ふもの程、論説や、議論や、辨難の的となるものは無い。ある時ロンドンの監督が、ピクトリヤ公園で無神論者の講演を聞いて、之に反駁を加へやうと待ちかまへて居ると、突然脊の低い、汚れた頭をした男が表はれ、空箱を其處に置かと思ふと飛び上つて、熱狂した調子で、

「諸君！ チョ………：チョツクラあの、ベテン師ブース大將のことを聞きネイ。」と叫んだと云ふ。宗教と云へば多くの聽衆を公園にまで導き出し、凡の人を雄辯家たらしむるのである。宗教の事となると、夫の天性の兵營辯護士チャールズ・ブラドロ、即ち此主人公の如きは、夜更けて燈火消え、人の静まる迄も議論して止めない。此「持餘者」は、只仲間と議論仕度さに、又辯論や演説を以て自分の智慧を顯はしたさに、救世軍の擁護者となつたのである。若しも全聯隊が皆敬虔な基督者であつたならば、彼は反對に、無神論に加擔する爲め、其雄辯と拳とを用ゐた事であらう。

が丁度救世軍辯護者は少数である。それで充分だ。多勢に向つて麥酒に沸きかへる頭を上げ、鐵拳を揮ふのが愉快だったのである。

彼が印度を去る時には、來た時よりも餘程悪い人間になつて居た。其時伍長になつてゐて、今少しで軍曹補となり、更に最高下士に昇進する處であつたが、惜しい哉、彼は一ツの惡魔を迎へ入れた。議論好きが因となつて、人間の性情中最も悪いとされて居る惡魔が一ツはいり込んだ。それは他でもない、怒の惡魔である。「彼に痲癩の虫が付いた」と皆が云つたが、其通りであつた。

此實歴談は全く痲癩の研究であつて、酒癖の事は第二である。吾人の興味を惹くのは、怒氣が、段々此青年軍人の性質に勢力を増して、遂には頑強で仕方の無いものとなり、全く其人を捕虜にする筋道である。

今でも彼の高い頬骨の光澤のあるのと、眼の炯々と光るのを見れば、忽ちに赫となり易い性質が讀める。

英國に歸ると其夜、もう兵營から出て、翌朝まで、外泊して歸らなかつたので、營

倉に入られた。處が是が甚く彼の痲癩玉に觸つた。始ての犯罪であつたが、それが破滅の原になつた。決闘をする心算りで聯隊長の前に出たが、彼の勇士なる故を以て嚴罰には處せられなかつた。それでも懲戒を受けたのに業を煮やして、傳令室を下つた。それから三ヶ月も経過と、また、警官を撲つたと云ふので再び營倉の人となつた。此度のは前よりは罪が重かつたので、階級を下げられた。

破滅！ より外はない。

思ひ見よ、年若き青年で、教育に於て遙かに同輩に擢んで、聯隊中優秀な兵士で、射撃には優賞を得、容貌から云へば、立派で男らしくつて、人を人とも思はぬ風があり、體格から云つても英國軍人中の完璧であつて、細長りとして高く、肩巾廣く、胸は厚く、腕は長い。其上に觀察力を有し、何物をも恐れざる勇氣に満ち、若し常識を少しく働かせたならば、悠に下士官に昇り、もう二、三年もすれば相當の恩給を貰ふ身となつて、退營する事も出來たであらう。これ程の者が、折角成功の曉に臨んで、痲癩の爲めに、其生涯を過つに至つたのである。萬事は失はれ、前途は閉ざせ

る暗黒となつたのである。

聯隊は彼の爲に出来る丈の世話をしてやつた。おかげで將校會食所の給仕になつたり、士官の從卒や警官にも世話された。かうして多少でも級を下げられた埋合せをしてやらうと謀つて貰ひながら、どれもこれも、大酒を飲んで自ら棄てしまつた。彼はもう何も構はなかつた。好機を悉く棄て、前途のことなど考へもせず、愈々益々、奈落の底へと身を沈めて行つた。

二度許り殺人を行ひかけた。一度はマンチエスターで、水兵達と一人の女郎との下劣な喧嘩を買つて出た時のことである。こんな人間共の心をセークスビーヤが言つて居るが「持餘者」も之を見て甚く卑下の心を起した。街燈は金切聲で叫んで居る女の顔を照した。女が下卑た言葉を、嗚れ聲で亂發するの憤怒した彼は、突如彼女に飛び掛つて、喉をしめ、大地に投げ倒して、あはや息の根を止めやうとしたその時、折能く一人の老無頼漢が、彼を遮ぎつた。其男は嘗て、この「持餘者」と一緒に聯隊に居つた者であるが、聯隊の名譽に關するぢやないかと云つて彼をなだめた。こんな

ポロを下げた老無頼漢が、聯隊の名譽だなんと云うて止めたのも可笑しいが、然し、之が彼の頭を和げて、殺人を爲ないで済んだのである。

二度目はオルダーショットで、自分の情婦が、他の聯隊の男と一緒に散歩してるのを思ひがげなくも發見して、此度は、前の如く熱しはしなかつたが、極めて平靜に其女を殺す計畫を立てた。女に逢つて散歩に連れ出し、不實を責め立て、遂に飛掛つた。そして芝生の上に死にかつた女を棄てたまゝ、何喰はぬ顔で營所に歸り、心秘かに、捕手の來るのを待つて居た。然るに、驚いた。聞けば女は生きて居ると云ふ。其後間もなく軍隊を去つた。其時聯隊長は頻りに、今少しく留まつて、恩給の貰へる迄居る方がよからうと、懇々説諭したが、彼は大佐の説諭を聞かばこそ、却て不意に自分の用具の紛失した事に就て聯隊の不都合を鳴らした。それは、二三日以前に諸用具が渡されたのだが、軍旗軍曹が彼の分迄皆持つて行つてしまつたといふのである。大佐の知らなかつた新しい規定によると、其用具は此兵士のものであつた。「持餘者」はブリブリ怒つて、何とかして呉れと言つた。大佐は遂に六十圓の小切手を認

めて彼に遣り、充分説を入れて除隊を許した等は振つた話だ。「持餘者」はそれを
持つて直ぐに酒保に行き、飲んでしまつたのである。彼が數時間待たせてあつた馬車
に乗つて營所を退いた時には、同中隊の兵の半數許りが、同じく酔つばらつて、其馬
車を曳くと云ふ勢であつた。

斯くて彼は、母親の處から程遠からぬデットフォードの料理屋の玄關番となつた。
しかるに僅か一ヶ月の間に、五度も、酔つばらつて、主人の御目玉を戴くといふ始末、
お終には、主人から與へられた被服を脱ぎ棄て、デットフォードの大通で主人と格闘
し、そのまゝ出て行つてしまつた。それから彼が、次から次へと變つて行つた履歴を
書き立てたら限りが無い。要するに何の職業も酒と癩癩の御蔭でお拂ひ箱になつた
のである。酒慾を抑ふる事が出来ず、それを人から責められると忽ち怒氣心頭に發し
て、暴行を敢てした。しかし、彼には何處か人好きのする棄て難い處があつて、軍隊
に於ける經歷が上、述様な有様であり、其後の履歴が又面白くないにも不拘、市内の
ある大停車場の鐵道警官に備はるゝことゝなつた。

しかるに其處に勤めてゐる間に、未來の妻に出會した。其女は小柄の、青白い、聲
の優しい、優雅な美人で、髪は薄黄で、眼は矢車草の様にうつくしく、極めて柔和で、
やさしい静かな女であつたので、怖しく氣の暴い此男の心も惹きつけられたのであ
る。愈結婚式を擧げる其朝、式に列しよう云う友達を迎へる爲に、ウオタール！
ステーションへと出かけたが、不圖他の軍人達に逢つた。同聯隊に居た人達で、これ
から南アフリカに行くのだと云ふ。さうかと云ふ調子で居酒屋に這入り込む。蜜月旅
行の爲に準備して在つた金は大部酒屋の亭主の懐に入つてしまふ。式は午前十一時
にメリルポーンで擧げる筈であつたのに、花婿殿は酔つて酒氣紛々として十二時半に
漸くやつて來るといふ始末。式後牧師は、哀れな花嫁に夫を家に伴ふて、よく彼の心
を改めさすやう忠告をしたのである。

結婚後數ヶ月経て、新家庭の樂しみ尙鮮かに、長子の生れるのを待つて居る頃、彼
は當番の時間に泥酔した。警部は彼を罵つて、非番にしたところ、「持餘者」は怒つ
て、警部の顔に打ちかゝり、これをたゞ倒したのである。其夜、休職を命ぜられて

馬車に乗つて帰宅したが、時はもう一時であつた。沸々怒つて居る彼は、妻女を臥床から引き摺出して、衣物を着せ、通りに伴れ出し、早起の居酒屋が戸を開ける四時頃迄も、彼處此處、無理にお供をさせたのである。全く狂氣の沙汰だ。それから二週間して、長男が生れたのである。

此頃になると、怒りの悪鬼は、彼の全心を捕虜にして、夜も晝も不斷、猛りつゞけた。此れ迄はまだ多少の優しきもあり、愉快氣もあつて、友として、快い處があつたのであるが、今では、澁面の解けたことはなく、怒氣は常に胸中に蟠り、煮え立つ如き憤激の情は不斷心に一ぱいであつた。彼は自ら血は沸騰し、怨みの情は愈が上に高まるが如く覺えた。世の事一つとして憎からざるはない。生命からが、呪はしい。特に心の底から憎くて堪らないのは自分の妻である。俗に謂ふ「見るから虫に障つた」のである。

彼が今恥を忍び、幾分研究的な態度をもつて、當時の事を顧みるならば、妻が無暗やたらに憎らしかつたのは、要するに、妻が、餘りと云へばお話しにならぬ程、柔和

であつたからである。彼女は夫が酔つばらつても、怠けて居ても苦情一つ云はない。毒付かれても抗辯をしない。妻子を悲惨な目に合せても夫を責めせず、却て、自分が此種の英國婦人には珍らしい程料理に長じ、家政に巧みなるを幸ひ、誠に靜肅く身を獻げて家の爲めに働き、出来るだけ家庭を整へてゐたのである。この優しい性質が、却て若い夫の心を怒らせたのである。

男は今少しく手答があつて、彼女の眼に復讐の炎が燃え、その紅唇から罵りの聲が迸しり、小さな拳が自分の顔に打ちかゝるのを、心から見たく思つた。若し左様出たら口實が出来る理だから、力の限りに打ちのめして、ウンともスンとも云へない様に征服してしまつて、犬の如く待遇つてやらう。さうすれば溜飲が下る事であらうに思つたのである。然し妻は何處までも柔和であるために、男は自分で自分が下卑て見え、心が退けて仕方がないのであつた。

殺してしまいたいと思ふ程の憎惡の心が、小さい家庭を地獄にしてしまつた。實際後になつてから、彼等の住所である地下室の臺所で、ケーキを作りながら、細君は著

者に向つて、「本統に氣狂ひでしたよ」と語つた。それは顔も上げないまゝ、弱々しい聲で、「夫は病氣ですの」とか、「お天氣が悪い」とか、云ふ時と同じ様な沈んだ調子であつた。すると若い夫は、赤兒の座つて居る長椅子のこちらの方に腰をかけ、長い脚を伸べたまゝで、靜かに笑つて、「實際、私は『持餘者』でしたよ」と相槌を打つのであつた。

其當時彼が妻女を虐待した方法は亦一種特別であつた。決して腕力に慙へない。「打撃て呉れた方が可い」と思つたと彼女は云つたが、男は左様はしないで、他の方法を探つた。即ち始終脅嚇した。殺すぞ〜と嚇したのである。時とすると、靜かに自分の椅子によりかゝつて、さも憎しげに女を睨まへ、「何時か一度は殺してやるぞ、覺えて居れ！」と宣言のであつた。或時はそこら中を踏みならし、口汚く罵りつゝ歸つて来る。顔は眞赤で、眼は炎の如く、何でも手當り次第に投げ散らし、躓づく物ば蹴散らして、神の名を呼んで最早一日も妻と同棲する事が出来ぬと誓ふ事もある。また或時は、夜半に赤兒の泣く聲に目を覺まされて見ると、母親が愛し相にあやして

居る。己つと云ふ權幕で、蹴ね起きて、どんなに寒い時でも不關焉ない、部屋外に妻子諸共逐ひ出し、時によると追つかけて、あはや殺さんとする事さへもある。數多度、妻は嬰兒を抱いて、長い夜を、石炭室に、または、内から門をかけて小さい部屋に、或は隣家に、街頭に、悲しく過すのであつた。

嬰兒がまた、憤怒の種となつた。妻と同じ位に憎かつた。そのイヂリ泣く聲を聞いては、幾度か、怒氣の發作のを止め得なかつた。殺してしまひたい。ひつ攫んで、窓の外に放り出すか、床の上に敲きつけるかして堪らぬ心を、漸くのことで制してゐた。兒の事で妻を罵る。妻に對する限りなき怨恨の情で、罪もない嬰兒に當り散らす。呪詛する。齒をくひ縛り、絞め殺してやらうと思ふ心に震へる手を上げて、赤兒の傍に立ちはだかる。風前の燈火の様なものだと思へば猶更腹が立つ。ぶつた切つてくれやうか、押し潰してやらうか、八ツ裂きにしやうか。妻の困るのを外に見て、入用の金で居酒屋の錢箱を肥して歸つて來ると、子供は躁がしく、むづかつてゐる。忽ち例の癩癩の虫が承知しない。妻子を部屋から逐ひ出し、一層殺して仕舞つて厄介

拂を爲やうかどさへ思ふのであつた。

此様な日が三年も續いた。幸ひ此婦人は基督者であつた。此恐ろしい三年の月日を夫の心が改まる様に祈りに祈りつゞけた。信仰のある身にも荷が重過ぎて、二度計りは自殺をさへ企てた。

其間に、狂せる夫は、最早愈々、妻を殺してもよい時が來たと思ふに至り、殺してやらう、己は人殺になるのだと、夜も晝も考へ續けた。が思へば我ながら自分が恐ろしくなる。威嚇する者は自ら戰慄く。

ある夜の事、夫婦喧嘩をした後で、ブラリと街道にでて行くうちに、不圖救世軍會館の前を通り合せた。入口の戸が開け放してあるので、入つて見やうかと云ふ氣が起り、憑かれた人の様にフラ／＼と内に入つた。彼が英本國で救世軍會館に入り込んだのは、これが始めてであつた。見れば、皆悦ばしい讚美歌を唱ひ、拍子を揃へて手を拍きながら、愉快溢るゝ有様で、其盛なことは、普通一般の冷淡な人々には解し兼ねる程である。室は晴やかに、陽氣である。歌が了ると説教が始まる。其主意は、賤

しい淺ましい、罪業の深い人々は、悔改の座に進み出で、自ら正しく爲る力のない事を認め、神の愛しみと御力を受け度き事を、公けに告白する様にその熱心な獎勵であつた。彼は今更に心中に潜んでゐる殺人的な憎惡の爲に、自分が何處まで身を破るか分らぬことを思ふと、甚だ懼ろしく感じて、其獎めに應じて悔改の座に出た。そして其處に跪つき、兩手を以てその顔を被ひ、何か不思議な力によつて、自分の心が變化の様、心の憂愁が去る様にと俟望んだ。

救世軍人は彼を取巻いて助言をし、そして親しげに其廣い肩に手をかけて、

「救ひを得ましたか、救はれたと感じますか」と訊ねた。すると彼は反撥的に、

「イヤ此處にやつて來た時と少しも變りませぬ」と云ふ意外な挨拶をやつて了つた。其夜は自分に愛想をつかし、人生を呪ふて、家に歸つた。彼が此話を著者に談つた時、妻君は臺所で子供のシャツに熨斗をかけて居たが、彼は一寸話を切つて、

「オイ、あの晩、お前は何處に寝たんだつたかネ、石炭室か、お隣りか。」小さい色白

の婦人は手も止めないで答へた。

「あの晩ですか、石炭室に寝てみましたの。」

話しはそれからそれへと續く、熨斗は休まずに白いシャツの上を滑つてゐる。

救はれ損つた彼は前よりも更に墮落した。其當時は地下鐵道に備はれて居たが、長い時間、鼠のやうに地下に過し、やつと一日の仕事を終へて出て來る時には、いつも苦々しい厭な、望みとては無い氣持になつて居た。だから彼の抑へ付けられた心を息めるには全く不適當な働であつた。

今一度救世軍に行つて見た。敢て悔改の座へも進み出た。が矢張り平安が得られず、魂の暗黒は明けない。丁度其絶望の最中に、ある昔のことを思ひ起した。それは印度滞在の當時、ヒカンダラバッドの牢獄で始めて番兵をした時に、一人の囚人が烈く笞打れるのを見たことである。其時彼は、頑固な冷血い、傍若無人の惡漢ではあつたが、あまりの無慘の有様に、殆んど氣を失つたのであつた。その恐しい光景が、今潜在意識の作用によつて、明瞭と眼前に浮かんで來た。そして心から其亂打せられ

た人が、羨ましく堪らなくなつたのである。

極めて率直に、強く彼は曰ふ、「私は當時その囚人のことばかり思ひ起して、アアあの鞭を自分の體に受けて見度いと朝夕願ひ、いや眞實に、自分の腦中に、鞭が喰ひ入る様に思はれました」と。

又、何故であつたか分らぬが、嘗て意味も解らず讀んだ聖書の一句、「我靈永く人と争はじ」と云ふ言葉が、屢々記憶に現はれて、彼を脅かした。

ゼームス教授の言葉を借りて言へば、此の退職軍人の地下鐵道の番人は、自ら惡き下等な不幸な者であると自覺してゐたのである。ロンドン市の傭夫で、注意する人もない、一般人生から見れば機械に過ぎないが如き人間の中にも、如斯問題に就いて思い回らして居る者があるとは奇ではないか。我等は、如斯人々の魂の奥底にも、己が魂が宇宙と連り、神に對して責任を感じるの心あるを見て、憤み思はざるを得ない。

「持餘者」は無限の靈界を模索ても得る處なく、痼癖は愈々益々嵩じて、慰めをす

るには、悔改の座よりも、麥酒をやつた方が増したと考へた。破れかぶれで酒に浸り、酔つて夢中になるのであつた。それも狂はしい、恐ろしい思ひから逃れたい許りのためであつた。

遂に或夜酔つて歸る途すがら、今夜こそ妻も子供も逐出して、家財道具一切を賣飛ばし、ロンドンを後に放浪し、何でも彼でも關はない、後は野となれ山となれと云ふ決心をした。全く酒が爲せた業である。もう自分の魂が如何様にならうと心配する事も不要ぬ。前に横る責任を皆蹴飛ばしてしまつて、自分一人、好き放題に元氣に大膽に遊んで行けばよい。兎にも角にも無意味な働に面白くもなく關係はるのは御免だ。家庭のうるさい責任を通れ度い。良心の苛責なんぞを免かれて、冒險をやつて見ることだ。一體己の様な盛な、元氣に満ちた野心のある立派な人間が、毎日毎日地下鐵道なんか埋もれてゐて、小さい青白い妻に羈絆され、衣食を備へてやり、おまけに子供迄養つて小面倒臭い家庭の習歩車に縛りつけられて、あの紳士とか云ふ者の真似をしてゐるとは何の事だ。己は嘗ては軍人として印度で、自由に、豪氣に、

放埒に生活した人間ではないか。

家に歸るや否や妻子を放逐してしまつた。泣き／＼出て行つた跡を不圖見ると、暖爐棚の上に金銭がある。逐はれたる妻は、夫の爲めに、家賃を拂ふ金と、小使錢二三圓とを残して行つたのであつた。流石の惡黨も、この優しい夫思ひの妻の行を視ては、稍眞面目に歸つて考へた。そして朝は平常の如く鐵道の務に出かけて行つた。

茲に到つて、本人自身にも解らない不思議が行はれて、話は終りに近くのである。早朝大英銀行からセバード園に到る途を辿つてゐるうちに、圖らずも一つの聲が心中に發するを聞いたのである。其事を彼は靜かに又強く、動かすべからざる確信を以て談る。實に物の音を耳朶に聞き取る如く、其朝明瞭なる聲が自分の心に響いた。曰く「汝が救はれざるは、神の罪にあらず、汝自ら過てるなり、汝は神を信せざるにあらずや」と。

是は心理學者にはよく分つてゐる事で、即ち全き歸順の暗示に外ならなかつた。明白にして強大なる基督の命令である。種々な言葉を以て云ひ表はされてゐる緊要なる

觀念、即ち、肉の生命を棄て、我慾を去り、魂を渡し、そして新しく生れ更ることの絶對に必要なを暗示したものである。此再生こそは基督の啓示の眞髓であることよ
で謂ふてもよいものである。

神に全く任せ、自ら苦悶することを止め、他力により、陶器師の手中にある粘土の如くになり、靡げながらに解し得、又何となく親しみを覺える或る宏大無邊な力に、自分の意志を全然委托ると云ふ。是が、その聲を聞いて直ぐに起つた、極めて咄嗟の烈しい心の變化であつた。

彼は全然神に身を委ねたのである。

デ・ラメニスが嘗て學生に教へた言葉に「諸君、人間が動物中最も苦しむ理は何處にあるか知つて居るか。その理は憊だ。人間と云ふ者は一方の足を有限界に、他方の足を無限界に置いてゐて、昔恐ろしい時代に行はれた様に四頭の馬に四肢を結んで引裂かれるその代りに、其二つの世界に引裂かるゝのだ」と云ふ事がある。實に人間の苦闘は茲に在る。學者たると文盲たると、偉人たると野人たると、又宗敎家たると無宗

敎家たるとの別は無い。皆各其分に随つて、秘に思ひ、魂靜かなる時、此兩界に挾まつて心を裂かるゝのである。此戦は凡ての人に来り、遁るゝ事は出来ぬ。著者は思ふ、全く世に捨られた最下等の惡漢の中にも、此靈的戦は決して止まない。種々人に依つて様式は異りもし、また側道に入る事もあらうけれども、有限、無限の兩界間に起る戦は死に至るまでも續くのである。是を、兩界間の苦闘と謂つても、又高貴な性質と下等な性質との争と稱けてもよからう。夫のハムレットの味つた如き深刻なる奮闘であつても、又は番頭が今少しく忠實に精勤に務を爲さんと努力する位のことであつてもよいが、大切な點は、此二重性格が人類凡ての中に在り、しかもそれが人生に一定の靈的命數即ち永生なくば、解釋すべからざる程に固着せることである。此話の主人公は、潜在意識の方から無限界の事を多少氣付いて居た爲めに、有限界を憎んだのだ。彼は心の暗の中にも他人の中により善い生命の在る事を多少氣取つて、此肉の生命を忌み厭ふたのである。彼は自ら悪く、下等にして不幸なる者であることを自覺し、其願は漠然として明かでは無かつたにせよ、自ら正しく高く幸福に感

する様改め度いと欲したのである。

天來の聲に聽いて、全く歸依の心を起すや、彼は忽然として、嘗て無き平和を衷に覺えた。それは恰も颯風去つた後の静けき湖水の如く、吹雪晴れて瞬く間に平穩なる夏の日に變せしが如くであつた。此平和の中に、更に聲が在つた。他から來るのではない、外から自分の良心に呼び掛けるのではない。自分の心の奥自ら聲を發して、「我に來る者は我必ず之を棄てじ」てふ基督の語を繰返してゐるのであつた。

彼の自白によれば、此一句が絶えず腦中に往來して止まない。地下鐵道の暗を通して行く列車が轟々として地震ふ間も、此句ばかりが耳に付いてゐた。消えたかと思ふと、直ぐに再た起る。車輪の騒音にも吸ひ込まれず、音と云ふ音は皆打ち消して此聲獨り聞える。客車と客車の間に立ち鐵の格子戸の中に閉ぢ込められて、振動、喧噪の真中に在つても「我に來る者は我必ず之を棄てじ」との語が歌の如く聞え、振鈴の如く耳底に鳴る。反覆また反覆しても、厭はしからぬのみか、却て喜悅の情起り、威嚇、失望の思は消えて、驚畏と希望とを覺えたのである。「私は、全く救はれた事を知

つた」と彼は云ふ。

奇蹟が行はれ、其結果は即刻に顯はれたのである。彼の靈魂が釋然として覺め、光明を認むるや、彼の容貌は變り、多くの朋輩は彼を取巻いて、何事が起つたかと思ふに問ふ程であつた。口輕の一人が、思はず、「君、救世軍に入つたのか」と訊くと、「いや、まだゞよ。然し救はれたから直ぐ入らうと思つてゐる」と答へるのであつた。誠に人間が變つた。暴君の如く彼を支配した酒慾も、彼を惡鬼たらしめた恐ろしい憤怒怨恨の情も、彼の前途を暗みにした人生を呪い嫌う心も全て痕蹟もなく消え去つたのである。而して心に滿つるは只極みなき歡喜であつた。

如斯き驚くべき心の變化、完全なる性格の改善は、宗教の感化なくしては能ふ處でない。催眠術家が數週間の施術によつて、人の惡癖を治すことのあるのは事實である。或場合には薬を用ひて、永い間困難な療治をした結果、酒慾の止めらるゝ事もあつた。乍然、一瞬にして、人の性格を一變せしめ、其時其場に於て、苛刻なる性情より全く解放し、加うるに燃ゆるが如き熱心に滿ち、全生涯を正義の爲めに働かん事を

願ひ、恰も天國の乳と蜜とを味ひながら生くるが如く感ぜしむるものは、宗教の力ばかりである。

是實に「回心」の不思議なる點であつて、心理學も之を説明する事が出来ぬ。又宗教に於ける最大の力であつて、神學もこれを證明することは出来ない。宗教的實驗は、實際それらの論證を要しないのである。

其後二三日して、妻を探し出し一伍一什を物語り、そこで互に喜び、救世軍に入り新らしい生涯を始めようと相談した。其週の土曜日、彼等の前生涯の悲惨なる有様をよく知つて居る町の救世軍會館に行つて、彼が酒と怒とに半狂亂の姿で二度も跪いた其悔改めの座に、共に跪いた。「是は救はれる爲ではない、救世軍の軍人として、神の爲に働く決心を告白する爲であつた。」と彼は語つて居る。

此の出来事は今より六年以前にあつたのであるが、それ以來今日に至るまで、此立派な好男子、全く活き／＼とした容姿の善い彼は、何の報酬をも受けないで救世軍のために働き、己が小隊の生命となり精神となつた。今では「拳闘家」と共に、其地方

の働きに熱と命とを注ぐ一大威力とされて居る。彼は説教は下手で餘りやらないが、それでも是非話さなければならぬ折には、心は恐れながらも群衆の前に立つて「證言」即ち自分の恥づべき罪の生涯と、大なる赦免を受けたる事を話すのである。彼の家庭はよく整つてゐて、愉快である。露店で安く買つて來た本は棚に満ちてゐる。其近邊では最も幸福な敬ふべき家庭である。毎日の糧を勞働によつて得てゐるが、今は相當な位置に登り、友人も、朋輩も、賤しい隣人も皆彼を敬ひ讚め且愛して居る。彼の幸福は他人をも祝福し、チャーリング・クロス・ステーションの近くに住んでる年老いたる母親は、今も尙命存らへて、息子の救はれたのを見て神に感謝してゐる。いかにも困つたと云ふ風に頭を動かして笑みを湛えて、静かな調子で「持餘者」が謂つた。

「それは不思議ですよ、全く。大抵の事は放擲れも能ようが回心したのは決して忘れられない。それ處か愈々回心したら大變ですよ。全く新しく生れるんですからネ。それは今だつて過ちも仕ますサ。然し、回心の前よりはずつと異つてゐますよ。人生

の意味に付ても考へが違つて來ました。考へが皆變りました。愉快です。他人を援助度いが一ばいですよ。働くのが面白いし、家庭を愛しますし、あの嫌ひであつた子供のこと、今は大丈夫辛棒が出來ますよ。」

労働者の部屋とは一寸信じられない様な彼の居間に、一つの箆筒があるが、其中には子供の玩具やら手帳やら繪箱やら、玩具の犬猫等一ばいに入れてある。それは夫の度々逐ひ出された子供の遺物である。

彼は涙ながらに謂つた、「あの兒が死んだ時には、腸を斷られる様に思ひました。入つてした。自分が惡黨であつた時にあんなに酷い目に合せましたから猶更不慙でした」と。

彼は再或時著者と二人で、ボロを衣た、顔は汚く洗足のまゝで、誰れ顧る者もない兒等が群つてゐる街を歩き乍ら、突然「あの子が死んだ後暫くは、此の子供等を見る度に、何故此奴等が生きてゐて、自分の子丈が死んだのであらう等と考へました」と謂つて居た。

然し幸に今は次の子が生れてゐる。彼は自分で矢張り子供嫌ひだと云つてゐるけれども、時には心配相に細君から注意せられながら、自ら嬰兒を膝に取つて、まだ救の問題も起らず、たゞ齒が生へるのでむづかつてゐる可憐な者を守つて、悦ばれるとまでは行かなくとも、せめて細君の手助けなりともしやうとしてゐる。最早や、妻が如何に意地悪くしたとしても、妻子を戸外に放逐するやうな事は大丈夫無い。また何時かは例の人を惹きつける性質を傾けて、此兒を精一ばいに愛護しむに到るであらう。

酒 飲 親 翁

一人の人が救はれると、救世軍は其の人の新生命が丈夫に育つ迄は、随分氣を付けて面倒を見る。老練な士官が日に何度となくこれを訪問し、其の新しき目的を説いてこれを奨励し、就中誰か彼の爲に心配して居るものがあるといふ自覺を強からしめるのである。

「拳闘家」の更生は、ロンドンの其の方面の小隊に於ては、非常に重要な出來事

であつた。それ故天使中校は早くも之に着目して、或時は彼を家に訪ひ、或時は其仕事場にて彼に會ひ、又或時は其歸途に彼を待迎えて、親切に之を其家に送り届けてやる様なこともあつた。

「拳闘家」は或る馬車製造工場に勤めて居つたが、其工場主は無神論者であつた。しかし彼と中校との間には共通の處があつた。それは二人共音楽を好み、殊に手風琴を好いて居つたことである。中校が私に云ふには、「私は唯尋常に弾いた丈ですが彼は玄人でした」と。

此手風琴の手蔓で基督者は無神論者の工場へ押かけたのである。中校と馬車製造工場の持主とは折々打とけた話をした。而してロンドンの真中の忙がしい工場で音楽を談じつゝ、天使中校は「拳闘家」の救を監視し、又無神論者の剛情我慢を軟げて居たのである。

或日「拳闘家」は馬車工場を訪れた中校にむかつて云つた。

「此處に毎日、新聞を持つて来る男で『酒飲親爺』といふ綽名をとつた者が居りま

す。それこそ文字通りの酒飲親爺ですが、俺だつて此の間迄は似た様な男だつたのが救はれたのですから、彼だつて助からない理はありません。貴女一つ話してやつて下さい。無口で、風變りの「拳闘家」は、救はれて間もなく、斯くして「靈魂を愛する熱情」を發揮したのである。

小柄な中校は、或日其新聞賣が、競馬の勝負番附を見たさに新聞買ふ労働者を當て込んで、馬車工場に尋ねて来るのを待ち受けた。

今迄随分、ロンドン市最下等の零落し切つた人間も多く見たが、然し流石の中校も「酒飲親爺」に會ふ迄は、人間が罪惡の爲めにこれ程忌はしく、苦々しい落ぶれ方をするものとは知らなかつた。

此男は恐ろしい酒飲の兩親が、酒びたりになつて居る間に生れたもので、「酒飲親爺」と綽名をせらるゝだけに、殆んど生れながらの酒飲であつた。彼は幼少の時から酒を飲むことを教へられ、酒なしには夜も日も明けぬ様に育て上げられた。彼は今四十五六歳であるが、全く習慣性の酒飲というよりも、酒浸りといふ方が好い位である。

その衣物の汚らしいこと、健康をひどく害ねてること、は、その時中校は氣付かなかつたが、何よりも彼女が恐ろしい程に感じたのは、其眼の様子であつた。その精氣の抜けた眼は何とも云へぬ。いくら智慧をふり絞つて見ても適當な言葉がない。只「麻酔」そのものでも云はうか。それでもまだ甚だ當らないが、かうでも云ふより外に語はない。麻酔せられた眼！弱いのでもない、無氣力でもない、狡猾のでもない、野卑でもない、全く麻痺だ。生きてゐる人の眼でもなく、それかと云つて死んだ人のそれでもない。是迄に生きとし生ける者の中には勿論、斃れた者の中にも、こんな眼は無つたに相違ない。眞に死んで生れて永久に無感覺な眼と云ふの外はない。ブワ／＼とした上眼瞼が瞳孔に垂れかぶさり、脹れて白らたけた顔のブク／＼した肉が下から押し上げがつて、眼があるのか無いのかも一寸明らぬ。衰へた眼窠の底には、釉薬で光らせた、小圓板様のものがあるばかり。無神経で意味も無い生存、亡び行く生命の花盤。それ以上に言うべき言葉がない。

其他彼は眞の賤奴の特徴をよくも表はしてゐる。最も野蠻の國にだつて見ることも

出来ないばかり下劣で、殆んど人間とはいへないほどに墮落してゐる。丈は低く、横太りで、歪んでゐて、見るからに醜惡だ。其襤褸と云つたら、間違つて近よりでもせうものなら、呼吸も止るかと思はれる程惡臭を放つ。貧民窟の子供等迄が、彼の通るのを見て嘲弄する。

文明が此男を生んだのであつた。彼のやうな男がロンドンに、處を得て住んで居たのだ。それを考へると忌はしい限りではあるが、彼も亦我々と共に當世の人間である。況して救世軍人の眼から見れば、一個の立派な靈魂だ。

天使中校は優しく、

「お前さん、餘り面白さうでもありませんねエ、然うでせう。」

と語をかけたが、彼は眩ゆげに中校の涼しい眼を見ながら、黙つて居る。さながら聞いた語の意味も分らず、また何んぞ返事をして好いかも分らぬ如くに。

「多分私に何かお世話の出来ることがあるでせう。世話をさせて被下い。その中に私はお前さんの家を探ねて行つて、お前さんに會ひたいのですが、好いでせう。」

「酒飲親爺」は何んとも答へなかつた。彼女は一層傍近くに寄りそうて、其の男の曇よりした眼を見つめながら、

「私はお前さんを助けて上げたいのです。私も些とはお前さんのことを聞きました。皆で『酒飲親爺』つていふでせう。『酒飲親爺』でも何んでも宜い。私はお前さんの宅へ尋ねて行つて、知合になつて置きたいの、さうすれば又何んぞ幾らかお世話も出来るでせう。ごうかそうさせて下さい。ね、好いでせう。」

彼女は終に其意の在る所を彼に通じ得た。彼は彼女に其住居を知らせた故、早速之を訪ねたのである。住居といつても室一つで、一週三圓五十錢の家賃を拂ふて居たが、其の邊は、罪惡に満ち、墮落の底にあるのは勿論だが、それよりも更に、その貧窮い有様と云つたらお話にならぬ。中校は其處に入り込むのを懼れてはゐなかつたが、親爺の部屋を開けた時には、人の善い天使の如きさすがの中校も、背を向けて、逃げ度く思つた位であつた。息を止め、嘔氣を催し、身震ひするばかりの惡臭が、古巢から發して來たのである。フランスの文豪モウバツサンは、一度讀めば忘れられない程の

雄勁深刻な寫實の筆を驅つて、或る農家の臭氣を記してゐるが、それと似た體た臭に、ロンドンの垢染た貧民窟の惡氣を加へた一種異様の臭が、厚い帳の垂れ下がつた様に、「酒飲親爺」の巢に満ちてゐた。モウバツサンの所謂牛乳の香、林檎の香、煙草の臭、古い家の名狀すべからざる奇臭、即ち土や壁や諸家具の臭み、昔溢れたスープの臭、洗濯水の惡臭、老いた貧しい野人の臭、獸類と人間と一所に住む臭等が、諸物、諸生物の臭氣と混じ、それに時即ち過去の臭ひまでが加はつて、紛々としてゐた。

酒飲親爺の住む室は、その上恰も野獸園の如き有様で、動物の臭さへ高かつた。一疋の犬が、取亂された寢床の穢ならしい上掛の上に頭をもたげて、入つて來る人に咆え付た。そうかと思れば豚鼠の兒等は、敷物もない汚れた床の上を飛んで、向の寢臺の下に隠れて這入る。兎箱の中には鐵網越しに、うす汚いやつが漸く見える。その發つ惡臭は嘔吐を催すばかり。爐の傍には囊の上に猫が數疋うづくまり、閉した窓の處には、天井から鳩の籠がぶらさがつてゐる。

ロンドンの裏面をよく表はして此部屋は、また息の詰る如く暗い。何かしら灰色

の霧が汚れた壁と壁、暗い天井と臭い床との間に一杯に満ちてゐる様である。毀れた寢臺の上で犬が唸つたかと思ふと、霧の中から動くものがある。よく見れば女である。憔悴た、悲氣な囊の布を衣た人間だ。中校の前に表れた彼女は見るからに憂鬱で下賤く、同棲してゐる諸動物よりもまだ下等に見える。而も、「酒飲親爺」を愛してゐるといふから不可思議ではないか。こんな男と縁を結ぶまでに零落するとは意想外である。而して此の女が此の男を愛してゐるとは尙更解らない。

天使中校は遂に内に入つて、此不可思議な「酒飲親爺」を愛してゐる婦人と話した。そこの鳥や獸が話題に上つた。聞けば皆此の夫婦の間に出来た息子の所有であると言ふ。本當に、一人の子供があつたのだ。こんな巢にも新らしい生命が恵まれて、その鳥や獸類は、倅の寵愛物であつたのである。

母親は自慢らしく、客人の前に息子の寫眞を持つて來た。意外なことには、顔の輝いた、立派な身態の青年の寫眞である。伶俐な性質は眉宇の間に顯はれ、自尊心は全體の容貌にも明かで、少なからず女士官を驚かせた。此兩親の子だとは如何しても信

じられない。

「息子さんですか。」

「エ、さうは見えませんがネ、けれど私達は大切にしてやりました。結構な處に勤めてますから、大丈夫だと思つてますよ。何でも間違の無いやうにして呉れなくつちやあと思ひますよ。」とグズグズした調子で答へた。

よく話し合つて見ると、極貧墮落の底に在りながら、此恐ろしい兩親は、不思議にも純潔な、強い犠牲と愛を其子の爲に獻げたのである。部屋が燦るのは、來る度に喜ぶ彼の寵愛物を打ち棄て得ないが爲である。而もその諸動物は、新聞賣つて得た錢の中から、呑み度い酒も無理に我慢して、それが爲めには云ひ知れぬ苦心もして、子供の爲めに買求めたものである。憐れな「酒飲親爺」の腐れはてた心にも、子を思ふ潔い愛情が、白い花の如く咲いてゐた。婦夫はよく其子を愛した。子の爲にはそこが復と無い自分の家庭であつた。

中校は此息子のことを以て兩人を動す挺とした。彼女は屢汚い部屋に兩人を訪れ

た。先づ、彼等の爲に幸福な道は「酒飲親爺」が禁酒の誓約に記名して、約束を守るより外ないことを奨めて見た。處が、其提言には、二人共直ぐに同意した。が、愈實行と云ふ事になれば、酒を飲まない妻までが、それは仲々達せられない、雲を掴む様な話したと云ひ出した。

「だつて貴君、小童の時から飲み續けて、今ぢやあ飯にも代へられネーんだから。綽名だつて『酒飲親爺』ぢやありやせんか。今更ら止められやしませんやネ、まあだめでサ。」

と女が云へば、「酒飲親爺」は議論はしないが、沈黙たまゝで禁酒の不可能なことを表白し、哲學者が一寸雀の喧嘩を眺めてゐると云つた様な調子で、女の喋るのを聞いてゐた。

然し遂には、中校の親切と仁愛の心が通つて、二人は時々近所の救世軍の集會に出席するまでになつた。例の野獸園を後にして、汚い檻樓にくるまつて、夕べの集會に出席し、他の賤しい人達と一緒に後の方に座を占めて、樂隊や讚美歌や、祈禱や説教

を傾聴し、室内全體の一種温い、輝いた、清い空氣に觸れながら、他人の知らない様々の思ひに沈んだ筈であるが、實の處、彼等は無感覺であつたのだ。集會の意味も解らない。丁度鐘樓の屋根に止まつてる二羽の鳥が、教會の音樂を聽いて居ると異りは無い。只來て坐つて、歸ると云ふに過ぎなかつた。

中校は思つた。彼等は殆んど、人間の同情も及ばない程の深みに落込んでゐると。其下士官も失望して、「いくら何と云つてやつても一語も解らないのですからネー」と嘆息した。誠に兩人の無知覺には落膽失望せざるを得ない。彼等の罪だとか、落魄だとか云ふことは關はないけれども、たゞ全く理解力を失つて居るのには困る。恰も厚い刃も通らぬ帳が垂れて、その魂の暗黒と、光明との間を隔てゝゐる様だ。本當に手の觸けやうが無い。解らないのだから。

處が、その頃、丁度中校は例の「拳闘家」と語り、一つ大々的にリバイバル集會を試みやうと企てた。「拳闘家」を先頭に、昔は近所の人達から、鬼の様に扱はれたが、今は彼の感化によつて悔改め、眞人間になつた連中が、先づ最惡の街を行軍し、それ

から會館に歸つて、一人々々が各々の履歴を物語ると云ふ事に議が一決した。勿論彼等は公々然と行軍などするのを喜んだ理ではない。氣の進まないのを敢て勇を鼓して試みやうと云ふのである。何といつてもその周圍には自分等の妻女が居り、暴漢の大群があるではないか。

物靜かな、青白い、沈痛な、しかし人の魂を熱愛する「拳闘家」は、堅忍不拔の精神をその小隊に吹き込んだ。

「神様は、己等の爲めに幾何程恵を賜つたか分らない。一寸許り神様の爲に働く位何でも無いぞツ。」

天使中校は人々の意見を尋いて、愈々リバイバル運動に手を初めた。

第一の仕事は假裝行列で、近邊の最も善く無い町を、一番人込みの多い夕方、馬の引く荷車に乗つて練つて行つたのである。昔の悪黨の改心した連中は、夫々前の生涯を語る衣裳をつけた。例へば囚人の服を着て刑罰に苦しむ様を表した如きである。

町々は人で満ちた。荷車が群集を押し分けて行く傍で、天使中校や其部下が、群

がる人々に向ひ、會館に集會があるから来る様に勧めた。結果は案の通り未曾有の聴衆で、廣い會館も立錐の餘地がない。其中には「酒飲親爺」等夫婦も、特に中校の案内によつて早くから來てゐた。

集會は軍歌に始まり、聖書朗讀は放蕩息子子の比喩、簡單なる祈禱があつて、次に愈々證言といふことになつた。それは順々に立つて、如何に苦惱し、幾何程墮落の底に陥たか。又救はれて後の家庭の幸福、清い生涯、心の喜び等について物語るのであつた。ゼームス教授の言葉を借りて謂へば、彼等は同胞の前に、嘗ては悪極で、下等で又不幸であつたが、今は神の恩恵により、明かに正しい、高められた、そして幸福な者となつた事を自覺するに至つたといふことを述べたのである。

最後に天使中校が熱心な奨励を試みた。如何程卑賤く、他人からは棄てられ、耻辱の中に在る者でも、一度悔改の座に進み出て跪き、罪の赦しを得ん爲めに神に祈るならば、即時に幸福と平和の思に心が輝き亘るのである。是は事實であつて、此の壇上に居る人々はその活ける證據であると説いた。

数名の人々が座を立つた。その多くは例のロンドンの労働者特有の鈍い、卑しい、無感覺な性質の人で、何か不愉快な六ヶ敷い事でも仕る様に、グズ／＼と悔改の座に進み出た。「神よ、此罪人を憐み給へ」と叫ぶ人もあれば、また、たゞ頭を下げて黙つてゐる人もある。婦人の中には泣いてる者もゐた。

此悔改者達の一番後の方には「酒飲親爺」夫婦も加はつてゐた。

之を見た中校や兵士達は少なからず驚いた。他の人々はたゞ特に汚穢い、下卑た、酔つぱらひで、仲間の中でも珍らしい奴だ位に思つてゐる丈だが、中校等は「酒飲親爺」の心は全く無感覺で、その魂は全然困惑してゐることを知つてゐる。

中校は此哀れな親爺が腰掛に着くや否や、其傍に進み寄り、肩に手を置いた。見ればかの小さい曇よりした眼には涙を浮べてゐる。

「私は、ジョーの様になりたい!!!」

彼は泣聲で謂つた。ジョーとは今證言をした一人であつて、次の章の「常習犯人」の主人公である。

其後彼が中校に話した事がある。

「私がジョーの話聞いて、彼がもどごんな男であつて、今はごんなに變つたかと考へてゐると、俄に私も神様に御目に掛つて、ジョーの様に爲て貰ひ度いと云ふ氣が起たんです。心からですよ。本當に俄かに、是非神様に逢い度いと決心しましたよ。確く決心しましたよ。」

と酒精でクジャ／＼になつてゐる男には、出さうも無い元氣を出して、決心といふ言葉を、繰返し／＼云ふた。そして

「私があの時跪いて祈つてゐると、神様の靈が下つた。確かに。其時私は思はず叫んだのです。『オ、神様、私をジョーの様にして下さい』つてね。祈つてると、靈が下つた。私は必つとジョーの様に成れると信じた。そして本當に救はれたのです。」

と言ひ足したのである。

後が悔改めた時に其決心は固かつたが、中校は、誘惑の力の大なること、彼が酒精

に全身中毒してゐることをよく知つてゐた故に、彼の救ひが健全に持ち續けられるかどうかを危んだ。その上特に心配したと云ふのは外でもない。彼が新聞を配達する得意には、其近邊の居酒屋を悉皆網羅してゐたことである。で何か他に生計の道を立ててやらなければ、何日かはまた墮落するであらう。必ず強い誘惑に勝ち得ない時が来るであらう。若し他の職業を探してやつたならば、こんな落魄れた飲酒狂でも、また神の恵によつて、酒癖と戦ひ、自ら守るかも知れない。左様だ、是迄もそんな例が乏しくない。

そこで中校は此問題を相談すべく「酒飲親爺」を訪れた。親爺は例の如く、だるい無感覺な眼をして、彼女の謂ふ處に耳を傾けてゐたが、その親切な思慮ある言葉が一尙解らぬらしい。中校は止を得ず、家内の方に向直り、

「他に御亭主の出来る仕事は無いでしやうか。是れまで他人の仕るのを見て、自分もそれを仕て見度いと思つた事は何か有りませんか。」
と尋ねると、家内は

「お前さん、何か有るかい？」
と訊く。何と云はうかと考へて、暫く口はモグ／＼させてゐたが漸く、
「何んにも仕度かあネイ」
と云つて、床の上の豚鼠を見てゐた眼をそらし、薄暗い窓の方に向けて、
「皆に俺が回心したことを知らせるのだよ」
といふのであつた。

中校は、その危険なことを知らせてやらうと頗る努めた。それは數週間或は數ヶ月位は誘惑に敗けぬだらう。が、今から時が経つて後、病氣でもするとか、不愉快だとか云ふ時に、失敗する様なことは無からうか。特に回心と云ふ事は、實は永い永い旅である事を覺悟せなければならぬのだ。始め決心した時の輝く思だとして、いつかは消え去るかも知れぬ。輝くその雲が上に消え昇つたその後、生涯の極までずうつと續いてゐる長い長い途が横る。さて起ち上つて歩いて見ると案外遠い。始めは、鷺の如く翼を張つて昇る勢で進み、やがて此度は地を走つて居てまだ疲れないが、遂に

最後の榮えある頂點に来ると、ぼつ／＼歩いて而も氣力を失はない様になければならないのである。中校は此心證が、彼の飲酒狂にもよく會得せらるゝ様苦心して説いた。處が矢張、

「俺は確かに回心した事を皆に知らさにならん」
との一點張。

中校は猶も心配をして、もう燃え盡さうとしたこの焼殘木の信仰を監視してゐた。然るに彼は確かである。誘惑せられることもあるかと尋ねると、「酒の慾めは遁げやした」との返事である。相も變らず居酒屋には出入するけれども、決して恐れてゐない。他の信者達も度々彼を訪問しては同じく、もう酒を飲み度いとはちつとも思はないのかと問ふと、「酒の慾めは遁げやした。」彼の答は常に變らない。實際又そうである。不思議といへば不思議ではないか。

或日のこと、親爺とある居酒屋に入つて行つた。土曜日の午後で労働者が一ぱいである。彼のポケットは金銭で充滿てゐた。集へる人々は妻子の事等一切忘れて、高聲に

話し、ガラ／＼笑ふので部屋中はさながら唸る様。其中を「酒飲親爺」は、新聞を持って帳場へと進んだ。

土曜日の午後の居酒屋は、お祭騒ぎの様に動搖めいてゐる。労働者共は、ビールの一、二壇も傾けると、もうそろ／＼暴れ出す。「酒飲親爺」を見付けた一人の男が呼びかけた。

「オイ、そこのは『酒飲親爺』公と見たは僻目か。爺一寸來ネイ。一杯おごるよ。一つ救世軍を酒に浸けてやらうか。」

「酒飲親爺」は我不關焉と新聞を配て居たが、その間に先の男は一壇を注文して、「オイ、飲れよ、コラ、親爺………」
ときめつけて、改心した人の前に酒をつきつけたが、親爺は立派に掉頭を振つて斷つた。

「エイ、飲めよ、男らしくやんネエ、貴公に一壇位何だい。一斗酒でもいけるぢやネイか、飲めッたら。」

「イヤ飲まぬ。」

「フン、チヨイト爺さん、貴公貧乏だらう、エツ。」

「左様サ。」

「お負けに妻女も小兒もあるんだらう。」

「左様サ。」

「ぢやあ、五十錢も有りやあ大分助かるな、ヨシ爺、俺が五十錢遣るよ。正直正銘だ。一壺飲だらやるよ。嗅いで御覽、オイ大將、この香を嗅いじやたまるめエ。サア、一杯飲んな、五十錢儲だ。」

「イヤ俺はいらん。」

「要らない?。」

「要らない。」

「五十錢くれてもか。」

「千圓だつてご免だよ。」

「手前本気で云ふのかッ。」

「左様サ」

「ぢやあ浴びろッ」と呶鳴つたかと思ふと、壺を掴んで親爺の顔に麥酒を振り注けた。動搖と云ふ大笑、親爺の酒を浴びた姿が一層可笑しい。眼を瞬たき、顔の雫をばらひ落し、口から頤の邊を拭つてゐる。

「爺さん、それでも可い香ぢや無いのか。ハツハツ、ビールの芳香は格別だらう。」

馬鹿野郎飲めば可いのに浴びるつちや何事だ。一寸來な、もう一杯奢らう。金は遣らない、ビール丈けだよ。」

「俺は不要ない。」

之を見て居た亂暴男等は、親爺の決心があくまで固く、また迫害に遇つても斯くまで自若たることを非常に感じた。「酒飲親爺」は財布の金を一文も費さないで、その上一人の男からは新購讀を申込まれ、凱旋せる英雄の如く、其居酒屋を出たのである。それから早や數年を経過した。然るに親爺は相も變らず信仰を棄てない。のみなら

す、一方救世軍小隊に寄附金を出しながら、追々と蓄財し、遂に其近所のある店を買ひ取つて、妻子もろ共前の恐ろしい巢から引移り、新しく生涯を始めることゝなつた。かくの如くして彼は幸福に満ち、敬ふべき階級に登つたのである。妻も息子も、親爺の決心の堅固で、抜くべからざるものあるを見て、遂に救世軍に入つた。「酒飲親爺」は自分が救はれて以來、心密に、何時か息子が救世軍の爲に一生を獻げ、士官となつて働いて呉れる時が来る様に願つてゐたのだから、妻子が今其望通り救世軍に入つたのは、親爺にとつては此上もない喜びであつた。救世軍の士官として働く如きは、己れの任ではない。自分は生計の爲に専ら働かなければならないのだ。自分に出来る事と云つては集會に出席したり、樂隊に従つて行軍に加はつたり、或は店に来る憐な不幸な人に個人的に説く位が關の山である。幸ひ息子は多少書物を讀んでゐるし、性質も良い。他日、此世界に普き、博愛的大軍隊の一士官として起つことも出来るであらう。それが唯一の楽しみである。

一度はあの様に破滅に陥つてゐた人間も、今は幸福である。圓滿である。彼の回心

は、其近邊の人々にとつては非常な出来事であつた。特に信仰が堅く、いつまでも後戻りする様なことのないことは、誰れ一人不思議に思はない者はなく、其感化は決して小さいものではなかつた。彼は直接傳道者の様な仕事をしなかつたけれども、陰然として正義を進むる一大威力であつたことは只驚くの外はない。街行く人は皆彼を仰ぎ見た。四つ角に、或は居酒屋の戸口に立つ放蕩無頼の徒は、尊く幸福なる生涯に生れ代つた「酒飲親爺」を見て、彼が「ジョーの様」に爲り度いと叫んで悔改めた時に感じた様な、一種の靈感を覺えたことであらう。彼は如斯く救ひの事實を廣告したのである。

此種の人々にとつて、宗教は神學でない。事實である。彼等は神秘的な奥深い人間ではない。定義等は解らぬ。「酒飲親爺」も、信條だとか神の性質に關する概念だとか云ふものを語る力はない。彼は只單に、堅い決心を以て短刀直入的に救を求めた時に、神が彼を救ふたことを知つて居る。彼は單純に、己が絶望の底から救ひ出された事を知り、又彼が今甚だ幸福であることを知つて居るのみである。

近所隣の無頼漢共が彼について認めたまものも、單純な事實である。見よ、恐らく此界限で、最も下劣な男、何といつてもあれ程の酒浸り男が今日の當り、清く、幸福な、尊い生活をしてゐる。宗教を信じてゐる。宗教は奇蹟を行つた。一度決心して之を捕ふれば、宗教は結構なものである。「酒飲親爺」が立派な證據だ。信仰してからの彼の變り様はごうだ。此の奇蹟の前には、如何なる居酒屋の無神論者の議論も、霧の如くに飛散する。由來事實は頑強なる巖の如くである。況んや其事實が、現に生きた人間に表はれて、町を歩み、人の様に呼吸してゐるではないか。

斯様にして、「酒飲親爺」は大なる感化を近隣に及ぼした。「拳闘家」の様に人を驚愕せしめる程華々しい印象を與へたのでは無いけれども、却て平靜にして永久的な感化を殊したのである。彼はむしろ、ロンドンの善良なる界限の人に生寫しであつた。居酒屋で宗教に關する議論があると、いつも結末の處は、「何でも可いサ、兎に角あの「酒飲親爺」が救はれたのは奈何だ！」と云ふのであつた。

或日、中校の許に、「酒飲親爺」が病氣であるとの通知が來た。早速行つて見ると、

彼は最早や瀕死の有様である。度々病床を訪れては親切の限りを盡したが、病人の方でも、口は相變らず拙いけれども、今迄に無く打ち解けて話をした。

中校は慰めて云つた。

「親爺さん、貴君は善き信仰の戦を戦つて呉れましたね。貴君は一旦信仰に入つたからには一度も後を見返りませんでした。墮落しませんでした。眞實に大勝利です。貴君の悔改めたのは多くの人々の祝福となりました。實を言ふと、皆が貴君の信仰の、長持ちすることを疑つてゐました。いつかお酒が飲み度くて、矢も鐵砲も堪らなくなるだらうと思つたのです。若しかそんな誘惑が來た時に、貴君がそれに打ち勝つ様に、多くの人が祈つてゐました。」

病人は思ありげに微笑んで、
「左様です。貴女方は私の酒が後戻りするかと思つて心配して居なかつた。けれどそれは何でもありません。神様が、もうすつかり酒の慾を取つて被下いました。そりや奇蹟ぢやありませんや。偉い奇蹟はアノ…煙草でしたよ」と答へるのであつた。

聞けば、救世軍の人達が、酒が飲み度くて胸も裂かるゝ思であらうと心配してゐた其數年間、彼は人知れず、隔れ難い煙草を止めやうと、一生懸命になつてゐたのである。他人には秘めた奮闘である丈けに、其苦しみも一通りでは無く、氣も狂ふかと思はれる事もあつた。悪鬼が頭に入り込んで居て、強くニコチンの麻痺力へと誘ふ。之は何うしても抜く能はざる誘惑であつた。乍然彼は勇敢に戦つて、之に打ち勝つたのである。何も煙草が道徳上悪いとか、又は煙草から酒に後戻するとかを心配したのではない。只どうせ成るなら最も良い救世軍人になり度い、凡ての事を神様の爲めに棄て度いとの決心を以て爲したのである。

そこで軒下から拾ひ上げられて、眞人間となつた此ロンドン人は、回心よりも、酒から不思議に通れたよりも、神様から煙草に打勝つ力を與へられたのを、非常な奇蹟と信じたのである。煙草を吸ひ度い慾は、恒に身を離れなかつたが、而も之に打ち勝つ力は絶へず與へられたのである。

愈 臨終に當つて、天使中校は尋ねた。

「貴下は全く幸です、ね、神様が何も彼も赦して被下つたことをよく御存じでせう。」

「ハイ、何も心配は有りませぬ。」

是が最後の答であつた。

「酒飲親爺」の住つた町の人々は、今日に到るまで彼の事を話し、其葬式の立派であつたことを得意になつて物語つて居る。彼は恰も一國の勇士たる英雄が、儀仗兵の行列を以て華に葬送せられる様に、救世軍的葬式によつて葬られたのである。幾千の人々は街に列り、墓地迄會葬した。其地方の人は皆「酒飲親爺」の最後を見んと外に出た。彼等は其行列を見物して、無意無識の間に、勇敢に戦つた英雄の立派な最後に感化せられたことであらう。知らない人が見たならば、其處の人々は王様の葬儀を送つて居るのかと、思ふかたも知れない程であつた。

蓋し如斯は、ロンドンならでは見られない圖である。それも時偶の觀光客の眼には觸ない事實である。其處から一丁か二丁も來れば、既う誰も「酒飲親爺」等の事を知つてゐる者は無い。然し、其特種區域では、「酒飲親爺」とさへ云へば、國家の大

英傑の事よりも有名で、人の注意を惹き、八ヶ間敷く論せられたのである。
彼の死は大なる出来事であつた。その救は偉大なる感動を興へた。彼が生きて、彼が死んだその町は、今日に至るまで、静かなからず彼の救の感化に與つたが、今後末永くその感化は變らぬであらう。

常習犯人

犯罪者も、吾人一般の者も、人間として左程異つた者では無いと云うことを、國家が認めるならば、犯罪防止の方法に、一大進歩を來すに相違ない。蓋し文明社會の大多數が、生存の第一目標としてゐる處は、金錢であると云うても過言ではない。而して更に、大部分の人々は、出来るだけ少く働いて、自分の必要とする以上の富を得ようとしてゐるのも事實である。近世の政治及び事業會社等の精神は、要するに、出來得る限り少しの努力を以て出来るだけ多くの報酬を得ようとする、個人の慾望の敷衍せられた處に、その目的を置いて居る。夫の勞働賃金の引上げや、勤務時間の縮小問題も、詮ずる處、犯罪者の心を刺戟し、泥棒哲學を作らしめる反社會的不名譽なる力が、社會的な、尊重せらるべき形をとつて顯はれたものに外ならないのである。

*ハプロック・エリスは其著書に、囚人達が牢屋の壁に書き付けた言葉を引照してゐるが、其中に「神も此處に居るのは善いさ宜ふ」「元氣を出せよ、娘達、恐れることがあつたものか」など、ある。犯罪者の哲學は、暫く刑罰を辛棒して、此次には捕まらぬやうに用心をすることである。

尙、犯罪者の中には是とは別に、義侠的の性質を有し、運命に勝ち、大膽で、小説的で、甚だ冒険好だという様な者もある。

ハプロック・エリス氏は其著「犯罪者」中に、數多の權威ある學者の説を引照して、吾々が所謂社會の敵と呼ぶ者は、昔ならば世の稱讃を博すべき者で、只或る種の衝動に従て事を爲してに他ならないことを證明してゐる。しかし今日、社會の表面に立つて花々しく活動して居る實業家連も、實は是れと全く同じ衝動によつて動いてるのである。更に某大家は云うて居る。「近代の常習犯人の大多數は、不幸にして今日に生れたために、其功を認められない有様にあるのだ。もしも數十代前に生れたならば、或は一部落の酋長にも成つたであらう。……彼等犯罪者は、野蠻時代の人の性質習慣を祖先から受け繼いで、新教育を受けた近代人の間に生活し、自らの性行の要求を満さんが爲めに努力すればする程、益無頼の徒として取扱はれるのである」と。

又別の學者は同じく敘べて居る。「彼等が若し北米土人の部落に入るならば、部落の誇りとなり、高德の貴族となつたであらう」と。更に某氏の曰く「今日所謂犯罪者なだとか云う名の下に置かれてゐる事であらう」と。

る者は、古代物語中の英雄である。昔ならば一種族又は一部落の敬畏すべき酋長とも云ふべき者を今日は牢に打ち込むのである」と。又曰く「如何に多くのホームー作の敘事詩中の英雄が、今日、牢獄に幽閉せられ、然らざる者も、暴漢だとか、破廉耻漢だとか云う名の下に置かれてゐる事であらう」と。

少しく觀察の眼を働かす者ならば、今日多大の財産を擁して、幸福に浸つてゐる多くの公人中には、詐欺に等しいことをやつて金儲けに成功し、犯罪者が拙い遣り方で他人の財を狙つたに比して、たゞ巧妙に法網をくゞつて行つたに過ぎない者の少くない事が分る。又法廷に會社發起人に關する訴訟事件が起ると、大抵の被告人は會社法に精通し、又かゝる事件の性質として、證據を擧げる事が困難なるが爲めに處刑を免れるが、然し其道の人々は皆、彼等は、最も下等な惡徒で、不正の手段によつて、他人の財を奪うのを仕事とする犯罪者として、牢獄にゐる大小の盗人輩と等しく、苦役に處せらるべき者であることを知つてゐる。

何時頃から、犯罪心が人の心に萌すかと云ふことに關しては、トシル・ファイルツに

收容せられてゐる少年囚を訪れた某氏が、次の如く書いてゐる。「少年囚を訪うて歸宅の上、友人間に、彼等が少年時代に犯した小犯罪に就て訊ねて見た。處が、彼等は其名望、智能に於て、今相當の地位を占むる人々なるに不拘、皆一樣に其の少年時代に、トシル・ファイルツに收檻せられてゐる少年達の犯したと同じ罪惡を犯したことを告白したのである。自分等に就て見ても、少年時代に六七年を過したウエストミンスターの學校生活當時を顧みるならば、斯やうな惡事は毎日行はれたのである。若しもその學生達が、その後オックスフォードやケンブリッジの大學に送られずして、矯正院に送られたのであつたならば、吾人の友の多くは、今日のように國家の爲めに、貴族院に威風を添へ、衆議院の榮譽を高からしむるが如き地位に登らないで、夫のドツクヤーの囚人等の間に苦役してゐたかも知れないのである。」

今此處に記さうとする物語は、ある近代の犯罪者の話であつて、犯罪と云う問題に就いて、既に人類學者や犯罪學者達の云つたことに裏書をするに止るが、然し話の結末が示すやうに、此の主人公の如く、其心が全く、反社會的本能によつて浸徹されて

ゐる人間でも、一度道德的衝動が與へられるならば、充分改革せられ、靈の新しい生命を受ける餘地のある事を示すものである。心理學は此回心を可能ならしむる感化力を否定することが出来ない。又心理學のみが、人心の完全なる科學であると主張する事も出来ない。犯罪學者も、監獄改良家も、此の宗教力を借るのでなければ、常習犯人を感化して、充分に改善せしむる事は不可能である。只一つの力のみよく常習犯人を變へて、終生善良な人たらしむるのであつて、其力は即ち宗教である。

此話の主人公ジョーは、ロンドンの貧民窟に生れた。両親は稍良い方の生計を立てて居たが、運動場としては、往來の外になく、遊び友達としては惡少年の他にはないといつた様な少年時代を送つた。馬鹿に強く、大膽不敵で、それに自分の境遇が實に狭苦しく、閉め縛られてゐるのをよく知つてゐたから、何か豪い事をやらうと元氣勃勃としてゐる少年の御多分に洩れず、向見すの冒險に、身も魂も打ち込んで仕舞つたのは自然のことである。

彼は日曜學校に繋がれてゐるやうな小僧ではない。結構な、教會の受賣的宗教は、

決して彼の如き心を、靈的實在に觸れしむる丈の力は有たぬ。彼は四方煉瓦と壁とで閉ぢ込められて居るのを見て、冒険を思立つたのである。彼は自分で、短篇小説に價するやうなことを、なし得ると感じたのだが、四ツ角に立つて居る巡查を見て、彼の身體中に漲つて居る慾望を充さうとするには、どうしても巡查に手向つてまでも、街上の冒険を見付け出さねばならぬことを、明かに感じた。何か自分が元氣に任せて行らうとすると、社會は包圍攻撃をする。馬鹿ッ、社會と戦ふ迄だ。彼は九歳にして始めて牢に入つた。

その前に社會の法則を破つて、一片の肉を盗んだが、案外拙劣をやつて、樺杖で八ツも打たるゝ憂き目を見たのである。しかしそれで悪事が止まばこそ、また更に大きなことを仕でかそうと企んだ。小な盗み位では彼の泥棒心が満足しない。そこで押込みをやつてやれと思つたのである。尊敬すべき讀者諸君が、若し九歳の子供が押込みを企てたのを驚くならば、御自分が九ツ位の時に、戸棚の砂糖をつまみ食したり、食料室から砂糖漬の果物を盗み出したりした事は無いかどうかを考へて頂き度い。加う

るに、此の少年は、前に、手柄顔なる巡查に連れられて警察に行き、もつたいらしく長官の前に引き立てられて、笞を以て心を頑固にせられた事があるのでは無いか。若し鞭打れて後、羊の如く温順しくなつたとしたら、貧民窟の腕白小僧連は彼の事を何と云つたであらうか。此少年は獅子の如き心を有ち、大膽で、向見すで、勇敢で、強く、刑罰を何とも思つては居なかつたのだ。

著者は、其當時彼の頭を支配したものが何であつたかを知らうとしたが、彼ジョーが告げ得た事はたゞ、何でも思切り冒険を行つて見度い、偉い人間になりたいと云う一事であつた。近隣の柔和い子供等は日曜學校に行つたが、彼には馬鹿氣て見えた。ある種の人は彼にとつて、可もなく不可も無く、敬ふべき者だとも思はれなければ又卑しむべきものだとも考へられない。まあ少しも興味を感じなかつた。又彼等では満足しなかつた。しかしながら敢然として事に當り得る、大膽不敵な極めて男らしい人に對しては、限らない敬慕の念を禁じ得なかつたのである。役は何とかしてその様な立派な人間になり度い。甞に泥棒として立派な玄人となるばかりでなく、かの何者を

も恐れぬ、警官も、裁判官も、牢獄も、絞刑吏の繩も恐れぬと云う貧民窟の首脳連に伍し度いと願つた。

貧民窟に住む極めて幼稚なる子供の中に、犯罪心が深く、速かに發達して行く有様を了解するためには、彼等の生活状態を觀て、それが極めて不活潑で、周圍の感化が悪しく、その上縛られた境遇にあるということを知らねばならぬ。

父母と同じ部屋に雑魚寝させられたために早熟し、無邪氣な子供氣は疾くの昔に失うた少年等は、肉慾を刺戟する様な物で満ちてゐる町に出て来る。そこでは下劣淫蕩な人間の漁り求める春畫の小店、裸體を觀物にして客を引く安芝居、卑猥極る自動畫鏡等が人の心を惹いてゐる。これを見物したり、買つたりするには金錢が要る。金錢を得るに一番面白いのは盗むことだ。否、食物や、煙草や、繪が欲しければ、金錢で買はなくつても直かに盗めば可いのである。

この繁華な町に出て来る子供等の家と之つたら、御話にならない。一夜眠るのたつて氣持ちの可い話では無い。沉んや永く住むに於てをやだ。これは愉快極まる冒險的

な生涯を送り度いと思つてゐる、元氣盛な腕白小僧連の到底堪ゆる所ではない。彼等はまだ大いに活動し、ハラ／＼するやうな危険を冒し、禁せられた事を無理に打ち破る様なことがしたくて仕方がないのである。

トマス・ホルムス氏は嘗て著者に尋ねて曰うた。「君は嘗て、極貧の生活を味つた事があるか。可成に暮して、俱樂部や組合なんかに入してゐる技手の家庭ではないよ。モット／＼／＼の底の、狗舎か穴倉か、泥溝の中に住んだら奈何ものか想像が付くか。君が若し、少年時代を屋根部屋に暮し、母親が一日十四時間宛燐寸箱を作らへて一週漸く四圓許りの金を儲けると云ふ有様であつたら、君は今日如何な人間に成つてゐたらうか。其部屋で食事もある。それはお話にならぬ。學校に行く迄糊鍋の世話をして、歸つてからまたやる。そして日が暮れ、ばそのまゝ藁蒲團の上に皆と一緒にござる寝する。その薄黒い世界が君の天地であり、君の境遇であつたとしたらどうだらう。」

加之、茲に今一つ記憶せねばならぬ大切な事がある。それは大膽な子供の虚榮心、

即ち雄々しい子供の威張り度がる心は、うつかりすればそのまゝ、かの所謂犯罪者の虚榮心に變はつて行くことである。此の點に就てハプロック・エリス氏は、その著「犯罪學」の中で言うて居る。

「犯罪者の虚榮心は、一面智的事實であると同時に、他面情的事實でもある。虚榮心は、人生に就てまた自分自身に就て誤つた評價を爲さしめ、且つ己惚心を増長せしむるものである。この虚榮心は、多くの美術家や文學者と雖も亦多分に有つてゐる。しかもロムプロゾーの謂つてゐる如く、むしろそれは犯罪者が有つてゐる以上である。美術家文學者等の虚榮心は彼等の異常な特質を表はしてゐるのだが、犯罪者のそれは彼等を墮落に導くのである。之は犯罪者が或る點では非常に發達したものを有つて居ながら、一方に於て心意組織に缺點のある事を示すものである。立派に發育した普通人にも虚榮心は有るが控目である。それが甚だしくなると、異常な人間即ち心意組織の平衡を缺いた美術家だとか、犯罪者だとか云ふやうな者になるのである。ジョージ・バロー氏は、よく人の心を觀察した人であるが、犯罪者の衣服に關する

虚榮心に就いて述べてゐる。『世の中に、一般の泥棒程の見え方は無い。隙さへあれば身装に浮身をやつし、華美な風をしては人目を惹かうとしてゐる。夫の古代に有名であつた牧人は、好んでゼノア産の天鵞絨の衣を纏ひ、人の前に出る時には銀造りの覇の佩刀を腰に帶けた。又中世紀の勇士バウクス・ヘイワードの徒は、ロンドン街頭の華美者であつた。又伊太利の惡漢共は、立派な粉飾を施してゐるし、例の浮浪民の盜人輩迄が、衣装を氣にする。十九世紀の末葉、匈牙利に寇した食人浮浪民隊の隊長ハラム・パシヤの冠丈けでも、四千圓許りの金銀寶玉を以て飾られてゐた。虚飾輕佻の徒は知らねばならぬ。虚榮心と犯罪とが、何如に密接な關係を有するかを。西班牙の盜賊等も御多分に漏れず、粉飾を好み、平常の時は勿論、入獄中でも白リンネルの衣裳を着飾つて、輝く太陽の下に、たらしなく日向ぼっこをするか、大氣取りで大道を濶歩するのを無上の喜びとした』と。

エリス氏は盜賊連の特徴たる虚榮心に就いて、尙記して曰く。
「更に注意せねばならない事で、より廣く犯罪者間に瀰漫してゐるものは惡事に關す

る虚榮心である。ヴィドクは『普通社會では汚名を受ける事を恐れてゐるが、囚人社會では汚名を受けないのが恥辱なので、殺人犯たる事を最高の名譽としてゐる』と云つてゐるが、是は殺人犯や盜賊仲間では一般に行はれてゐる考へである。大罪を犯した者は仲間から豪傑として尊敬せられ、自分も他の者を傲然として下瞰するのである。不幸にも一寸した犯罪で入獄するなどということは、彼等の社會から見ればまことに不名譽なことで、その様な時には殊更らに己れの罪狀を詐つて、大罪を犯した者のやうに装うのである。或時十九になる露國人が一家を塵殺にしたが、それが露都で大評判になつたのを聞いた彼は得意になつて叫んだ。『それ見た事か、學校の友達が己の様な者は名高くなる氣遣は無いなんて云つたが、間違つたぢやないか』と。

モロー僧丈はラ・グラント・ロケットの牢獄に、一人の大罪人が到着した時の光景を述べてゐる。「其の大罪人が到着するや否や、勿論好奇心も手傳つてゐたには相違ないけれども、多くの囚人は彼を取圍み、彼は其中に立つて王の如く傲然として居た。遠くに立つ人々は、彼の近くに立ち得た人々を羨まし相に見やりながらも、一生

懸命に、彼の一語をも聞き漏らすまじと傾聴し、讃辭を控へ、息を凝して、其話を妨げざらん事をこれ勉めるといふ有様であつた。一方話す彼は、自分が一同の心を支配し、興奮せしめつゝある事を得意として居たのである」と。

幼年犯罪者を了解するには、是非共、營養不良の、道德的訓練なき、冒險狂の人間が、大犯罪の事を聞いては非常な崇拜心を起す、その消息を充分に知り盡して居らねばならぬ。

ジョーが始めて答を受けて、朋輩の處に歸つた時には、普通の學校友達より左程悪くは無かつた。然るに其後惡戯の嵩じた事は著しいものであつた。惡友の眼に豪い男に見られ度いと思つてるジョーは、自分の名譽を恢復し、苦しみを軽くしよう等とは少しも考へない許りか、更に進んで大膽な、危険極る仕事を企てた。それは十歳に達しない者が押入強盜に成らうと考へたのである。またその押入を實行しない以前から、既にもう不敵な惡事の數々を働いて、同輩間に大將の名を博してゐた。豫て偵察して置いた店に突入して、瞬く間に帳場に跳り上り、

錢箱の金を鷺掴みにして、奥の控室にゐる番頭が、ソレッと椅子を蹴つて立つ間も無く遁げ去る。こんな事は彼の得意な藝當であつた。また母親の名を騙つて、所々方々の店から商品を取り出し、之を半額に賣り付けて小使を作る様な悪さは、常の事であつた。或は道に待伏せして、親の使に行く子供を脅迫し、ブル／＼慄へてゐる小さい手から金やら包やらを奪ひ取る様なこともする。

こんな悪戯をして、扱て平氣で家に歸るのは一寸險呑でもあるし、又甚だ面白くない。遂には無宿者の群に加つて、木賃宿にも寝れば戸外にも臥す。彼はもう、警官に足蹴にせられたり、引つばられて行つたりしても平氣であつた。

十四歳の時遂に本もの、押入強盗になつた。

近所に貴金屬商店があつて、飾窓には、彼の心を喰はる銀の皿が輝いてゐる。それは丁度町の角に建つてゐて、庭の向うが直ぐ裏口になつてゐる。塀を越えて家に忍び入り、銀の器を盗み出すのは容易い仕事で、仲々面白そうだ。朋輩と萬事の打合せをして、成功の夢を見ながら夜の來るのを待ち構えた。

眞の暗となつた。人通は斷絶え、警官の氣配はなく、萬事が好都合。ジョーは塀を乗り越えて向側に消える。仲間はず外で掠奪物を受取るべく待つてゐる。強盗に生れて來たかのやうに、ジョーは易々と窓を押し開け、音も立てずに硝子棒を上げて、裏口へ忍び込み、暗闇の中を巧みに店の方に忍び行き、銀の器にと手を掛けた。耳を聳てて邊に音無きを確かめ、奪ふや否や窓を抜け出して庭を横ざり、塀に這ひ上つた。夜は正に三更で沈靜としてゐる。下には仲間が待つてゐる様だ。その眞中に滑り降りるや、何ぞ圖らん、仲間と思つたのは四人の巡查であつた。彼はそのまま捕縛せられたのである。未だ十四歳に満たない少年であつたが、遂々一年三ヶ月の懲役に處せられた。

笞打たれる位は何とも思はなかつた流石の腕白小僧も、一年三ヶ月間懲役に處せられて、牢屋の粗食を食ひ、寂寥の日々を送り、苦役に追はれるには大いに困つた。別に自分を恐ろしいとも、地獄が懼いとも思はぬが、又善人にならう等と望んだわけでもないが、兎に角、もうこれ限り仲間を離れて、遣り方を改め、決して再び巡查の

御世話になんごはなるまいと決心した。非常に後悔して、檻房の中で獨り泣いたが、其原因は何も外ではない。たゞ牢屋が實に不便で、食物が逆も悪く、其上自由を全く奪はれてゐる恐ろしさに泣いたのである。誰れでも、半休暇日の午後何かの罰で、三時間も拘留に處せられたことのある子供ならば、此の頑丈で元氣な十四歳の少年が、十五ヶ月間禁錮せられた苦しみを、少しは察するであらう。

處で、愈出獄となると、たゞ怨恨憤怒の心で胸が一ぱいになり、自らを改良しやうの、善い正直な役に立つ人間にならうのなどと云ふ考へは毛頭起らない。却つて法律を惡み、社會を敵とする情が極度に増長し、飽まで社會に反抗して、その裏を掻いてやらうと企てた。

釋放後三ヶ月も経たない中にまた捕へられて、こんごは感化院に送られた。しかしそんな處に入れられて改まればこそ、出て來て直ぐに、引續いて九回も種々の竊盜を働いて、各一ヶ月の處刑を受けたのである。

茲に於て彼は矯正不可能、常習犯人との名を警察の帳簿に記し付けらるゝに至つ

た。世間の人は後指をさし、警官は常に注目して、時には彼の後を從けた。

今はもう眞の押入強盜になりすまし、名にし負ふ強盜の仲間に加つた。ある時役は出入の居酒屋で、一人の洗濯屋の話を聞いた。それは其の洗濯屋は、金錢を外套の内衣囊に入れたまゝ、每晚寢室の戸の掛釘に引つけて寢むこと。時とする百五十圓から二百圓位も入つてゐると云うことであつた。

ジョーは得たり賢しと、其家の様子を覗つて、凡ての計畫を立て、或夜其寢室の戸の釘にかゝつてゐる外套の衣囊を探つてやれと思つて出掛けて行つた。このことは向う見ずの強盜というものが、如何に恐るべきものであるかということをよく物語つて居る。彼は普通よりも丈が高い方で、瘦形ではあるが、肩幅廣く、暗い大きな顔をしてゐる。前額は低く、頭は圓く、眼は大きく、しかもそれはいかにも陰險らしく輝いて居る。その上音聲は強く鋭く、何處か獸性を帯びてゐる。

彼は自ら其夜の事を物語つた。

「私は其夜、ある居酒屋をこつそり抜け出し、暗い街を通り、尾行して來た警官を

まんまと撒いてしまひ、秘かに洗濯屋に近いた。猫でもなければ越せないやうな塀があつたが、それをうまく乗り越えて、庭に忍び込み、其處に伏して暫く邊の氣勢を窺つた。音一つしない。家の後に來て見ると窓が閉つてゐる。左程音もたてないでうまくこぢ開け、窓を跨いで五六分耳を澄ました。大丈夫、静かに内に入り込んだと思つたは愚か、大失策、ドブーンと水槽の中に落ち込んでひっくり反つた。えらい物音に家の人達は目を覺して仕舞う。

『下に誰か居ますよ』

と細君は大聲で叫ぶ。

『何だ馬鹿な、猫だよ』

と主人の聲。細君は確かに誰か人だと言ひ張る。主人はよせよと打消す。私は浴室に立ちすくんでたつぶり一時間は待つてゐたが、静まつた様子だから又徐々動き出して手探りに進み、玄關に來た。階段を少し登つて耳を立てると、時計がカチ／＼やつてゐる許りで、静肅してゐる。暫く待つてから偷み足に登つて行つた。中段迄上る

と、夫婦の寢息が、丁度豚のねてゐるやうに高く聞える。實にそれは恐ろしい音で、私はあんな寢息を聞いたことがない。實際豚そつくりであつた。愈戸に體をすり寄せて耳を聳てた。彼の外套と自分を隔つるものとは八分の板一枚だ。一時間も待つた後、把手に手を掛けて静かに戸を開けた。寢息は一倍と高く聞える。室は暗黒、氣取られては居ない。二三分して右の手を伸べて外套に觸つた。例の財布は既に掌中に在る。引き出して自分の衣囊に押し込み、元の如く戸を閉めて暫く立ち止り、そうつと下に降りた。此度は巧みに水槽をよけ、窓を抜けて無事に逃げて來た。

財布の中には二百十圓あつた。私は急に金持ちになつたわけである。で服を新調し、残は仲間の者に預けて置いて、騒ぎが鎮まる迄は、酒と煙草の代丈けを自分の身につけてゐた。處が、四日目に警官がやつて來て、『オイ、ジョー、貴様其の服を何處から取つて來たのだ』と訊ねる。『是ですか、是は從弟が呉れたんですよ』と誤魔化した。が何の役にもたゝない。そのまゝ捕へられて又入獄した。

監獄から出て來て二三日した頃、貴金屬商店の前に立つてゐると、突然巡査に腕を

捕へられ、警察に連れて行かれた。検査を受けると衣囊の中には家破りの七つ道具がある。勿論そのまゝまた入獄した。

彼が牢獄生活中何よりも苦しんだのは、胃腑が満されない苦痛に泣いたことで、ただに其事が、不明瞭な潜在意識として浮んで来る程である。日曜日が来る毎に、世に棄られて、寂しい牢屋に飢ゑたお腹を抱へては、宅で兄弟達が一家團欒の御馳走に與つてゐる事を羨んだ。兄弟達は自由なばかりか、御馳走に有りついてゐる。牢屋の中までも、その肉汁や、焼馬鈴薯の香がする。眞白いパンの味、新しい今火から上げたばかりのヂウ／＼やつてゐる燻肉の甘さうな芳香。もう堪らない。心が狂ふよりも先づ涙が先に流れる。そんな時にはせき来る涙を嚙下でシク／＼泣きながら、牢屋になんか入れられて、ごんなに損をしてるかを思ふた。牢獄は實に涙の家である。然し舍獄に流さるゝ涙は様々だ。日曜日の御馳走欲しさに泣く涙は、宗教的悔悟の心に泣く涙の如く、天の使の眼には止らないであらうが、涙としては別に異りはない。ジョーが燻牛肉や揚馬鈴薯欲しさに泣いたのは、昔を思出したのである。ベルレーンは佛

國の牢屋にあつて泣いた消息を、巧みた言詞を以て表してゐる。

雲を覆う蒼空よ、
碧き哉 あゝ静かー
棟の上に聳ゆる老樹
揺ぐ その葉。

天に見ゆる寺の鐘よ、
涼しき哉 そのひびき。
梢を互る小さき鳥よ、
美はしき哉 その歌。

神よ我神 彼處にこそ生命あれ、
純にして、静かなる生命。
夫の平和の音よ、
町よりぞ来る。

涙に暮るゝ哀れなる我よ、
 汝は彼處にて何を爲せし。
 汝の若き日をそも汝は、
 彼處に汝は何をか爲せし。

込み上ぐる涙は止めもあえず、家に在る兄弟達の事を思つて、此のロンドンの盗人は、パリの詩人の如く、若き日の徒らに過ぎ行くのを、心から悲しんでゐたのである。果ては悔恨の情遣瀧なく、自ら祈りをするやうになつた。元より日曜日の御馳走の事に刺戟せられたにもよるが、兎も角苦痛に堪へないで、いつも死ぬることばかり祈つて居た。用も無い此の世を去り度い。此の世の事は一切、あの自分を監視してゐる警察官の支配してゐる處だ。入獄して色々の悔恨の情に責まれたが、とに角彼は早く死にたいと祈つた。

此間にあつて、教誨師は一度も彼を訪ねてやらなかつた。著者が逢つて話した囚人達の言う處を聞いても、教誨師は囚人を訪ねない様である。従つて彼の道徳心を鼓舞

することもない。また彼が沈むか浮くかの問題に就て苦しんで居るのに對して、同情を表はすこともない。老練家ブース大將の如きは、無頼の徒を濟度するの第一歩は、其の人に同情する者のある事を知らしむるにあると云つてゐるが、教誨師には少しもそんな考へは無いらしい。ジョーが教會の禮拜に就て意見を求められた時に、教會に集るのは、會談の機會を得る爲である。祈禱の言葉は寢言よろしくで、讚美歌は美しく、人の受けも可いが、説教はてんで解らないと云つて居た。囚人が放免せられる時に、免囚と教誨師との形式的會見があるが、教誨師の別れの言葉はいつも御定りで、「ハツハツ、一、二ヶ月もしたら再た歸つて來るだらうね」

と云ふのである。是は何の免囚に對しても同様であると云ふことだ。ある時此の言葉に送られたジョーは、振り返りざま、

「勿論ですよ、而して己が一生涯牢に入つて居ても、貴官の失策では無いでせうよ」と答へた。彼は教誨師と言はるゝ程の者は、彼を助け得る人であるのかと思つてゐたが、その實際を知つては只驚くの外なかつたのである。

さて次に少しく警官に就て述べ度いのであるが、其前に一寸注意して置きたい事がある。それは今から述べる處のジョーや、また其他數人の人々の経験した事が、直にロンドンの警官全般の風を表はすものではないという事である。多くの警官の中には随分古い囚人を助けて、種々親切を盡す人も少なくない。然し、誰れでも一度その近所の二三警官の悪感を買ふたが最後、其人は不斷迫害を受け、最も殘忍なる取扱を受くるに至るのである。恰も騎兵隊の調馬伍長が、新補充の馬に對するが如く、警官は監視の權を濫用して、遂に其の人の生涯を地獄に迄も蹴落すのである。彼等の用語を借りて云へば、其人を破壊してしまふのである。元より警官の方にも、此の種の行爲を敢てするには相當の理屈はある。彼等はあらゆる卑劣な暴行の標的となりながらも、其の職を行う勇敢な人達である。乍然其暴行に對して復讐する事が、國家に取つては一大危険を孕み、又經費が徒に重む結果となるのは明かな事である。そして此個人的の復讐が、今も猶行はれてゐるのは甚だ遺憾なことである。それが爲に犯罪階級の人々は益々悪くなるのである。而も上官は此事實を知らないやうだ。而して

之を行ふ警官自身は、己れが行爲は正當であると考へ、又暴徒に暴行を以て報ゆるのは、彼等に對して相當なる復讐をする詐りでなく、國法及社會の秩序を保全する道であると思つてゐる。然し繰返して云うが、私は敢てロンドン警官全體に對してこの攻撃を浴せる考へでは毛頭無い。

愈々放免になつた其日、ジョーは獄中で働いて貯た金を懐にして家に歸り、父親に、一緒に行つて飲もうと勧めたが、聽かれなかつた。そこで自分一人で居酒屋に行つて一杯やり、これから仲好くやつて行く印に迄この心算で、母へはじん酒を一本、父へは葉巻を數本買ひ求めて家に歸つた。それから半時間許りして散歩に出かけ、自由の空氣を楽しんでゐた。

處に一人の警官が通りかゝつて彼を呼び止めた。「ジョー、老紳士が懐中時計を掏摸れたがネ、その云ふ人相がお前らしいよ。署長はお前が立派に言開きが出来るかどうか、兎も角一寸署まで来て、お前の行動をすつかり申し述べよと云ふことだ。」

と親切らしく云う。

「御戯談でせう、今出獄たばかりですよ。」

「其は解つてるサ、が人相が貴様だ。」

ジョーは衷心潔白だから、平気で快活に巡査と同行して、途すがら、再かど彼を見返る人々の心を笑つてゐた。然るに愈警察署に入るや否や、警官は突如態度を一變して、彼の腕を鷲掴みにし、署長の前に突き出して云つた。

「此男を泥酔乞食犯として檢舉して來ました。」

遂に檻房に押込められてゐると、二三人の警官が入つて來た。嘗てジョーは警官に暴行を加へ、その復讐を此檻房の中で受けたのだが、今は罪は無いではないか。然るに此の警官達は、鐵拳を揮ひ足蹴にして、彼を傷け、殆んど人事不省に陥るまで責め立てた。

私は、何故その時撃り返すか、署長に會ふ事を求めるかしなかつたのだと訊ねた。すると彼は傍に居た同類と口を揃へて、

「そんなことをしても無益ですよ」

と答へて、私の子供らしい間に微笑むのであつた。彼等は又どんなに警官の所謂正當行為の犠牲となつたか。又屢々三四人の警官が留置場の戸を押し開けて這入つて來て、彼等を如何に撃ち据ゑたかを物語つた。そしてその深夜の恐ろしさといつたら、どんな監獄よりも以上で、たゞいくらか寂しさが少ない丈である事、苦情を云つても全く無益なること、これを正當でないと感じ、全身の血を沸き立たせながらも、刑罰には只盲従しなければならぬ事等、話はそれからそれへと盡きなかつた。實際是等のことは、彼等悪徒の警察に對する惡感を助長せしめて居る。此の世の中に、老囚人の法律保護及秩序保全の職にある者に對する反感程、烈しく恐ろしいものは無い。

ジョーが此の不法なる捕縛によつて牢獄に投せられ、其處から出て來た時には、只一念世を咀ひ、人を殺害してやれといふ考が、彼の頭に喰入つてゐた。たま／＼彼が街を通つて居ると、夫の自分を無法にも引立てた巡査に出會した。巡査は笑つて、「オー、ジョー、俺にはかなはないだらう、エ、確りせい。また其内に捕まへてや

るさ。」

「よろしい、が無法には無からうネ、畜生ッ……」
 と言ひ残してジョーは通り過た。

やがて日の暮るゝのを待つて、庭先に鐵柵のある街りに行き、膝頭で一撃を加へると鐵柵は中途から折れた。挺子を鬼の如き兩手に握つてエイと曳けば、易々と横棒が脱づれたから、此れを股引の中に隠して、先の警官に會ふ爲に立ち去つた。

何も知らぬ警官は向からやつて來た。ジョーは、つとそこの戸口に身を潜める。丁度前に來た。咄嗟に、鐵棒は過ぎ行く警官の頭上に打ち付けられた。帽は碎け、頭蓋骨は卵子の殻の如く滅茶々に潰裂され、ジョーの仇敵は敷石道の上に斃れた。

勿論その場で捕まつて、ジョーはダートムーアの牢獄に長く繋がるゝ身となつた。

彼は私に告げて云うた。「其の時の密室監禁程苦しい目に逢つた事は無い。とても言葉に云ひ表はせない。笞打も苦しいが、密室監禁とは比較にならない。食事と云へば一片のパンと一杯の水ばかりで、體は弱り切る。息も絶々の體で、常に孤獨、無言

の中に置かれ、半暗の中で精神上の苦痛を忍ばなければならぬ。一日だつて堪へられたものでない。それが幾日も續くのである。地球上の最も恐ろしい野獸でも、遂には悲しい聲を絞つて助を求めらるであらう」と。

密室監禁で何をして過すのかと訊いた時の彼の答は、私の終生忘るゝ能はざるものであつた。彼は無言のまま、椅子の端の方に腰をのり出して、右膝の上に頬杖をつき、何處を見るときもなく茫然と眺めてゐた。

傍の同類は、ジョーの姿勢を見て點頭づき、

「常時、あの通りでサア。だが時には此様してることもある」

と云ひ乍ら、自分の體を前方に屈めて、兩肘を各膝の上につき、掌で頭を抱へて、床を凝視めて見せた。

ジョーはやがて口を開いて、

「終日あの通りで、パンと水で生き、光はない、風もない、聲もない、足音一つするではない。ほんとうにあの通り何にもないのだ。あんな孤獨を忍ぶよりは絞殺され

た方が優でサア、」と言うのであつた。

ジョーの話によつて、彼の性質は決して、親切や同情に反應が無かつたものでないことがよく解る。彼の脳は正確で、觀察や思考の力を充分に有して居る。その證據には彼は今其生涯を捧げて、犯罪階級の人々を救ひつゝある。彼は入獄毎に心を頑固にせられた事を確言し、何人とも雖も充分監獄のことを研究し、罪囚に就て相當の知識を得たる者は、禁錮の効力が、單に囚人の心を益兇暴にし、より悪くし、恐ろしく殘忍にして、不經濟なる結果を齎すに過ぎない事を知るであらうと言て居る。

彼の云ふ處には權威がある。如何となれば、彼は未だ三十四歳になつたばかりであるのに頭髮は既に白く、年よりも遙かに老けて見える。これは其の三十四年の生涯中十七年間、牢獄に暮して備に其味を嘗めたからである。

此場合適當だと思ふから、トマス・ホルムスが英國監獄制度に關して云うた處を引いて見よう。「是は實に犯罪を防止せんとする人間の計畫中、最も馬馬な、殘酷な、下等なるものである。言語同斷の愚策である。夜になつて暗い牢屋に座つてゐる囚人達

のことを思ひ、彼等が午後八時には既に就床を強らる事を知る時に、誰れか同情の涙を流さぬ者があらうか。是が若し只罰すればよいと云うのならば、現行の制度は立派なもので、全く惡魔的に徹底して居る。然し國家が、何かの法律を犯したるの故を以て罪人を捕へるのは、之を一日も速かに世の中に送り歸して、將來國の爲に正直忠實に働かしめんと欲するが故ではなからうか。しかるに監獄は何を成して居るか。たゞ人を十字架につけ、もう全く救ひ難い迄に兇惡にしてしまふばかりである。従つて囚人の社會に對する反抗心は愈加はり、その混亂せる良心の闇は、一層深まるだけだ。諸君は次の如き一囚人の言を聞いたことがあるか。それは覺えて置く價値があらう。

「見える限り、床の釘や繼目の數も覺えた。汚點の個所、板の裂目、引掻かれた痕、凹凸せる板の表面、それらの悉くを知つてゐる。床は御なじみの地圖、單調な地圖である。自分は日毎に其の奇態な地圖を學び、夜毎の惡夢に之を見るのだ。白い壁の樂書も、向ふに座つてゐる人々の絶望的な顔にある痣も黒子も見飽き果た。我が心は、磨くに物なき磨白の如した。何か仕事を與へて呉れ。心と頭に仕事を與へて呉れ。あ

「心は望の光を皆失ひそうだ、頭は理性を悉く失つてしまひそうだ。」
己が部屋を自由に歩み得る諸君、試みに一兩夜でも此言葉の意味を慮つて見られよ。又明け行く朝、打開かれた窓を漏れる新らしき曙光に浴する時、願くば彼等囚人共に思を馳せて見給へ。想へ、數千の人々は如斯に幽閉せられて、其心は、磨く物なき磨臼の如であること。而も之れ、今日基督教の世の中に、現存する事實ではないか。決して感情的な繰言ではない。ヒステリーの種類ではない。記憶せよ、犯罪者も亦人間であることを。然り、種々の極めて複雑混亂せる場合に於ても、彼等は矢張り我等と等しき人間である。

サー・アリヴァー・ロッチは、矢張此の問題に就て興味を有し、之を研究した人であるが、問うて云はく、「我等は今日の犯罪者取扱法を以て満足し得るか。我等は文明國民として、常習犯人の階級を永久に養成し、而して之を野蠻人に適する類の監禁の下に置くことを以て、満足が出来るか。しかも彼等を驅つて、管打ち、閉ぢ込めたからとて、遂に之を亡き者にし擧ることが出来るであらうか」と。

ダートムーアに於けるジョーは、聊か獄中の無聊を慰め得る方法を發見した。聞く所によれば牢獄の中では、外よりも尙多くの盗みが行はれてゐる。誰も彼も、何か掏つてやらうと鶴の目鷹の目である。その一生懸命で盗む機会を狙つてゐる丈でも、單調を破るに足りる。丁度魚釣りが、一度も食ひ付かれないでも楽しんで一日を送る様なものである。然し囚人のそれは、捕獲物の無い事は滅多に無い。臺所でも、賣店でも、牢屋の中ですらも盗みが出来た。又大抵の看守と密賣買をやる。看守等は好意からのもあるが、また儲けの爲に、食物や烟草を窃かに持ち込むのである。此の様な事で無聊を慰めるのである。

ジョーは或日廊下で働いてゐると、ハンケチが一つ、檻房の中に落ちてゐるのを見付けた。これ幸ひとそれを失敬した。處が暫くするとそれが用に立つたのである。囚人の一團と共に沼地を掘つて居た時に、二疋の鼠が、大まごつきで遁げ場を探してゐるのを發見した。ジョーは他人一倍速い手を差伸べて、突如二疋を引つ捕へ、先のハンケチに包み、脊中のシャツの下に押込んだ。そして何喰はぬ顔で、自分の檻房に掘出

物を持ち込んだのである。

此の常習犯人は、十六ヶ月と云ふものを、二疋の鼠に慰められた。寂しい檻房の中で彼等を馴し、藝を教へ、仲好しになるのが楽しみであつた。鼠等の爲には、臺所から食物を盗んでもやる。自分の食屑を集めてもやる、又壁に掛つてゐる袋を寢床にしてもやつた。すると不思議に子も出来て、勢ひジョーは臺所での盗みも多くなつた。が幸ひ事なく済んで、愈出獄の日には、鼠の一家族も共に持出され、ジョーの父へのお土産となつた。

囚人の中には、椋鳥だの、鳥だの、雀だのを飼ふ者がある。

今一つジョーが無聊を慰めた手段は、次の檻房に居る者と電話を交換したことであつた。間の壁の煉瓦を一枚抜いて、容易く填る様にして置き、向うの人と互に囁くのだ。彼等の語る處は大抵想像が付く。あの看守は残忍だ、この看守は深切だ、今一人のはよく怒るとか、甲の囚人が何を盗んだの、乙が看守に抵抗したの、君は出獄てから如何する心算だのと云ふ、牢屋獨特の雑談である。

出獄したジョーは更に兇暴になつては居たが、心底には少しく、牢屋生活を厭ふ心が起つてゐた。丁度其處に、彼を待つてゐる人があつた。それは例の「拳闘家」である。「拳闘家」は、近所近邊の恐物である此の男に目をつけて、改心させてやらうと決心した。彼はまた、酒に酔つばらつて、合宿所を渡り歩いて居た頃に、ジョーとお近付きになつた事がある。

二人は共に其の道にかけては豪の者同士であつた。「拳闘家」は豪い拳闘士であり、ジョーは、豪い押入強盗である。そこで「拳闘家」は同等の友として彼を取扱つた。二人は共に飲み、悪事を共謀し、時には共犯も行つた。が二人の間は何故かしつくり合はない。ジョーは「拳闘家」を拳闘士としてこそ貴め、泥棒としては見下げてゐた。ジョーは夫の有名なミルソンやファウラーの徒と共謀する程の豪い押入であつて、彼等もジョーを侮らず、其勇氣には畏敬した位であつた。ミルソンとファウラーが人殺で世を騒がせた時には、ジョーは幸一ヶ年の懲役に服役中であつたが爲に、共犯を免れたのであつた。ジョーの同輩の中には、自分の妻を殺して、目下終身懲役にあるデ

イツク・クームスと云う男も居る。また小説にでも有りそうな名のブライトン・スラツシャーも其の一人である。彼は名高い盗人で、今は七年の禁錮の身であるが、其七年も三度目で、他に短期間の入獄は數知れぬといふ強の者だ。

以上の如くジョーは一流の盜賊で、其道の猛者達からも信用せられ、尊敬せられてゐたのだから、「拳闘家」も以前合宿所で交際した時には、ジョーを威壓する様なことはしなかつた。却つてジョーの方から酔つばらつて、馬鹿な亂暴を働く「拳闘家」を、稍後目に掛けてゐた位であつた。

「拳闘家」は、多くの他人を救つたけれども、此ジョーを救ひ出そうと思つた時程熱心になつた事はなかつた。ジョーが其邊の暴漢共に、奈何程尊敬せられてゐるかはよく分つてゐる。近隣中一等の危険人物として目されてゐるのも明である。で、若し此恐ろしい親玉が、救に引入られ、一朝にして、悪心を振ひ落し、潔く、眞直ぐな、義しい生活を送るに至るならば、其結果はどうであらうか。又ごんなに大きな榮が神の前に捧げられることであらうか。茲に於て「拳闘家」はジョーの出獄を待ち受

け、速ぐに訪ねて之と談つた。ジョーは靜かに「拳闘家」の言う處を聽いて居たが、よく考へて見るからと約束して立ち別れた。

「拳闘家」は、其時、悪い事を爲れば、不愉快で、善い事を爲れば快いことを話し、牢獄の生活と自由の生活と何れが面白いが、合宿所と家庭とどちらがよいか、犯罪と愛とでは如何であるかを、訊ね且つ説いて、「己も君の様だつたが、今の己を見て呉れ」と云つたのである。

元よりジョーは兩人の間に大きな差異のあるのを認めた。乍然ジョーは、犯罪の網の中に陥つてゐる。仲間を彼を放さない。到底遁れられない。そんな理で相も變らず此の恐ろしい界限の合宿所で放浪生活を續けて居た。

ジョーが出入する合宿所に泊るには一夜二十錢である。それで一室六臺ある寢臺の中の一つが與へられる。消燈が十二時半、そして翌朝九時迄に行かなければならないのだ。若し今夜泊るだけの銅錢があれば、一日臺所に居ても可い。臺所は街道の手摺越しに見えてゐる。戸はすつかり蹴破られ、窓も完なのは無い。室内の燈りと

言へば、焚火ばかりである。爐邊に汚れたフライ鍋が一つかゝつてゐる。客は自ら食物を買つて来て、それで料理する。してしまへば、汚れたまゝ元の處に掛けて置いて凭掛の取れたベンチか、塵にまみれた卓子の上で食事する。邊りはロンドンの最も下等な人間で一ぱいだ。是即ち共同の台處である。警官が、よく踏込んで、目指す犯罪人を捕へるのはこゝである。

ジョーは自分の周囲を見廻して、今更の如く苦痛を覺えた。そして「拳闘家」の言つた事は尤である。けれども自分には到底不可能い。仲間から脱れる途はどうしてもないと考へた。

しかし「拳闘家」は飽迄もジョーを見逃さない。或夕自分の家に彼を伴つて来た。

「あの夜の事は一生忘れられぬ」と、ジョーは今でも感慨無量の有様で云うて居る。

私は「拳闘家」の導きによつてジョーがその場で改心し、神の前に祈り、光明が彼の前途に輝いたのかと豫期たら、左様では無かつた。此の追ひ立てられるが如き、不安に満された、自暴自棄の常習犯人が、忘れられない印象を與へられたのは、「拳闘

家」の家庭の光明に輝き、幸福の氣に満ちたる光景であつたのだ。ジョーは塞いだ眼を開けて云うのである。

「あそこに己を伴れて行つてくれた。あの時己は、まだ牢から出た許りの悪黨中の悪黨であつたのに。イヤあの晩の事どうしてもは忘れられぬ。

然し「拳闘家」が、彼を導いて、神の下に連れ來り本當の眞人間にしない中に、ジョーは再び牢獄の人となつた。而し此度こそは、彼は殆んど毎晩の如く神に祈り、しかもそれはもう前の様に死を願ふのではなかつた。

ジョーの心に新しい考が浮んで來た。何でも誰か善い女を娶つたならば、必ず眞直な生涯が送れるであらうと思つたのである。警官も恐れる此の男の頭が、全くその事一杯になり、毎晩毎晩牢屋の間に跪いて、妻を與へられん事を神に祈つた。人が跪いて、神の前に心から捧げる祈願の中には奇態なものも多いが、此の牢屋の中で人らしく叫んだジョーの祈こそは、最も奇態に感ぜられるかもしれない。彼は自分の救主は善い婦人の外に無いと定めて、その「何處かに居る筈の妻」を懇請したのである。

ジョーが苦役に服しながら、祈りの日々を送つた牢屋を出て来ると、忠實な「拳闘家」は前の通り彼を待つてゐた。そして、此度は眞直ぐに、救世軍の會館に来るやうにと奨めたが、ジョーは頭を振て、己の好む處に行つてしまつた。若し神眞に在さば、必ず牢屋に於ける彼の祈に應へて、彼を救うて呉れる婦人を送つて下さるだらう。其後二三日経つた頃、ある居酒屋で口論が始まつた。口論は遂に格闘となつた。其の一人はジョーである。ジョーは敵手を半殺しにしたが、自分も恐ろしく傷けられた。頭は半分裂けて、頬は切られ、顔は見分けの付かぬ程傷つけられてゐる。闘が終るや、直ぐに藥屋にかけ付けて頭を繃帯し、傷口も手當をして貰つたが、そうして貰つて居る間、ジョーは自分が全然望みの絶え果た人間で、犯罪の網が何處迄も廣がつて居て、己は丁度それに引掛つた小鳥の様な者である事を熱々と感じた。かくて繃帯が出来ると、眞一文字に救世軍の會館に行つたのである。

始めは誰も彼の來て居るのに氣が付かなかつた。ジョーは其處に腰を下し、眼は血にまみれて黒すみ、唇は脹れ上り、頭は繃帯で包まれてゐながら、熱心に説教を聽

いて居た。處へ一人の救世軍人が、彼を認めて側に來て曰つた。

「君、今迄の生涯はもう厭だらう。」

「エ、もう厭だ。」

「今から新しい生涯を始めては、如何うですか。」

「始め度い。」

例の如く前に出るやうに勧められて、ジョーは、ツと悔改の座に進出た。彼が跪くと二三の救世軍人も彼の側に來て助言を與へ、その魂の爲めに祈つて呉れた。やがてジョーは救はれたと言つて立上つた。

奈何なる變化が起つたか、それは誰にも解らない。ジョー自身にも説明は出来ぬ。只彼は座つて祈つたのである。そして立ち上がった時には、深い生涯を送る爲めに、奮闘することが出来るとの確信を與へられてゐた。罪の網から全く遁げ延たと感じたのである。

潜在意識作用とでも言ひ得ようか。又は「拳闘家」から暗示を受けて、彼の心が無

意識の中に働いたとでも謂ひ得ようか。左様説く事が出来るかも知れないが、然し今格闘した許りの人間が、直ぐに祈つたのは如何なる故であらうか。毆打せられて震戦く頭が、如何して祈る考を起したらうか。そして平和を得るに至つたとは、甚だ説明に苦むのである。否更に説き明し難いのは、彼の完き回心——常習犯人と言はれた彼が、即時に、確實に悔改めたという事實である。あれ程の盗み心が全く消去り、其の後の生涯に見ても明かである様に、以前の仲間の誘惑を敢然として斥け、悪黨の群る町を、彼等に嘲らるゝ救世軍の旗幟の下に進軍し得るに至つた事は、眞に驚嘆するの外はない。

「拳闘家」も、「常習犯人」が完く救はれたとは信じ得なかつた。彼は天使中校に向つて氣遣はし相に、

「ジョーの事はまだ安心が出来ない。も一度ハッキリ救はれなければ駄目だと思ふ、」と云つた。ジョーは生れて以來一日だつて働いた事が無い。それが毎日僅かの給料の爲に、コツ／＼働く氣になるであらうか。おまけに改心しても、餘り燃えて居ない

ではないか。

然るに一方ジョーは、彼の祈りの聽かれん事を待ち望んでゐたのである。

救世軍の人々は、洗濯屋に奉公口を探してやつた。始めは食事の外無給金であつたが、それでもよく働いて、少しも心配をかける様なことはなかつた。近所隣の人々は、此の押入強盗のミルソンやファウラーの同僚たる男が、こんなつまらない労働を眞面目にしてゐるのを見て驚いた。

ある日のこと、ジョーが荷車にペンキを塗つてゐたが、不圖顔を擧げると、其處に一人の娘が立つてゐる。アツ祈りが聽かれた。之が祈りに祈つた自分の妻になる女だと信じてしまつた。

昔の悪い經歷を思つて、心は退け乍らも、勇を鼓して、其女に親密になつた。最早、互に友達となつての或日、種々面白く語り、幸福な家庭などの事をも論じた末、ジョーは其女に云つた。

「お前さん、己のやうな人間にでも嫁入りが出来ますか？」

「解らないわ、何故？」

「何故つてね、己が牢に居た時分、神様に妻を與へてくださる様願つたのだよ。そしてお前がその女だと思へてならないんだよ。」

女が返事をする前に、突然彼の心中に、昔の罪の生活が思ひ浮ばれて来た。其處に立つ、堅氣の罪の無い、優しい娘と比べるならば、あゝ自分には價値が無い。彼は女に何もかも打開けて、さて妻に欲しいは山々であるが、自分がこんな男だから、所詮も嫁て貰へると思へない。もうこんなことを考へるのは止めて、このまゝで居ようど、包む處なく正直に云つた。然るに、

「劍呑は劍呑ね、けれど斯うしたら奈何、お前さんが救世軍に入つて、ちやんと兵士になれば、私嫁きますわ、」

この意外な答へであつた。

此の時こそジョーが回心の瞬間では無かつたらうか。

實に此の時、彼は突如として、極み無く高められたことを感じたのである。彼の哀

れにも亂れたる魂は、限なく光に照された。誠にそれは祈の應驗であつた。そこで自分の如き者をも注意し給ふ神様は、確に恩恵を以て自分を守つて下さるお方であるとの強い確信を與へられたのである。

「其時の嬉しさ！ 今の幸福！」

とジョーは今でも叫んで居る。

此の男の戀物語の中、救世軍が關係した部分は、見る人によつて面白くも、又驚嘆すべき事とも感ぜられやう。其の時娘は保證を欲したが、ロンドン中只救世軍の外、頼るべきものは無かつた。そこでジョーが救世軍人になりさへすれば妻になると云うたのである。押切ることの能きない此の世の大海に浚はれた憐れむべき人々にも、一つの陰れ家がある。それは救世軍だ。

此の常習犯人であつたジョーは、今では眞人間になつて、かつては近邊の人々を悪魔の如く恐れしめてゐた其の町で、一人前に、堅氣な、正直な、我慾の無い生活を送つてゐる。妻を愛する事は一通でなく、また子供を可愛がることゝ云つたら、近所の

人々が笑ひながら話す程である。

私の考へでは、此男の回心の背景には、我々がむしろ粗略に謂ひ勝ちな體面を保ち度いと云う心が強く働いてゐるらしい。ジョーは人としての體面を保ち度いと思つた。相當の家庭を持ち、牢獄と警官の辱めから免れて、日曜日には日曜日らしく御馳走を食ひ、又心を汚さないやうにありたいと願つたのである。然し何れにせよそれは、前よりもより善い、正しい、高められた、幸福な人間となり、又高貴な人格に達し度いと云う欲望に外ならないのである。

體面と云うも、畢竟、改善を欲する心の別名である。果然ジョーの回心は、只體面を保つと云うに止らなかつた。家庭を持つて以來三年の生涯は極めて多幸であつた。彼は營々として生計の爲に働いてゐる。それでも收支相償う事は仲々で、行末を思ひ煩らう事もあるが、而も幸に體面を保つて、家の面倒もよく見ながら、其心は「拳闘家」と共に、人の魂を救はんどの熱情に驅られてゐる。彼は極めて單純率直な心を持ち、無報酬で以て、極惡非道な無用者を救はんが爲に力の限りを盡してゐる。そ

して、以前の仲間の極惡な連中を捕へては、立派な男らしい熱情を以て、大膽に神の愛を説いて止まないものである。

若し體面を保ちたい心が動機となつて、此の「常習犯人」の中に斯くの如き美はし

いが果實が熟したとしても、其れは又同時に宗教の果實なのである。

警官虐待者

ダンニイは十四歳の時、よく考へた末、楽しい我家を後にして、ロンドンの街頭に飛び出した。彼は幼にして既に、犯罪者の特徴たる、學校嫌ひの性質を表はしてゐた。しかるに今や少年時代の元氣旺盛其の儘を、街上に投出したのだ。其れにはよく思案もしたのだが、家よりは街の方が好だ。街で遊び度い。如何なる力も到底此の少年を捕えて、普通の社會人に育て上げることは出来なかつたのである。茲に性來の惡黨で犯罪者たる彼が、決して肉慾の奴隷とならなかつたのは面白いことである。又貰を全々喫はない。見るのも嫌だといふ。従つて一度もやつたことがない。彼は又酒を一滴も口にした事がない。尤も居酒屋は商賣上の必要から出入して、そこを一味徒黨の寄合場、犯罪の策源地としては居たが、酒精は少も欲しくない。其他の肉の誘惑に對しても同様に無感覺であつたらしい。只幼少の時から、彼の頭を占領してゐる一つの強烈い慾があつて、他の事を考へる

餘暇は無かつた。それは犯罪をやりたいといふ欲望で、而も其の犯罪たるや、大規模なものでも、剛膽な押入強盜に類するものでもない。又細心の計畫を要する詐偽や恐ろしい殺人でもない。實に下劣で、野蠻な、獸類の様な、卑怯な、忌はしい犯罪である。此處で讀者諸君は、兇漢と無賴漢との中間にぶらついてゐる化物に親炙きになる。此奴は大罪人連からは侮蔑せられ、無賴の徒からと恐れられる、一個の下種な狼籍者である。

彼が私の前に座つて、昔の犯罪を物語る様は、私を身震ひさせる程である。此の男程、私が時々嫌になつて、もう逢ひ度く無いと感じた人間は復と無い。彼の丈は低く、肩は廣く聳え、太い短い頭はぶくぶくにふくれ、頭髮は黒く、額の上にバラ／＼落ちかゝつてゐる。其重苦しい顔は生ばん色で、青い眼には人らしい知覺も見えぬ。血でも喰ひそうな口は開けたまゝで、之も合はない齒をすかして見せ、いかにも倦怠そうな、それで居て一寸皮肉で、無頓着な相を現はしてゐる。話し方と云つたら多分舌が口不相應に大きいためか、ベタ／＼、グヅ／＼、ぬたくる様である。偶々笑

ふが、其音は薄つべらで、無氣力で、恰も葉鐵のやうだ。私は何かしら恐ろしい印象を受けたのである。

しかしながら彼の心には、何かしら人の興味を強く惹くものがある。そして彼の中には、非常に暗示に富んだ魂のあることを感ぜしめる。彼は又吾々に、罪惡に關する新概念を與へる。即ち罪をして新たな形を採らしめる。それで誰れでも彼に就いては好奇心を唆られ、查べるに従つて事の意外なものに驚かされるのである。

ダンニイの家は、アイルランド人から出てゐる。父母は相當な人達で、可成の家に住み、祖先傳來の宗教を忠實に守つて居た。天主教の僧侶は常に其の家を訪ねて、彼等が善良な生活をするやうに勵ましてゐた。ダンニイの兄妹達は皆家訓に服して、従順に學校に行き、教會に出席し、祈りもした。彼等は生長するに従つてなんでも一等良い仕事に有り付く事を望み、文明の常規に身を任せて疑う處もなく、地位相當に實際社會の必要に應じて行つたのである。

ダンニイは、此の柔和な群の中の黒羊であつた。學校の先生に對しては宛然石の如

くで、何一つ覺込みもしなければ、懲罰を受けても一向感じないといふ風であつた。又教會には怠けて出ない。祈りは眞平御免だ。家庭の生活なんて、馬鹿くしくして面白くも無い。嘗て一度も勉強しようの、善くなつて、働いて、相當な世渡りをしようのと考へて見た事がなかつたと、彼は自白してゐる。物心が付いて以來、常も教練を厭ひ、努力する事と言へば何でも好まなかつた。教練も努力も、頭から侮蔑つてゐた。一體何の爲めに起居動作に注意しなければならぬのか？、何だつて出世する必要があるのか？。然しそんなことはいくら考へたからとて、少しもらちはあかなかつた。

十四歳の時、もう家庭生活が嫌で堪らなくなつた。其平々凡々なのが苦痛である。厭で、馬鹿らしくつて仕様が無い。家に居れば快い寢床もある、食物も満腹食へる。が街頭で運任せにやつて見る方が更に面白いさうだ。遂に空の衣囊に兩手を突込んで、ブラリ家出をしたまゝ再び家へは歸らなかつた。

彼は忍び歩く肉食獸と化した。人間の軀である。かくしてロンドンの市街に捕物をあさつて歩くことゝなつた。多くは家庭で食乏しく、虐待に苦んで、街に飛出した少

年の一團は、ダンニイの強いのを甚く喜んだ。彼等は犯罪によつて生活して居り、戸外で寝なければならぬ程困つてはゐなかつた。本部といふものまであつて、それを或合宿所に置いてゐた。ダンニイは以前からその連中を皆知つてゐて、屢悪事を共にして居たのだから、彼が愈家を棄て、浮浪生活をするに云う決心を聞いた時には、皆の者は大喜でこれを迎へ、其の首領に載くことゝしたのである。

此の悪少年團が犯罪によつて、食料や宿料のために不自由をしないだけの金を儲けた時は、慰みに、その邊をうろついてゐるならず者達を襲撃して、思ふ存分に弄ぶ事をよくやる。ロンドンの貧民窟を歩いてゐると無頼青年の一團が、何か目的があるらしく一方に馳せて行くことがある。一見ならず者連の様であるが、實はならず者の恐れられてゐる少年犯人の一團であつて、彼等は警官もあまり干渉しないのを幸に、ならず者を襲ふて野蠻心を満足させてゐるのだ。實際青年の犯罪者は、闘つて見度くて堪らないらしい。で若しうまく必要な金が手に這入つて、お腹が脹れると、街の隅の方にブラ／＼してゐて、其の揚句は、いつもならず者に突撃を試みるのである。

ダンニイは、毎日の様に此種の闘争に加はつて、度々は敵を半殺しにさへする。それが彼の遊戯で、クリツケットかフットボールか體操かのやうに心得て居る。彼の徒黨は強く、蠻的で、無謀である。誰も手を出さず者がない。ダンニイとその一味徒黨が俄かに街の角を曲つて走つて來るのを見るや、門に立つ婦人は急いで戸口に隠れ、軒に遊ぶ子供は呼び返され、ならず者等は命惜しさに逃げ走ると云う光景を現出する。彼等が闘を始めると、人々は戸口や窓によつて、遠く眺める許りで、干渉を敢てしない。自分の息子が攻られてゐても近付けない。而も之はダンニイ一派の泥棒黨の本職ではなくつて、只氣晴しにやる惡戯に過ぎなかつた。

然るにダンニイが成長して力も兇惡心も増大すると共に、蠻行は更に他の方面に向つて行つた。彼等が好んで行つたのは、夜中に巡査を待伏して、鐵棒で後から撲り倒し、人事不省になつてゐる巡査を頭から足の先まで蹴り廻すのであつた。ダンニイは所謂「警官虐待者」となつたのである。

思うにこの卑劣不埒な行は、牢獄で苦しめられた腹癢せから來たのである。ダン

ニイが浮浪生活に入つて後間も無く、ある重罪の爲めに捕はれて三ヶ月の禁錮に處せられた。其犯罪が何であつたか、本人自身も只自慢らしく「重罪」であつたと云ふばかりで分らないが、多分、パン屋に使にやられた子供の手から十銭か二十銭を強奪した事でもあつたらしい。何にせよ、ダンニイは三ヶ月入牢して、それが爲に以前よりはすつと残忍に、兇暴に、危険になつた。三年も行はれてゐたら、少しは心を挫かれたらうが三ヶ月の入牢では、彼をより兇悪にする許りであつた。

彼が生計の道を立て、行つた方法を二つ三つ書けば、讀者には充分彼の心が讀めるであらうと思ふ。子供の時からこんな悪戯をやつた。即ち一人の子供を相棒にして置いて、乾物屋か八百屋の前を通り掛る時に、故と相棒に自分の帽子を引たくらせ、店の箱の中に擲らせる。相棒はダンニイを恐れるかの様に走つて逃げると、ダンニイは店の者に可い加減の断りを云ひ乍ら、帽子と一緒に卵子か林檎か、或時は腸詰の一ポンド位を帽子に潜ませて、奪るが早いか、逃た奴を追つかけると見せかけて、向ふに消えて仕舞ふ。斯くして後には萬引の名人となり、數ヶ月否數年に亘つて、萬引で生活

をしてゐた。終には品物を奪う位では満足せず、錢箱を貪る様になつた。彼の好んで用ひた方法は、仲間を一人伴れて、仕事を爲べき店を選び、誰も居ないと見るや往來から店に突入し、ダンニイが帳場に躍り上つて、錢箱の金をポケットに押込んでゐる間、仲間は次の間に通る戸口に横る。若しか、仕事が長くかつて、不幸番頭がスハこそと、驅け出して来て戸を開け、泥棒ツとダンニイを引つ捕へようとするれば、どつこい番頭さんは、横つてゐる同類の體に足を取られて、倒落を喰ふのである。

こんな横着者等の事であるから、なるべくならば男氣の無い、婆さん許りの店を見付出して、悪さをするのに定つてゐる。

又實收の可いのは泥酔漢を攫ふのであつた。對手が貧からうが金持であらうが、夜であらうが晝日中であらうが、委細かまはぬ。何時でも襲ふては必ず全裸にする。左に其の一例を擧るが、之によつても彼等悪青年の如何に冷酷で、街衢で悠々然と盜賊を行つて居たかを知る事が出来る。

或夜、ロンドンの裕福な邊りをうろ／＼捕獲物を求めて歩き廻つた末、ダンニイと

一人の仲間、ロンドンでも最上等の街區にある、とある家の戸口に、結構な服装をした一人の男を見つけた。ソレツとばかりに近よつて見ると熱く睡てゐる。向うの方には人通りもあるが側には誰も居ない。得たりと息を殺して、其の男の金銭も手帳も、懐中時計も鍵も、飾釦鈕から夫婦釦鈕、ハンカチーフ迄も奪つてしまつた。一度目を覺されたが、非常に優しく介抱をすると思せかけて、家迄もお伴しませうなごうまく欺き、安心して復眠る間に、仕事を終へて了つた。邊りを見廻せば人も無く、盗まれた男は静かに白河夜舟である。そこで二人の兇暴者は、向直るや否や其男を撲り付け、蹴飛ばして、無残にも半死半生の目に會せたとは一寸信じられない程である。之が別に譯も無く只悪戯でやるのだから驚く。其の男はアイルランド人で仲々暴い男であつた。不意を喰つて驚き乍らも抵抗を試みたが、遂に押し潰され踏にじられて、地上に倒れ乍ら、あへぎく助けを呼んだ。しかしもう二人は兩手を衣囊につこんで、悠悠其處を立ち去つた後であつた。

何食はぬ顔して辻まで來ると、巡査に出會はした。ダンニイは微笑を浮べて、

「巡査さん、あすこに恐ろしいアイルランド人が泥酔てゐますよ。二人位行かにや駄目ですよ。」

と平氣で呼びかけた。

此の連中の心理は常識では判断出來ないが、次の様な方面もある。著者の查べた處によると、盜賊間には互に相敬ふ精神があると云ふ一般の考は、必ずしも當つて居ない様だ。泥棒達はお互に同士を喰物にし、仲間を故意に警官に密告したり、又互に盗み合つたりする。ダンニイが代表する種類の盗人輩には、確かに遠慮なんど云ふ心は寸分も無い。之が此の話に於て特に注意すべき點である。別けてもダンニイは、人面獸心者中の最たるもの、最も下等な蠻人中の蠻人、詐者裏切者中の最も著るしい、極印付の人間である。それでゐて御自分では、少しでも下劣で忌はしい者とは思つてゐない。下卑てゐればある程益面白く、それが嗜好に適つてゐるのである。彼は夢にも良心の苦痛を知らず、想像の及ぶ限り陋劣な事を行つて、後では平氣で笑つてゐるといふ種類の人間である。

一八〇

實際、次の様な企をする心を、讀者は何と見るだらうか。ある毒婦が財布を掏つて、友達二人に居酒屋で馳走つてゐると、二人の盗人が直ぐに其の盗んだ財布に注目した。居酒屋に這入込みざま、不敵にも、其捕物を分けてよこせと女に迫つた。しかし渡さない。そこで暗號を以て、馳走されてゐる二人の婦人に、二圓呉れて遣るから、邪魔をしないで出て行けと告げた。二人の婦人は酒のコップを呑み乾して、馳走つてくれた女が酔つてうつとりしてゐる間に、お世辭たらしく其場を脱け出した。之を見た盗賊の一人は、コップに水を一ぱい注いで、電光石火、女の財布を攫み取り、仲間に渡してこれを走らせ、起ち上る女の顔に其の水をしたゝかに敲き付けた。水は開いた口に入り込む。女はむせんで、ごつごつばかりに背後に倒れる。又もや大コップに一ぱい喘ぐ口中へ非常な力でぶつつけて押倒した。床上に悶くを滅多やたらに、口と云はず顔と云はず浴せかけた揚句、落付拂つて、

「オイ、此處に女が瘡癩てゐるよ。もう少し水を呉れないか。」

と亭主に云つた。亭主は大急で大きな水壺をよこす。泥棒はそれを取つて尙も水を

注ぎかけ、遂に女を殆ど窒息する迄にして、

「少し経てば、可いだらう。」

と云つて出て仕舞つた。暫くして憐むべき女は、喉を詰らせ乍ら紫色の顔をして、ヨロ／＼其後を追ふたがもう徒勞であつた。

ダンニイは今でも笑ひながら此の話をするのである。余は思ふに、彼は現在其の様な行を憎み、もう再び爲ようとは思はないにしても、まだ／＼、それがそれ程殘忍で忌はしい行だとは思つてゐない様である。

こんな風にしてダンニイは合宿所で仲間者等と日を暮し、犯罪のみを事として、正直な事とは一時たりとも爲なかつた。その爲に始終警官の厄介になつたのである。幾度と無く捕縛せられ、幾度となく警察の拘留所で警官の復讐に遭ひ、幾度となく街を引つ立てられて行つた。彼は昔の犯罪の話をしては笑ふが、時には警官が拘留所で亂暴をやつた事を、面白相に話することがある。それは實に甚く踏み付けられたものである。

「警官等は俺の鼻柱をぶんなぐる。俺がドツと倒れかゝるやつを、一人が支へる。するとこんどは他の一人がイヤと云う程俺の頬を撲り付けるのだ。そして忽ち皆で寄つてたかつて長靴で蹴る、踏む、それやア残酷だよ！」

と云つて頭を振り／＼カラ／＼と笑ふ。彼は此の私刑を呼んで「身から出た錆だ」と、稱つてゐる。

實際それに相違無い。ダンニイは卑怯な、警官虐待をやつた者で、警察で復讐を受けるのは當り前である。と云へばそれまでだが、然し是では、此の社會の仇敵を變へて、有用な眞面目な市民とする事は出来ぬ。ダンニイは放免せられて出る度に、益々悪くなつて行つたのである。

「人間が牢に入つたら奈何なるか、教へて上げよう。」

とダンニイは前の方へ乗り出し、両手を卓子の上に載せて、口の邊に苦みを見せ、キツと余を見つめ乍ら語り出した。

「全く兇悪くなりますよ。暫く這入つて来た人なら、誰にでも訊いて御覽なさい。」

誰だつて可い。又どんな犯罪でも、奴が這入つた時に初犯であつても、玄人であつても、かまひません。それはもう、悪くなるやうに出来てまさあ、善くなりつこはありませんよ。全く兇悪くなるより仕方がない。」

こゝで體を起して、例のぬたくる調子で話を續けた。

「も一つは、這入つた時よりも、悪戯を餘計に覺えてますよ。牢屋の中では、一日の内に娑婆の二週間分位泥棒があります。それは道理でさあ、大勢の人間を一緒に閉込めて置いて、獸類扱にして、碌に飯も食はさないでゐて、おまけに何の教訓も與へないでは、其果は知れてるでせう。中のことは娑婆に居ては、想像も付きませんよ。牢屋の中に多量の粗糞が密かに持ち込まれることを信せられぬでせう。儲の爲に密買を爲ないやうな看守は、まあ絶無せんネ。食品店は飢れた人間の心を誘つて、あらゆる智慧を絞らせます。實際俺は外で習つたよも、すつと澤山の放棄を、中で習ひました。全くですよ。」

道徳的教訓は彼の上に何の力も無かつた。他の囚人に對しても同じではなからうか

と思ふのであるが、教誨師は一度も彼の部屋に入つて、個人的に教へを與へ無かつたのである。一度と雖も、典獄も教誨師も、誰一人、此犯罪者の眠れる良心を刺戟し、呼び覺してやらうとした者は無かつたのである。典獄は、社會の代表者として彼を受け、之を監禁する許り、教誨師は、宗教を代表して、日曜日に祈禱文を読み、一場の説教を試むる外何も爲ない。知らぬが佛の納税者は、牢獄の中の惡者共は、日々に改善せられ、救に入れられて居る事と正直に信じて、孫の時代にでもなつたら、法律破りの世話も要らなくなる事であらうなどと云ふ夢を見て御座る。然るに、牢獄の中のダンニイは、出獄の上はかうしてやらうか、あゝしてやらうかと計畫を練り、新しい犯罪を心の中に復習してゐたのである。

それでも、たつた一度だけ、ダンニイが教誨師と膝付き合せて話した事があつた。ある刑期を了へた折、望まれもしない教誨師の處にダンニイは押掛けて行つた。そして、囚人補助會で備へられてゐる衣物を一着與へて呉れと頼んだ。處が教誨師は彼を凝視んで、頭を振つて答へた。

「お前の分なんか有りはしないよ。お前は一二週間もしたら再這入つて來るのだから。」

それを聞いたダンニイは、夫のジョーの様に怒り心頭に發した。が漸く抑へて、

「ハイ、出て行く人間に飛んだ御深切をおかけなさるな。」
と叫んで而して笑つた。若し教誨師が悟り得たならば、其笑は即ち彼を天に訴へるの言葉であつたのである。

序ながら、此教誨師の話は、眞によく、ゼームス教授の所謂古手の宗教に關して述べた事に裏書するものである。當局者は教誨師と云ふ者を、チャンと牢屋の中に置いて、公然と宗教を代表せしめ、且つ神の命を奉じて囚人を訪ぬべき正式の使者として許してゐる。而るに、彼が囚人に齎す基督教は、彼等の日課なる苦役の一種類に過ぎないのである。教誨師とても御苦勞は御苦勞だ。一日頑迷無智で、而も無禮な犯罪人を訪ねてゐては甚だ退屈であらう。が然し、其の爲めに給料を受けて居ながら、訪問をしても無用であると云つて、家に許り納つてゐるのはどんなものであらうか。少しく

理の解つた人ならば、此の様な教誨師の働で、罪人の悔改を促し得るとは信じま
い。それよりは寧ろ、自ら罪に惱んで悔改めた實験を有する、傳道者から成る監獄傳
道隊の方が、遙かに強く宗教の力を牢屋の人に傳へて、悔悛を促し得るであらう。
蓋し是は私の一家言ではないといふことを、斷じて言ひ得るのである。

ダンニイは前に述べた如く、犯罪者の中でも最も下等な者を代表してゐる。彼の心
の陋劣野卑極み無き事を思へば、誰れにだつて、彼が悪心を改めて、世間並に生活す
る事が出来やうとは夢にも信じられない。しかし今一つ附け加へて其の心の眞に下等
で、汚れて底の知れない事を話して置度い。それから彼が回心するに至つた顛末に移
つて行かう。處で其の話といふのは、牢屋の中で起つた事である。

監獄の看守が神經に惱まされるのは一寸妙だが、無いことでは無い。著者が嘗てワ
ームウッド・スクラップスの牢獄を訪ねると、只一人の看守が武器なしで、大小の恐
ろしい道具を持って大工仕事を爲てゐる數名の囚人に監督てゐた。私は其の時ふと、
若し其の中に恐ろしい眼付の男がゐて、ギロリと睨み付けでもして看守を慄え上らし

め、もう再び一人で番に付く様な事は爲無くなつたと云ふ様な事でもあらば、嚙面
白い話しが出来上るであらうと思つた。處がダンニイの話しが、私の想像の空でな
かつた事を證明してゐる。彼は次の様に話して呉れた。

「ある看守が、ジャンプ宗の囚人共を監視してゐたが、先生何でも思切り嚴格にやつ
て、それで回心させてやらうと考へてゐたらしい。處が彼は、其中の一人には馬鹿
に畏縮だつてゐた。何故かしら己は看守等と仲がよくつて、苦役も軽いのを頂戴
し、凡て寛大にされてゐたが、先生或日のこと己の處にやつて来て、「オイ、あの男
が（と自分の怖がつてゐる囚人の名を云つて）私を規てゐる事を密告て呉れりや、
貴様の爲になるぞ」と言ふ。己は、密告などは爲ませぬと云つたが、間もなく其の
囚人は、何處か他へ遣られてしまつた。すると思ひ掛け無くも典獄の前に呼出され
て、お前は善く彼の看守を救つて呉れた。お前が居なかつたら看守は殺される處であ
つた。で、お前の刑期が軽減せられる様に取計らつてやらうと云はれたのである。
さすがの己も、呆氣に取られて物が云へなんだ。」